
そして、始まる

大平麻由理

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

そして、始まる

【Nコード】

N8783E

【作者名】

大平麻由理

【あらすじ】

美術教師の鷺野凜香^{さぎのりんか}はひよんな事から音楽室でピアノの指導をするはめに。音楽教師の鶴本広海^{つるみひろみ}とは、どうも過去に何かがあったような怪しい雰囲気。過去の秘密とはいったい何？そして二人の恋の行方は……。旧タイトル『クライスレリアーナ』はシューマンのピアノ曲のタイトルです。

1・夏の日に（前書き）

そして、始まる（旧タイトル、クライスレリアーナ）にお越しいただき、ありがとうございます。

ただいま、全編にわたり、加筆修正中です。

今までお寄せくださった皆様のご意見ご感想を参考にさせていただき、改稿に励みたいと思っています。

尚、旧クライスレリアーナの内容と大筋であまり変わりはありませんが、新しいエピソードも加わっていますので、話数は以前より増えています。

こちらに掲載中のものは、すべて改稿済みになっています。

以前掲載していましたが番外編も、本編に組み込んでいく予定です。

1・夏の日

窓の外には真夏の陽射しがじりじりと照りつけるグラウンドが見える。

空はどこまでも青く、遙か遠くに立ち昇る積乱雲は、きつと見知らぬ大地に恵みの雨をもたらしているに違いない。

気温はとうに三十五度を超えているというのに、陸上部と野球部のメンバーたちはいつもと変わりなく大きな掛け声を響かせて、所狭しと走り回る。

野球部との交代を待つサッカー部の長髪イケメンが、木陰で飽きることなくリフティングを繰り返しているのも日課のようなものだ。

グラウンド横のフェンスの向こうにはテニス部の女子生徒がボールを追ってコートを駆け回っている。

バイザーの下にのぞく焼けた肌とは対照的に浮き立つ白い歯が、彼女たちの濁りのない真っ直ぐな心を映し出しているようだ。

日焼けは乙女の敵だというのに、太陽の下、躊躇することなくラケットを握るその姿は、まさしく青春真っ只中と呼ぶにふさわしい。

鷺野凜香^{さぎのりんか}は窓から顔を離し、黒板の上に並んだ大音楽家達の肖像画をぼんやりと眺める。

バッハにベートーヴェン、モーツァルトにブラームス。

あれがシューマンか……などつつばやきながら、再び窓の外に視線を落とした。

防音設備が整い、冷暖房完備の音楽室の窓から見下ろす光景は、

とてもこの世のものとは思えなかった。

ガラス一枚を隔てただけで、そこには天国と地獄の差が生まれる。もう一度黒板の上をざっと見渡してみるが……。残念ながら、オツフェンバックの肖像画は見当たらなかった。

もちろん、窓の内側が天国で、外側が地獄だ。

彼らが熱中症にならなければいいのだがとせめてもの温情を示した後、凜香は肩に手をやり首を回しながら、ピアノの前に向かった。

外にいる生徒達には大変申し訳ないと思う。

幸か不幸か、誰よりも暑がりのこの主のおかげで、音楽室の温度は二十八度を大きく下回っているはずだった。

と言うことは……。必然的に、ここにいる凜香もこの学校の生徒なのかと問われるだろう。

が、しかし、音楽室にいるからと言って、必ずしも生徒であるとは限らない。

では、生徒でないとすれば、いったい何者なのか。答えは簡単だ。

教師だ。

真夏の午後、音楽室にいる鷺野凜香は、どういうわけかこの高校の美術教師……らしい。

凜香は、この県立東高等学校、略して東高に勤めて今年で二年目になる。

以前の勤務先と合わせると、教師歴は五年。大学院を出て職歴五年ということば……。

足し算をすればすぐに答えは出てくる。

卒業した年から正規職員として県の教員として採用されているので、年齢は二十九歳。

アラサーと言われる域に十分到達している年齢だ。

昨年までは堂々と自分の歳を言えたはずなのに、今年になって急に年齢を口にしなくなった。

というか、いつの間にか誰にも年齢を聞かれなくなったので、あえて言う必要もなくなったというのが正しい。

凜香は最近、二十九という年齢に、微妙な気分を味わってもいた。

生徒達がおもしろおかしく噂しているのも知っている。

あの先生が結婚なんて出来るわけないよね、だって男みたいだもの……と。

かと思えば、鷺野先生ってまだ独身なんだ、婚活がんばらないと間に合わないよなどと、本人を前に、あからさまに声を掛けてきたりもする。

いったい、何が間に合わないんだ。独身でどこが悪い。

人生には様々な選択肢があるということ、今のうちからきつちりと学んでおいた方がいいぞ……とこっさり毒づくのだが、決して生徒の前でそれを堂々と宣言する勇氣はない。

だからと言って、彼らの言うことをいちいち真に受けていては身が持たない。

長くこの仕事を続けるための秘訣は、そういったプライベートに関する噂を右から左へ受け流すことだと、凜香は最近身を持って学んだばかりだった。

では、絵筆とベレー帽が似合うはずの凜香が、なぜ冷暖房完備の音楽室にいるのか？

夏休みだというのに、学校に出勤してきてイライラを募らせた拳句、仕事をサボるためにここに涼みに来ているとでも？

あるいは何か用事があって、たまたまこの一時だけ音楽室に滞在していた……という可能性もなくはない。

だが、どちらも全くのハズレではないにしろ不正解だ。

凜香ともあるう人物が、そのようなありきたりの理由で音楽室で羽を伸ばすなど、あってはならないことだから。

真面目一徹、首尾一貫。品行方正で生徒の信頼も厚い。

仕事をサボるなんて言葉が凜香の辞書にあるはずもなく。

絵筆を楽譜に持ち替え、イーゼルならぬ、グランドピアノに向かう姿は、もはやこの主すらも近寄ることをためらうくらい毅然としたオーラを立ち上らせていた。

そう……。凜香がここにいる理由は、教育系の学部や学科への進学を目指す生徒に、ピアノと声楽の指導をするためなのだ。

進学先によつては、入試に実技課題を出すところもある。

楽譜も読めない、ピアノを弾いたことはおろか、触ったことすらないという生徒のために、特別に開講している補習講座を受け持っているのだ。

凜香はテキストにしているバイエルという教則本をぺらぺらとめくって、ため息をつく。

まずはト音記号とヘ音記号の違いから説明しなくてはならない。
そして音符の長さや休符の数え方も懇切丁寧に指導する。

あれもこれもと指導内容をシュミレーションするだけで、気が滅
入ってくる。

早くこの拷問のような補習講座を終えて、本来のポジションであ
る美術室に帰りたいと願うも、時計の針は少しも動かない。
残念ながらまだ数時間、ここに停留しなければならぬ。

それにしても遅い。指定の時刻を十分も過ぎていくというのに、
生徒が来ないのだ。

凜香は立ち上がり、また窓際に立って、グラウンドに視線を彷徨
させた。

ちょうど窓の真下をキャンバスを抱えた女子生徒が通りかかる。
美術部員だ。

Fの五十号だろうか。いや六十号かもしれない。
小柄な彼女が持つと、キャンバスが一人で歩いているように見え
る。

秋の学園祭に向けて、着々と準備が進んでいるようだ。

おっと、つまずいた。彼女がよろめき、キャンバスが大きく揺れ
る。

思わず鍵に手を掛け、窓を開けて彼女の名前を叫びそうになっ
たが、次に繰り広げられる光景にその手を止めた。

あれは確か、生徒会執行部の男子生徒ではないだろうか。
咄嗟に彼女に近寄り、その大きな手で事もなげにキャンバスをつ
かむ。

もう一方の手はつまずきかけた彼女の腕をつかんでいた。

大丈夫？　とでも訊ねたのだろうか。男子生徒が彼女を覗き込みながら、心配そうな顔をしている。

するとどうだろう。ここから見てもはっきりとわかるくらい、みるみる彼女の顔が赤くなっていく。

それを見た彼が、彼女をつかんだままの手を慌てて離し、これまた負けないくらい赤い顔をして、目を逸らした。

なんだ、そういうことだったのかと目を細め、ふふんと鼻を鳴らす。

凜香は窓にもたれかかり、今の彼らに重ね合わせるようにして高校時代の自分を思い出していた。

2・イエローオーカーのうねり

「鷺野、ホワイト貸してくれ」

「チタニウムならありますけど」

「ああ、それでいい。ついでにイエローオーカーも」

「はい……」

凜香は絵の具を渡しながら、後悔の念が次々と込み上げてくる。
どうして宇治の隣に陣取ってしまったのだらうと。

授業で使われていない第二美術室の中央のテーブルに、白い布が置かれていた。

自然に見えるよう工夫して皺を作り、その上にビンや果物、古いランプなどが無造作に並べられている。

そしてそれを取り囲むように美術部員がイーゼルを立てて、キャンバスに油絵を描いているのだ。

どうしてもこの位置でランプを描きたかったため、周囲を確認せずに場所取りをしたところ、後になって取り返しのつかないことをしてしまったと気付くのだがもう遅い。

凜香のすぐ近くに先輩である宇治が絵の具まみれのシャツをまとい、キャンバスを睨みつけていたのだ。

三年生なのに引退することもなく始終部活に顔を出し、凄まじいスピードで油絵を描いている宇治は、凜香にとって、あまり好ましい先輩ではなかった。

技術面では学ぶところは多いのだが、その性格がどうも好きになれなかったのだ。

まあ別に同じ部活の先輩だからと言って好きにならなければいけない義務があるわけでもなく、適当に距離を取って差し障りのない後輩を演じていればそれでいい。

それでいいのだが……。

年々縮小ぎみ傾向にある美術部において、少人数であればあるほど、先輩後輩の繋がりも親密になる。

凜香のどこが気に入ったのか、はたまた、ただ単に一風変わった後輩としてちょっかいをかけているだけなのかはわからないが、とにかく頻繁に凜香の領域に侵入してくる宇治がうつとおしくてならなかった。

二年になってからはますますひどくなり、凜香の絵の具はほとんどこの隣の男に使われてしまったと言っても過言ではないくらい、悲惨な状況が続いている。

小学校の時に使っていた水彩絵の具と違って、油絵の具は値段も張る。

そうそう何度も親にねだるわけにもいかず、もらったばかりの今月の小遣いも、ついに残り数百円というところまで来てしまった。

同じ静物画を描いていれば、必然的に色も同じものを使う場合が多くなる。

チタニウムホワイトもイエローオーカーもまだまだ必要なのに、宇治に貸したが最後、全部使われてしまうのも覚悟しなければならぬ。

そうすると、いつまでたっても自分の絵が完成しないということ

になる。何という悪循環。

宇治の絵の具の消費量は、普通では考えられないほど莫大だ。今も聞こえているが、ペインティングナイフでガシガシペタペタと描く技法は、宇治の手にかかれば、信じられないほど多量の絵の具を必要とするのだ。

ほぼ同じ時間をかけて描いているというのに、横から見る宇治の作品の絵の具の厚みは尋常じゃない。

イエローオーカーが山脈のようにうねり、背景にまで見事な表情を生み出す。

嫌いではないのだ。

偶然が生み出す産物なのかもしれないが、宇治の描き出す世界は凜香の魂をも揺さぶる。

ただし。その絵の具のほとんどが凜香から奪ったものであるというのも事実。

そう考えるだけで凜香のはらわたがぐつぐつと煮えくり返ってくる。もう我慢もここまでだ。

ガシガシ、ガシガシ。

ペタペタ、ペタペタ……。

そんな凜香の思いなどいっつこうに気付かないまま、ひたすら絵の具を盛って描き続ける宇治に、彼女はついに切れた。

「先輩。私が貸した絵の具、全部返して下さい。耳をそろえて、全部！先輩だと思って黙っていたけど、もう我慢出来ない。返せっ

！返してくれないのなら、今までのあんたの油絵の作品、差し押さえるぞ！」

他の部員が一斉に凜香に注目しているにもかかわらずまくし立てる。

こんな非常識な先輩など、どうなってもいい。退部も覚悟で今までの不満をすべてぶちまける。

「貸してだと？ たったの一度も返してくれたことがないくせに。よくも言えたものだな。後輩を困らせるのがそんなに楽しいのか。おい、黙ってないでなんとか言え！ あんたの技術のすばらしさに免じて今まで大目に見てきたが、もう我慢ならない。早く、早く返せ！ 私の絵の具。全部返せよ、おい、こらっ！」

ラ行を巻き舌にしながら、自慢のロングヘアを振り乱し、鬼の形相で宇治につかみかかる。

歳の近い弟がいる凜香にとって、取っ組み合いのけんかなど珍しくもなんともない。

最近暴れてなかったことも手伝って、ここぞとばかりに凜香の魂にスイッチが入る。

学年女子一番の高身長を誇る凜香は、男子平均身長の宇治に全く引けを取らない。

襟首をつかまれた宇治は自分の手を下に垂らしたまま、凜香とにらみ合う形になる。

女子には手出しはしないとも言っただろうか。

そんなものこの場では何の意味もなさない。凜香はますます復讐の炎を燃え上がらせ、こぶしを振りかざした時だった。

それまでなすがままだった宇治が、こぶしを掲げた凜香の手首を
いとも簡単につかみ、襟首をわしづかみにしているもう一方の手も
ふりほどいたのだ。

「鷺野……。わかった。俺の絵、おまえにやる。あさつての日曜、
画材店に行くから、おまえも来い」

つかまれていた手首が凜香の頭上でふいに自由になる。

目の前の男は何もなかったかのように再びイーゼルの前に腰を下
ろし、キャンバスに向かってペインティングナイフを操り始めるの
だ。

他の部員から安堵のため息が漏れる。

凜香も怒りが冷めていくにつれて、今度は反対に気恥ずかしさが
募っていく。

そう……。これが凜香の唯一の欠点なのだ。

理不尽なことが起きると、激昂して周りが見えなくなる。おまけ
に言葉遣いも悪い。

小さい頃の遊び相手が弟とその友人たちだったせいもあるのだろ
うか。

いつしかこうなってしまった自分が時々情けなくなるのだ。

そしてやって来た日曜日。凜香は宇治に言われた待ち合わせ場所
に出かけて行くのだが、あのけんか以来、まともに口を利いていな
い。

あの日の帰り間際に待ち合わせ場所を告げてきたきり、昨日の土

曜日は全く顔を合わせていないのだ。

凜香はためらいながらも、去年買った少しレースのついたブラウスとデニムのスカートという微妙な服装で、五分前には待ち合わせ場所に着くように家を出た。

画材店ということは、きっと絵の具を買って返してくれるということなのだろう。

新品の絵の具を貸したわけではないので、あつかましいと思われないかと今度は別の次元で気を遣い落ち着かない。

でもこれも仕方ない。絵の具を返せと言ったのは、自分なのだ。そして、うそかまことか、絵もくれると言った。

物につられるわけではないが、今日一日をやり過ごせば、宇治とてこれ以上凜香にかまってこなくなるだろうと思っていた。

一昨日の凜香の失態を見れば、誰だってそんな激情型の女と距離をおこうと思うに決まっている。

そうだ。そうに違いない。

凜香は自分自身を奮い立たせると、背筋をピンと伸ばして、駅に向かって颯爽と歩き始めた。

3・恋の第一段階

「よお！」

駅前の時計の下で、宇治が今までに見せたことのないような笑顔を貼り付けて手を振っていた。

「ど、どうも……」

いつもの無愛想で高慢な宇治とはあまりにも違いすぎるため、返事に困った凜香はガラにもなく俯き、口ごもってしまう。

凜香の家と高校のちょうど中間にあるこの駅は、特急電車も停車する乗降客の多いところで、老舗デパートをはじめ商店街も常に賑わいを見せている。

ファストフードの店も一通り揃っているので、学校帰りの学生にも人気のスポットだ。

「さあ、行くぞ」

そう言っただけで差し出されたのは……。宇治の手だった。

あちこちに絵の具がついている手。

凜香とあまり大きさの変わらない、だけど、ごつごつした手。

彼の手がさも当然のように凜香の手をつかまえる。

「せ、せ、先輩！　なんでこうなるんですか？」

繋がった手を見ておろおろする凜香の疑問などいっさい耳を貸さず、宇治がぐんぐん歩き始める。

凜香は生まれて初めての出来事に目を白黒させていた。

たとえ部活の仲間ではあっても、男の人と待ち合わせをしたのも初めてならば、手を繋いだのも初めてだ。

道行く人が全員こつちを見ているような気がして、顔を上げて歩くのが辛い。

画材店に入ってからレジで精算をする時以外は、ずっと手はつながれたままだった。

うかつにも横を向こうものなら、親ですら近年そこまで至近距離で見たことが無いというくらい近くに宇治の顔がある。

基本的に、同じ背格好の二人なものだから、目が合った時の気まぐさといったらない。

出来るだけ横を向かないように首を前向きにしっかりと固定した。

買い物のおと、宇治のお気に入りだという丼物の専門店に連れて行かれ、生まれて初めて親子丼なるものを食べた。

もしかしたら子どもの頃、当時まだ生きていた祖母に作ってもらったことがあったのかもしれないが、今となってはそれも定かではない。

母親は父親と共に四六時中働いているため、丼物のように個別に作る料理は基本的に食卓に登場しないのが鷺野家の日常だった。

カレーにおでん、シチューに豚汁。大なべに三日分くらいの分量を作るのが彼女の母親の定番料理なのだ。

でもその店では、調理場を囲むようにして設置してあるカウンタ

ーに客が座るため、作っている過程が丸見えだった。

親子丼などきつと手間がかかって上級の料理テクニクを必要とするものだとばかり思っていたが、実際はそれほどでもないし知り驚く。

鶏肉とネギを散らした薄くて小さな片手鍋に甘辛醤油の煮汁を入れ、くつくつ煮立ったら卵でとじ、熱々のご飯に載せて、はい、出来上がりとなる。ものの数分の調理時間だ。

凜香はその工程を穴が開くほど眺め続けたおかげで、親子丼の作り方をおぼろげながらも理解できた。

これなら自分にも出来るかもしれない。家事全般は概ね苦手な凜香だが、弟に作ってやればきつと喜ぶだろうなどと思いを巡らせる。

凜香の隣で、カツ丼大盛りをぺろりと平らげ、白い歯を見せて満足そうに笑う宇治の存在をすっかり忘れていた凜香は、あわてて視線を調理場から自分のからっぽの丼に移し、遠慮がちにご馳走さまでと言って頭を下げた。

そして帰り道。今日の目的も果たし、凜香のカバンは返してもらった絵の具の重みですしつと沈み込む。

まだ手は繋がれたままだが、もうこれ以上一緒にいる理由も見つからない今、駅で即刻別れるものだとばかり思っていた凜香は、宇治の予想だにしない行動に首を傾げる。

そのまま駅構内を通り抜け、北側にある道を上がって行こうとするのだ。

「あ、あの。どこに行くんですか？ 私、電車に乗らないと帰れな

いんですが……」

凜香はさも困ったような顔をして、宇治に訴える。

「まだいいだろ？　せつかくのデートだっていうのに、こんなに早くおまえを帰すわけにはいかないよ。もう少し……。一緒にいたいんだ」

凜香は耳を疑うような宇治の言葉にびっくりしすぎて、開いた口が塞がらない。

で、で、デート？　この状況は、デートなのか？

凜香は慌てて、本日の自分の行動を振り返ってみる。

宇治と手を繋ぎ、一緒に買い物や食事をして、拳句、別れを惜しまれた……。

これはやっぱり……。間違いない。正真正銘、デートなるものだ。誰がなんと言おうとデートに違いない。

先日見たテレビドラマで主人公が彼女と過ごしていた休日と全く同じ行程だ。

凜香は初めてのデートなるものに、胸をときめかせる。が、しかし。

普通、愛しい相手と一緒にだからこそ胸が高鳴るはずなのに、凜香の脳裏には一切その部分が抜け落ちていた。

純粹にデートそのものの響きに舞い上がっていたのだ。

ドラマではデートの締めくくりは、主人公の一人暮らしのマンションに彼女を招き入れる場面になっていた。

ただし、世間話をしただけで、すぐに帰って行くというつまらな

い設定だったはずだ。

確か宇治の家はこの近辺だと聞いている。ということは、つまりこの後宇治も、やはりドラマと同じ手段を用いる可能性は……非常に高い。

「なあ、鷺野。今から、俺の家に来ないか？」

ほらほらほら。やっぱりそう来たか。

凜香は自分の妄想が現実のものになったことに満足感を覚えほくそ笑む。

でも宇治の家に行つてどうするのだろう。家族に紹介されるのだろうか。

それとも誰もいない部屋で、二人きり……。

凜香はよからぬ妄想が脳裏に渦巻くのを必死の思いで打ち消す。ないない。絶対にそんなことなどありえるはずもなく。

一昨日には危つく取っ組み合いのけんかになるところだったのだ。そんな凶暴な女を相手に、宇治が本気になるわけなんかない。

ついうっかり、デートという言葉に騙されるところだった。

宇治はきつと深い意味もなく口走っただけなのだろう。だって女同士で遊んでもデートと言ったりするじゃないか。

凜香は何も危険はないと判断し、うんと頷いた。

宇治の家に行くことをあっさり了解してしまったのだ。

「ほんとにいいのか？」

宇治の顔がやたら真剣味を帯びているのが気になるが、だからと

言って、今さらやっぱり行きませんかとは言えない。

凜香はその拍子にふと金曜日のもうひとつの約束を思い出していた。

貸した絵の具と引き換えに宇治の作品をもらうというあの約束を。

そうか。そうだったのか。その絵を渡すため、家に来いと誘ったに違いない。

凜香はようやく宇治の真意がわかり、ほっと胸を撫で下ろす。

「なあ、鷺野。俺おまえのことが……」

いったいどんな絵をくれるのだろう。

前回の楽器をモチーフにした静物画は部員の誰もが絶賛した完成度の高い作品だった。

春休みに部活メンバー全員で山にスケッチ旅行に行った時、宇治が描いた山ツツジの絵も捨てがたい。

空の蒼とツツジの朱がなんともいえない色気をかもし出し、インパクトのある良い絵だった。

「おまえが好きなんだ。おまえが入学してきた時、なんて大人っぽい雰囲気の子だろうって思った。それから目が離せなくなって……」

いや、早まってはだめだ。今製作中のランプの静物画もとてもいい。

あれが仕上がってからいただくというのも一案だ。

それよりも、自宅に行けば、見たことのない斬新な作品が埋もれている可能性だってある。

なんというチャンス。凜香の目はまだ見ぬ作品に思いを巡らせ、宇治の話など一切聞く耳を持たない。

「鷺野。おまえが俺を見てくれないのはわかってる。無理強いはしないが、これから先、少しずつでいいから俺を見てくれないか。絵じゃなくて、俺自身を見て欲しいんだ」

見て欲しい……。そりゃあ見ますよ。

凜香は宇治の絵がずらっと並んだ夢のような空間を想像して、身悶えそうになる寸前にはっと我に返る。

今、何て言った？ 俺自身を見て欲しいだと？ なんだ、それ。

「さーぎーのー！ おまえ、ちゃんと聞いているの？」

凜香は宇治の声に、遠くを彷徨っていた意識を呼び戻される。

「だから、おまえと付き合いたいって言ってるんだよ」

「付き合いたい？ この私と？」

「そうだ。ダメか？」

凜香は想像だになかったこの展開に、言葉を詰まらせる。

「好きだ。俺はおまえが好きなんだ。次はおまえをモデルに絵を描こうと思ってる」

「宇治……先輩。あ、あの。私、まだ……」

凜香は繋がれた手をそのままに、じりじりと後ずさる。

「うん。わかってる。今すぐ答えをくれとは言わない。……それとも、他に好きな奴がいるのか？」

凜香がいくら後退しても宇治がにじり寄るので、いつまでたつてもその差は一向に変化しない。

これ以上下がると凜香のかかどが民家に侵入してしまう。

「い、いません。私、そういうの、全くダメで。でも、先輩。ほんとに私でいいんですか？先輩を殴ろうとしたんですよ。皆から男って言われてるし」

仕方なくその場に立ち止まった凜香は、近すぎる宇治に顔をそむけるようにして言った。

真実ははっきりと伝えておく必要がある。

「すべてを含めて、おまえがいいんだ」

宇治が凜香の手をぎゅっと握りしめた。そして再び歩き始める。もっ何が何だかわからなくなつて凜香の脳内はぐちゃぐちゃに混乱する。

生まれて初めて告白されて、拳句、この野蛮な性格まで好きだと言ってくれる奇特な宇治を盗み見る。

宇治を目当てに入部してきた後輩がいるのも言わずと知れた事実だが、改めてじっくりと見てみると、それなりに整った顔立ちをしていると思う。

でも、たった今告白されたばかりだというのに、宇治自身からと

きめきを見出すことは出来なかった。

この人と一緒にいて幸せなのかと自分自身に問えば、もちろん、それはノーだった。

いや、だからと言って不幸というわけでもなく、そして別段嫌でもない。

つまり、どうでもいい相手ということだ。

でも自分を好きだと言ってくれる人に、これから先も出会えるという保障はどこにもない。このチャンスは大切にされた方がいいのかもしれない。

凜香は複雑な思いを胸に、宇治に手を引かれ大きな門構えのある邸宅に入って行った。

4・男って……

凜香は、脇目も振らず、駅に向かって走っていた。

さつき宇治に告白された場所に差し掛かると、よりいっそうスピードを上げてそこを駆け抜け、唇をかみしめた。血の味がするほどに。

たった今、逃げるように飛び出してきた宇治の家は、その立派な門構えに全く見劣りしない荘厳な和風建築の屋敷だった。

庭園と呼ぶにふさわしい手入れの行き届いた庭にははすの葉が浮かぶ池があり、色とりどりの鯉が優雅に尾ひれを揺らめかせていた。

家族は誰もいなかった。兄弟は社会人ですでに家を出て暮しているし、両親は親戚のところに出かけていると宇治が言った。

凜香が通されたのは二階。二間続きの和室が宇治の部屋だった。明るいその部屋には片側の壁一面に絵が立てかけてあり、描きかけのものも含めると、優に五十枚以上はあったと思う。

どれでもいいぞ、おまえの好きなものを選べと言って、重なった絵をずらして見やすく広げる。

そして、どこかで見たことがあるような裸婦の絵に目を留める。世界的にも有名な画家の模写だ。

いつもの大量に絵の具を盛り上げる技法はなりを潜め、印象派独特の柔らかいタッチをそのまま忠実に模写しているのだ。

こういう描き方もできるなんて、知らなかった。

凜香はその絵の筆運びや、色の置き方に目を奪われる。

そして同じようなタッチの絵を探すべく、部屋の隅に隠すように置いてあった一枚に手を伸ばした。

重なった前の絵の後方から全体が現れた瞬間、凜香は言葉を失った。

そこにいた絵筆を握る女性は……。

見慣れた制服をまとい、キャンバスに向かうその人物は、紛れもなく凜香自身だったのだ。

でも、それだけはだめだ、他のにしてくれと言って、宇治の手によってその絵は元の場所に押し戻される。

そして凜香に向き合った宇治がとんでもないことを口にするのだ。ブラウスのボタンに手を掛けながら……。

次の瞬間、凜香の振り上げた右手が彼の頬を打ち、即座にカバンを手すると二階から脱兎のごとく駆け下りる。

庭を通り抜けた時、背中で鯉が跳ねる音を聞いた。

宇治の目が、欲情する男のそれだと本能的に感じ取り、身の危険を感じた凜香は、脳の指令を待たずして行動に出たというわけだ。

おまえのヌードが描きたい。だから、協力してくれないか……。

宇治のその時のじつとりとした視線と震えるような声が何度もフラッシュバックする。

凜香は宇治の要望を拒絶したことは決して間違っていないかったと自分自身に何度も言い聞かせた。

次の日、何事もなかったかのような顔をして部室に現れた宇治に、

きつぱりと交際できないと断りを入れたのは、当然の成り行きだった。

そんな苦い思い出のある高校時代だったが、今となってはそれもいい経験だったと思えるようになった。

何もいきなり殴らなくても、それは出来ません、服を着たままでならモデルになりますとはっきり言えばよかったのかもしれない。

宇治は決して無理強いをするような男ではなかったのだから。

それにしても……。絵をもらいそこねたことだけは失敗だったと、凜香は短気で世間知らずの自分を悔やむのだった。

窓の下を見ると、さっきまでいたあの二人がもうどこにもいないことに気付く。

凜香はあわてて、ちょうどシューマンの肖像画の真上にある時計に目をやった。

あれから十五分も経っているではないか。なのに、次に約束している生徒が来ないのはどういうわけなのだろう。

凜香のイライラはピークに達してくる。

美術教師なのに、どうしてこんな畑違いの仕事に首を突っ込まなければならぬのだろうと、自分の置かれた立場を訝しく思う。

なぜ最初に、ピアノの指導など出来ないと断らなかったのだろう。凜香の顔が後悔の念で次第に歪んでくる。他人の目にどう映ろうがかまわないが、とにかく音楽室に拘留されるようになった理由を考えるだけで、頭痛が起きるくらい不快になるのだ。

それもこれもすべて生徒のためだと思うことで、なんとか自分を騙し今日まで続けて来たのだが、そろそろ限界に近付いている。

凜香がこの仕事を任された原因は……。

彼女の最も隠しておきたい過去の汚点をすっかり握りこんで、脅迫まがいなそれをちらつかせ、俺様を気取る男。つまり、この音楽室の主でもある、男性教諭の仕業なのだ。

凜香は子どもの頃に、数年間ピアノを習ったことがあったが、基本基本とうるさいピアノ教師が、いつまでたつてもあこがれのシューマンやショパンの曲を弾かせてくれなかったため、積み重なった恨みが爆発して、暴言を吐いてレッスンを辞めたという苦々しい過去がある。

今になれば基礎の大切さも理解できる。生徒としてあるまじき態度を取ってしまったことも反省している。

ただし、子どものやる気を頭ごなしに否定するその指導法には今でも納得がいかない。

その後凜香は二度とどの指導者にもつくことはなく、自分で曲を紐解き、シューマンもショパンもそれなりに弾けるようにはなった。あくまでも趣味の域を出ない程度のレベルでしかないが。

なのに、あいつときたら……。

これが凜香の隠しておきたい過去の汚点……ではない。

こんな物、今まで彼女が巻き起こしてきた数々の珍事の中では、ねずみの耳垢ほどの出来事でしかない。

一向に生徒は姿を見せない。やはり凜香の指導が厳しすぎるのだろうか。

凜香は自分の過去の経験を生かし、生徒の意思は十分に尊重して指導してきたつもりだった。

ところが残念なことに、昨日も一人、脱落者が出てしまったのだ。

家に鍵盤楽器がない場合、補習講座が開かれていない時間帯に音楽室と準備室のピアノやキーボードを自由に使ってもいいと言っているにもかかわらず、全く課題を練習してこない生徒に注意したところ、もう辞めますと言ってあっという間にここから出て行ったのだ。

追いかけて引き止めてもだめだった。

結果、この主には、辞めたのはさもおまえのせいだと言わんばかりに非難され、生徒の担任にも文句を言われと散々な目に遭った。

本日はもう店じまいだ。凜香がピアノの蓋をパタンと閉めたと同時に、ドアをノックする音が聞こえた。

「やっと、来たか……。入れっ！」

凜香のよく通るアルトがドアに向かって放たれる。

やや顔を引き攣らせた人のよさそうな男子生徒が音楽室のドアを開けて立ち止まり、遅れてすみませんと言って頭を下げた。

凜香は仁王立ちになり、いつものくせでポキポキと指を鳴らし気合を入れ直す。

「では、弾いてもらおうか」

バイエルを抱えて緊張のあまり萎縮している生徒が、凜香の隣で

ますます小さく身体をすぼめた。

5・たくらみ

遅刻して来た生徒の指導がどうにか終わり、初めて両手でそれらしく弾けた喜びを全身で表して、満足そうに帰って行った。

生徒の家にピアノはなく、弟の鍵盤ハーモニカで練習して来たと言って恥ずかしそうに頭を掻いていた。

ピアノなど弾いたこともなかった彼は将来小学校の教師になりたい一心で、この補習講座を受けている。

今日もこの後、友人の家のピアノを借りて練習するのだと息巻く。そして、子どもの好きなアニメソングを両手でカッコよく弾けるようになるのが夢だと目を輝かせていた。

次の生徒が来るまでに少し間がある。今の内に昼食を済ませようと、コンビニのビニール袋からおにぎりを取り出した。

これが本日初めての食事だ。朝もぎりぎりに家を飛び出してきたので、水以外は何も口にしていない。

凜香は高菜のおにぎりをほおばりながら、この補習講座を引き受ける発端となった先日の教職員の飲み会のことを思い出していた。

毎月千円ずつ積み立てた会費で、学期末ごとに学校全体の職員の親睦を兼ねての飲み会がある。

凜香はあまり気の進まないその会に、毎回仕方なく参加していた。先日もその状況は変わらず、積み立てた分の元を取るためだけに宴会場に席を連ねていたのだ。

運ばれてくる料理と飲み放題のプランから推測するに、追加徴収金は二千円くらいだろうと脳内電卓をたたいた凜香は、まずまずの品揃えに概ね及第点を付ける。

アルコールは控えめにして、とにかく食べることに徹すると決めた瞬間から、黙々と箸を動かし始めた。

うわべだけの付き合いならしない方がまだと常日頃からあからさまに態度で示している凜香には、他の皆も心得た物で、誰も彼女に深入りしてこない。

おかげで、これ幸いと、どんどん食事が進む。

そこまでは順調だった。酢の物も、韓国風の和え物も、和牛ミニステーキも……。どんどん凜香の胃に収まっていく。

あと数十分もすればこの場から解放されるのだからもう少しの辛抱だと自分に言い聞かせ、この春転勤してきたばかりのママさん先生が凜香の隣の席で自分の子どもの自慢話を延々続けるのも、黙って耐え忍んでいたというのに。

東高きつてのイケメン音楽教師である鶴本広海が凜香に不幸をもたらしたのは、その直後だった……。

「盛り上がっておりますところ、大変恐縮なのですが。少しお時間をいただけますでしょうか」

長身の広海が宴会場の端の席からぬっと立ち上がり、日頃女子生徒たちが目をハートマークにして言うところの、ス、テ、キ、なテ

ナーボイスを惜しげもなく撒き散らしてくれた。
ただし凜香にとってはそれも迷惑な騒音でしかない。

凜香はこの時すでに広海の魂胆に気付いていた。

というのも、三日前に学校の廊下ですれ違った時に、おまえどうせ暇だろ？ 補習講座を手伝え……と上から目線で言われていたのだ。

もちろん、即断った。ぎろつと睨みつけてやってやったのだ。
「いやーだー」と。

そこで窮地に立たされた広海が、今ここで全職員を前にそのことを頼もうと立ち上がったに違いない。

「鶴本先生、あのことでしょうか？ ならどうぞ。皆さんがそろっているいい機会なので、是非、協力者を募ってみて下さい」

教頭が彼を擁護してそんなことを言う。何かにつけて教頭は彼の肩を持つのだ。

凜香はそのことも以前から気に入らなかった。

「食事を続けながら聞いてください。実は、補習講座の件でお願いがありまして……。ピアノも声楽も初心者なのに、教育系の学部や学科に進学をのぞんでいる生徒が今年は大変多いのです。どなたかピアノや声楽の経験者はいらっしゃいませんか？ 受験対策の補習講座を手伝っていただければありがたいのですが……」

手伝っていただければありがたいのですが……と広海があたりを見渡して、視線が止まったところがたまたま凜香だったらしい。

いや、たまたまというのは皆の勘違いで、凜香にはそれが偶然でも何でもない、単なる嫌がらせだということはとづくにわかってたのだが。

ふん、誰が手伝ってなんかやるもんか、鶴本広海よ、苦しむがい、もつともつと苦しめ、苦しむんだ……と俯いたまま呪いの文句をぶつぶつと繰り返していた凜香は、まさか自分に白羽の矢が当たったなどと思ってもせずに、ひたすら広海不幸を祈っていたのだ。

何やら良からぬ空気を察して顔を上げたときには、皆にねぎらいの言葉を掛けられ、ついでに励ますように肩までポンポンと叩かれる始末だった。

「夏休み中で大変だけど、先生、独身で若いんだし。がんばってね」

ママさん先生がにこにこしながら言った。独身で若い？　大きなお世話だ。

「鷺野先生、いやならそうおっしゃって下さいね。なんなら私が替わりましょうか？」

社会科教諭の里見栄子がそんなことを言ったような気がするのだが……。

若くて美人で、男子生徒にも大人気の栄子であるが、広海の気を引こうと日々アタックを繰り返していることは、誰もが知っていた。

せっかく彼女がそう言ってくれたにもかかわらず、気が動転していた凜香は、自分の置かれてる状況が即座に飲み込めず、うかつにも栄子の申し出を聞き流してしまったのだ。

そして、まるで水と油、永遠の芸術教科のライバルでもある音楽室なんぞに、美術教師である凜香が入り浸るはめに陥る。

講師も含めると百人近くもいる東高教師軍団であっても、まだまだ女性教師の割合が少ない高等学校という職場のことだ。

音楽教師以外で、ピアノと声楽を指導できる人材がそうそう何人もいるはずもなく。

仮にいたとしても、夏休みとはいえ、膨大な仕事を個々に抱えている現状では、はい、私がやりますと自分から名乗り出る殊勝な教師がいるとも思えない。

なのに……。何である時、じゃあお願いしますと栄子に言わなかったのかと、凜香は一生の不覚を悔やむ。

栄子も栄子だ。広海と組んでやりたかったのなら、さっさと手を上げて自分からやりますと言えればいいのだ。

というか、広海が栄子を嫌っているのは凜香も薄々気付いていたので、立候補される前に凜香を盾にして栄子を阻止したとも考えられる。

「鷺野先生は体育館で校歌の一斉指導があつた時、とてもきれいな声で歌っておられて、ピアノの経験もあると伺っています。今回手伝ってもらえて、本当に助かります」

勝ち誇つたような顔を凜香に向け、口先だけへりくだる広海の態度に凜香はもう我慢ならない。

校歌の一斉指導の時間がどうたらこうたらなどと、そんな遠まわしな言い方をするくらいならならば、いつそのことをここにいる皆

にばらしてくれた方が何倍もましなのにと開き直る。

そうすれば同罪だった広海の立場も悪くなるはずだ。

生徒からの信頼も急降下間違いないし。広海、あんたの人気も、もうこれまでだな、ふっふっふっ……。

凜香はこの強力な武器を見方に、徹底的に広海を打ちのめしてやろうと息巻いた。

ところが周りの空気が、凜香の意図しない方向に流れていくのがひしひしと伝わってくる。

職員全員が笑顔でこっちを見ている。

鷺野先生、引き受けてくださってありがとうございます、あなただけが頼りですという懇願の眼差しが凜香を取り巻く。

「あつ、いや……」

ただ一言、出来ませんと断れば済むことなのに、この状況では、それだけのことすら言えない。凜香に焦りの色が見え始めた。

「そ、その、私には、む、む……」

無理です、とやっと言ったはずなのに、時すでに遅し。教頭が凜香の言葉を打ち消すようにして、満面の笑みを凜香に向けて言った。

「鷺野先生。ありがとうございます。もし、どなたもいらつしやらないければ、この私が何かお手伝いしなければと思っていたのですよ。いろいろ仕事が重なって大変だとは思いますが、生徒のためにも、そして鶴本先生のためにも、どうかよろしくお願いいたします」

「は、はい」

やられた。

教頭にも逃げ道を奪われた凜香は、まんまと広海の罠にはまってしまったのだ。

6・フローラルなアイドル

凜香は透明フィルムの包みの中に三分の一ほど残っている高菜のおにぎりを、いつきに口に押し込んだ。

のんびりはしてられない。隣の音楽準備室からは、さっきから止むことなく、ソナチネのメロディーが流れてくる。

ピアノの経験はあるが、高学年になって辞めたと言っていた生徒だろうか。

つつかりながらも次第に曲が仕上がっていくところが憎いではないか。

あれはきつと生徒本人の努力の賜物に違いない。

広海の指導力がそうさせたなどとは絶対に思いたくない。あんなやつに負けてたまるか……。

凜香はおにぎりの無くなった包みをコンビニのビニール袋の中にねじ込み、両手をパンパンとはたいて気合を入れ直す。

次の生徒は幼児教育科に進学予定の女子生徒だ。

実技試験項目に初見視唱というのがあり、初めて渡された八小節の曲を、楽譜を見ただけで瞬時に歌うというテストを課されるのだ。

広海が過去の入試で出題された曲を分析して、受験対策用にわざわざ作曲したという大層な名目の楽譜をコピーし忘れていたのに気付き、あわてて職員室に向う。

そついうやつなのだ。資料の準備すら人任せなのだから……。
いったい何様のつもりなのだろう。

鷺野先生、これが本日の資料です。あなたの分と生徒の分をきちんと準備していますのでどうぞお使い下さい……くらい、普通一般常識のある教師なら、言うだろう。

凜香は隣の準備室のドアを蹴りそうになるのをどうにか抑えて、苦々しい面持ちで廊下に出た。

なんとという暑さだろう。もわつとした空気が一瞬で凜香の周りを取り囲む。

職員室に行くには、途中で渡り廊下を通り別の建物の一階まで下りなければならぬ。

今の今までさらつとしていたシャツの下首周りに、汗が噴出す。ありえない暑さに目まいを覚えながらも、階段を足早に駆け下りる。

生徒に廊下階段は走るなど指導している都合上、これはあくまでも足早であつて、決して走つてなどいらないと言い訳まがいに自身に言い聞かせながら、何食わぬ顔で職員室に向かった。

「あつ、鷺野せんせー！」

東高のアイドル教師、里見栄子だ。職員室のすぐそばで、凜香の横をすれ違った彼女が甘つたるい声で叫んだ。

「里見先生？ 何か？」

凜香は呼び止められた理由がさっぱりわからず、怪訝そうに栄子を睨む。

「鷺野先生ったら、そんな怖い顔なさないで下さいよ。いやだ。ただご挨拶しただけなのに」

「そう……。じゃあ」

なんと紛らわしいやつなんだろう。凜香はただただあきれて、言い返す気力もない。

職員室のドアに手を掛け、ここからささと立ち去ることだけを考えて顔を背けた。

「鷺野せんせー。本日の補習講座、お疲れ様です。では失礼します」

そう言つて花柄のワンピースを翻し、手を振る。

なんだ？ 今のは。それにしてもうつとおしいことこの上ない。とつとと消えると言いたいところを、凜香はぐつと堪えた。それにお疲れ様とか、勘違いも甚だしい。仕事はまだこれからだというのに。

「いや、本日の補習講座はまだ終わつたわけじゃなくて。コピーが済んだら、また音楽室にもどり……」

つておい！ 待てよ、里見栄子め！

栄子は凜香の話を最後まで聞かずに、スキップでもしそうな勢いで、ぐんぐん廊下の向こうに遠ざかっていくではないか。

凜香は白い長袖のシャツを肘まで捲り上げた手を額にかざし、や
ってられないというように首を横に振る。

廊下には、栄子が残して行ったフローラルなトワレの香りがほん
のり漂っていた。

まあ、この程度なら許せるか……と、次第に遠のく栄子の後姿を
ぼんやりと見送っていた。

コピーを終え音楽室にもどろつと廊下を突っ切ったところでハ
タと立ち止まった。

凜香の視線の先にはジュースの自動販売機がこれ見よがしに待ち
構えていた。

ブーンという機械音を低く唸らせながら、暑さにうだる凜香をお
いでおいでと呼び込むのだ。

ちょうど喉も渴いているし、何か飲み物を買って行こうと、見本
の缶ジュースやペットボトル入りの飲料の品定めを始めた。

いつもなら迷わずウーロン茶のボタンを押すのだが、さっきか
らあのいやな人物の顔がちらついて仕方のない凜香の人差し指は、
押す位置を定められないまま、空を彷徨っていた。

すべての補習が終わるまで、隣の準備室にいる広海と顔を合わす
ことはないのだが、自分だけ飲み物を買って行くことに、なぜか引
け目を感じていたのだ。

突然、何かを取りに来たと言って、凜香のところに立ち入って来
る可能性だってある。

いつこっちにやってくるとも限らないのだ。その時に自分だけ冷

たい飲み物を飲んでいるのを知られたなら……。

広海のことだ。皮肉のひとつも残していくだろう。

これ以上あいつの勝ちポイントを加算するのだけは何かあっても阻止したい。

凜香は迷いに迷った。かと言って、仏心を出した日には、相手はますますつけあがるに決まっている。

でもこうなったら仕方がない。コーラの五百ミリリットル入りサイビス缶を選び、ボタンを押した。

ガン、ゴロゴロと派手な音を立てて、缶が転がり落ちてくる。

広海は無二のコーラ好きだ。学生時代の冷蔵庫は他の食材はなくても、コーラだけは切らせたことがなかった……などと思い出し、慌てて記憶の倉庫から余計な過去のデータを追い払う。

凜香もジュースを選ぶならコーラと決めている。

あいつのことは一切関係ないのだと、思い浮かべたことを全て打ち消すように頭をぶんぶん振った。

このサイズなら、準備室に常備してある湯飲み茶碗に少しだけ分けて入れてやればいい。

あの茶碗の容量はかなり少なめだったが、二杯も入れてやれば十分だろう。

凜香はそんな自分の不毛な親切心にどこか納得しないまま、よく冷えた缶を片手に、さっき下りてきたばかりの道筋を逆方向に辿って音楽室を目指した。

ひんやりと心地よい冷気がこぼれ出る音楽室の重厚なドアを開け、ピアノの上にコピーしたての資料を置く。

どうやら、隣のピアノの音も今は聞こえない。休憩タイムに入っ

たのдарう。

凜香は音楽室とドアひとつで繋がっている隣の準備室をワンノックすると、早くコーラを飲みたい一心で、広海の返事を待たずしてパンと戸を開け放ち、いつものように口走ってしまったのだ。

「広海。コーラ、買って来たぞ。感謝しろよ……えっ？ はっ？
な、何？」

そこには、さっき吸い込んだばかりのフローラルな香りがあたり一面に漂い、クルンとカールしたマスカラたっぷりの目元を見開いて手にウーロン茶のペットボトルを持った栄子が、広海の前に立っていたのだ。

「さ、さ、さ、鷺野先生！ ど、どうして……？ なんで、まだ、
そんなところにいるんですか？ もう、補習講座は終わったんじゃない……」

栄子は色を失くした唇をわなわなと震わせ、敵意を露わにした眼差しを凜香に向けた。

7・過去の小さな出来事

「私の仕事は、まだ終わってないんだが……」

凜香は驚きのあまり呆然としている栄子を少し気の毒に思いながら、現況を伝える。

そして、どのようにして彼女をなだめようかと咄嗟に考えを巡らせた。

この状況から察するに、このフローラルな香りに包まれたアイドル教師は、広海にウーロン茶の差し入れを持ってきたと思われる。それに、凜香がもうここには戻らないと勝手に決め付けて、胸を躍らせて愛する人のもとにやって来たのだろう。

凜香はよく冷えたコーラ缶を持ったまま器用に腕を組み、右足を一步、前に踏み出した。

すると同時に栄子が一步後ずさる。また一步踏み出すと、これまた一步下がる。

これではまるで、栄子が危険極まりない凶暴な生き物から身を守るために遠ざかっていくような光景に見えなくもない。

「あ、あの。それに、今……。鷺野先生が鶴本先生のことを、ひ、ひ、ひろみって、呼び捨てになさって……」

栄子が今にも泣き出しそうな顔をして言った。

「それは、つまり……」

さすがにこの件に関しては、凜香も口ごもるしかなかった。

東高に転勤後は、一度だって人前でボ口を出したことはなかった。なのに、なんでまた、栄子の前で広海と呼んでしまったのだろう。さつきすれ違った時の栄子の浮かれた様子を見れば、彼女がここに来ていることくらい、すぐに予想できたはずなのにと自分の浅はかさを悔やまずにはいられない。

凜香は、なんとかこの場をしのがなければと思うものの、焦るばかりでいい案が浮かばない。

勢い余って、つい呼び捨てにしてしまったとか、学生時代留学した経験があり、ファーストネームで呼び合う癖がまだ抜けないとか……。

あれこれ言い訳を考えてみたが、どれもいまいち説得力に欠ける。

凜香は、足を組んで悠々とピアノの前に座っている男に、この状況をどうにかしろと目配せをする。

そもそもこいつがこの部屋にホイホイと栄子を入れたりするからこんなことになるのだ。

それともついに根負けして、この若くてかわいいアイドル教師の気持を受け入れることにしたとでもいうのだろうか。

だとすれば、凜香には反論する権利はないし、反論する気もない。そうなってくれば、かえってせいせいするくらいだ。

そうとわかれば、すぐにでもどうぞお幸せにと言って、とつとここから退散してやるというのに。

そんなところで悠長に高みの見物などしてしないで、手っ取り早くこの場を収拾して欲しい。

このままでは、彼もいろいろと不都合なはずだ。

なのに……。

当の広海はいたってのん気で、あろうことか、まるで恋人を見るような温かい眼差しを凜香に向け、何か言いたげに口元を緩める。

しまった……。こいつにすぎたのは、やはり間違いだっただろうか？

広海の不可解な態度に、なぜか凜香の心拍数がいつきに上昇する。

「凜香……。もう隠さなくてもいいんじゃないのか？ もっと自然に振舞えばいい。今まで誰にも気付かれなかった方がまさしく奇跡だったんだよ」

ここでそれはないだろうと、凜香の焦りが勢いを増す。

予想外にソフトな甘い声を響かせて凜香と呼びかけるのは、彼を想う栄子の前ではルール違反だ。

ダブルパンチを受けた栄子は、顔面蒼白になって、視線を彷徨わせる。

「ひ、ひろ……。じゃなくて、鶴本先生。おかしいですね。あなたが何を言いたいのか、私にはさっぱりわかりませんが……」

ここはしらを切り通すに限る。この男がここまで女心がわからない奴だったとは、聞いて呆れる。

栄子の身になってみると声を大にして言いたい。

「おまえも相当往生際が悪いな。いい機会じゃないか。里見先生に俺たちのことをきちんと説明するチャンスだと思っけど？」

チャンス？ 今さら何を説明すると言っただろう。凜香はますます

す理解に苦しむ。

実は私たち、こっそりと職場恋愛中なんです……と頬を染めて言えとでも？

だが残念ながら、過去も現在も広海とは恋愛関係になつたためしがない。

というか、少なくとも凜香自身はそう思っていた。

ならば、あのことを言えとでも？ 凜香が思い当たることと言え
ば、やはりあれしかない。

でも……。そこまで暴露する必要があるのだろうか。

「鶴本先生。お言葉ですが、そのような思わせぶりなことをおつし
やると、ますます里見先生が、私たちのことを誤解するじゃないで
すか」

「だから全部言っちゃおうって、言ってるんだ。誰よりもお互いの
ことをよく知っているはずの俺たちが、このままでいいはずがない
いいか、凜香。おまえも腹をくくれ」

座つたままの広海が有無を言わせぬ目で凜香を見上げ、そしてゆ
っくりと栄子に視線を移す。

「里見先生、今まで黙ってて悪かったけど、この人と俺、実は……
ふっ、ふがふが……こ、こらっ、凜香、やめろ！」

「だ、黙れ！ 広海。それ以上、何も言っなっ！」

とにかく広海の声を塞ぐのが先決だ。何を言おうとしたのか気にな
りながらも、強引に押さえ込んだ。

「っ、冷たいっ！ おまえ、何するんだ！」

凜香は座っている広海の前に立ちふさがり、片手で口を押さえつけ、もう片方の手で持っていたコーラ缶を、彼の首の後ろ側からボタndaウンのシャツのすき間にぐいと押し込んだのだ。

「きゃーっ！」

栄子が両手を口元に当てて、叫んだ。その瞬間、彼女の手からウーロン茶のペットボトルが滑り落ち、鈍い音を立てて床に落ちた。

「ひ、ひどい……。鷺野先生、やめて下さい！ それに、鶴本先生まで、鷺野先生のことを凜香だなんて呼び捨てにして……。鷺野先生。どうして今まで皆を騙していたんですか？ そんなこと、何一つ言ってくれなかったじゃないですか！ 実は鶴本先生とこっそり付き合ってるだなんて。あんまりです。うわああーっ！」

栄子がなりふり構わず叫びながら音楽準備室を出て行った。

おいおい、勘弁してくれよ。ここは学校だぞ。子供のけんかでもあるまいし……。などと言っている場合ではない。

栄子が今とんでもないことを言った。凜香が広海と付き合っているなどと。

今すぐに栄子を掴まえて、それだけは絶対に違うと訂正しなければならぬ。

凜香はすぐさま踵を返し、栄子の後を追いかけてようと走り出した。すると、広海が彼女の腕をつかみ、待てと言って引き止めるのだ。

「頼む。先に、背中 of 缶を取ってくれ！ せつかく里見先生の誘い

を断るいいチャンスだと思ったのに、ぶち壊しやがって……。お、おい。待てよ、待ってくれ！ 凜香っ！」

凜香は何のためらいもなく、すぐりつく広海の腕を振り払った。栄子は職員室に下りていったのだろうか。廊下に飛び出したとたん、これまたタイミングがいいのか悪いのか、補習講座にやって来た生徒とぶつかった。

目を白黒させている生徒に、ちよつと待っててくれとだけ言い残し、猛スピードで、栄子を追って駆け出した。

職員室に着いた時には、すでに栄子の姿はなかった。

おまけに裏門の横にある駐車場からは、彼女の愛用の赤いセダンも消えていた。

同じように廊下の窓から駐車場を見ていた教頭が、笑顔で凜香に話しかけてきた。

「鷺野先生、大変でしたね。里見先生はまだ若い。なかなか自分をコントロールできないんですね」

一見頼りなさそうな教頭だが、実は職員一人一人をよく見ているツワモノだったりする。さすが管理職だ。

すべてを見とおされていたのかと思うと少し気恥ずかしいが、凜香はええと曖昧に頷き、教頭の言葉を待った。

「彼女は鶴本先生を慕っているようですね？ でも鶴本君はあのとおり、あれほどの男前なのに、彼女には無関心ときている。いや、彼女に限らず、女性にはあまり興味がないようで。誰か、思い続け

ている人でもいるのでしょうか？」

「あつ、いや、それはどうでしょう……」

広海のことなど今となっては何も知りようがない凜香は、教頭の言葉に困惑してしまう。

「あははは。すみません、あなたを困らせようと思って言ったわけではないですよ。そうだ、確か鷺野先生は、鶴本君と同じ教育大出身で、同期生だったはずですね。まあ里見先生もあそこの卒業生だから、今後も先輩として、里見さんのことよろしく頼みますよ」

「あ、はい……」

教頭の言うとおり、広海とは大学の同期で、栄子は後輩になる。つまりは、職員間であまりいざこざを起さず、これからは穏便に頼むよ、ということなのだろう。

結局、栄子に会えなかった凜香は、重い足取りで音楽室に戻り、もやもやした気持ちを抱えたまま生徒の指導に当たった。

その日の夜、凜香はなかなか寝付けなかった。

昼間の学校での出来事が脳裏をよぎり、目が冴えてしまったのだ。そしてあの時、広海がいったい何を言いかけたのか、それが気になって仕方ない。

あのことだろうか。思い出すだけでも嫌になる過去の……あの出来事。

今さら蒸し返してどうしようというのだろうか。誰に迷惑をかけた

わけでもない。

ただ若気の至りで手を染めた、大胆なあの活動のことを言つつも
りだったのだろうか。

じゃあ他に何がある？ 栄子の誘いを断るチャンスだったとも言
っていた。

きっとデートにでも誘われたのだろう。それを断るために、何か
を言い出そうとしていたのだ。

ところが、あの出来事を暴露することが断る理由に繋がるとはと
ても思えない。

あれは、ただの恥さらしでしかないはずだ。

凜香は考えても考えても答えが見つけれない自分に苛立ちを覚
える。

広海の口を押さえ込んだ時、手のひらに感じた彼の唇の動きを必
死で解読しようと記憶を辿ってみるが、探偵でもない限り、凜香に
はわかるはずもなく。

が、しかし。凜香は、もうひとつ思い出したことがあった。

これもまた、過去の珍事のひとつなのだが、凜香にとっては、う
さぎの耳垢程度の小さな出来事に過ぎないある事。

別に深い意味はないと思うようにして、日頃は堅く封印している、
過去の……出来事。

一度だけ交わした、広海との……。

広海との口づけを……。

8・運命は動き始める

「職員のみなさん、おはようございます。ただいまより、職員会議を始めさせていただきます。本日の議題は、二学期の行事予定と三年生の進路指導についてです。では、まず初めに校長より……」

凜香は寝不足の目をしょぼしょぼさせながら、職員室の自分の席で幾度となく襲ってくる眠気と戦っていた。

少しでも気を緩めると、まぶたが閉じてしまうので、手の甲をつねって、どうにか意識を保ち続ける。

進行役の教頭が、この暑さの中いつもと変わらぬ涼しい顔で、淡々と議事を進めていく。

校長がのっそりと立ち上がり、うおっほんと物々しい咳払いをした。

いつどんな時でも、校長の話というものは退屈で長いと相場が決まっている。

あくびを我慢するせいで、さっきから鼓膜のあたりがぼわんとして変な感じだ。

斜め向かいのママさん先生も眠そうだ。子どもの夜泣きがまだ続いているのだろうか。

栄子はいえば……。朝から目も合わそうとしない。完全無視とあったところだ。

おっと、こんなことに気を取られている場合ではない。とにかく今は校長の話に集中するのが先決だ。

凜香は邪念を振り払うように大きく深呼吸をして、眉間に力を込めた。

「……というわけで、えー、職員のみなさんには、夏休みの間も、まあ、補習講座及び、受験対策授業を開いて頂き、ご苦労をかけておるわけですが、あー、それもこれも、全ての生徒諸君が、えー、将来の目標を実現するための手助けということで、ご了解いただきたいと、まあ、そう思うわけでありまして……」

額に流れる汗を拭きながら、校長が独特の間延びした口調で職員にねぎらいの言葉をかける。

三年生にとっては、この夏が大きな山場になる。

学校の補習だけでなく、塾や予備校などにも通いながら受験に向き合っている生徒も多い。

幸い、凜香も広海も今年度は三年生の担任ではないので、そういった面ではやや気楽な立場ではある。

しかし音楽室で補習講座を受けているメンバーや顧問をしている美術部の生徒の顔を思い浮かべると、やはり他人事ではなくなってしまう。

順調にこの夏を乗り切って、来春にはそれぞれが納得のいく結果を出せるようにと、祈らずにはいられない。

今から十数年前になるだろうか。

凜香も東高の生徒と同じように、十八の冬に大学受験を経験した。高校では美術部に所属していたにもかかわらず、周りが芸大だ美大だと騒ぎ始めてやっと将来を考え始めたというくらい、のんびりとした受験生だった。

その上、美術に関して技術的に秀でているわけでもなく、美大に進学するには、不安要素がありすぎた。

他の同級生たちは、高一のときからすでに目標を定め、デッサンや油絵の受験専門教室に通っていたり、目指す大学の先輩達に指導を受けたりしていたのだ。

何も準備をしていなかった凜香は、気付いた時にはもう手遅れ。他に何もとりえがないというのに、芸大はもちろん美大も進学は無理だとあきらめざるを得ない状況に追い込まれていたのだ。

シヨパンやシューマンのメロディーに心打たれて小さい頃に習っていたピアノも、途中で辞めてしまっただけ以来、音楽そのものに素直な気持ちで向き合えなくなっていた。

そう考えると、やはり凜香には絵を描くことしか残っていなかった。

でも、美大への受験には間に合わない。その時は百パーセント、未来への道はすべて閉ざされたように見えたのだ。

浪人も覚悟で担任に進路相談を持ちかけたところ、教育大の美術専攻はどうですかと新たな方向を導き出してくれたのだ。

目からうろこだった。配点のウェイトが絵の点数ばかりでなく一般教科の成績にも重きをおくため、凜香のような受験生に有利だという。

純粋に絵だけを描いてそれを職業として食べていけるのは、ごく一握りの人たちだけだ。

働かざるもの食うべからずをポリシーとして自営業を営む凜香の両親も、美術教師ならば好きな絵に関わりながら仕事も出来て、一石二鳥だと手放しで喜んでくれた。

凜香の人生が明るく開けた瞬間でもあった。

そして見事、教育大に合格して、電車で片道二時間の地獄の遠距離通学が始まったのはいいが、入ったばかりのサークルをたった一日で辞めてしまうなどという凜香らしからぬ失態をやらかしたのは、記憶に新しい。

そのサークルに、今凜香の横で、全く会議など聞いていないのがまるわかりな音楽野郎、鶴本広海も在籍していたのは、後で本人に聞いて知ることとなる。

もちろんこの時は、ただ同じ大学の美術専攻と音楽専攻の学生であるというだけで、全くの赤の他人だった。

厳密に言えば、その後も現在も、あの、忌々しい口づけの一件を除けば、赤の他人の領域を超えたことはないと断言できる。

そして、そのサークルに入ったことが、凜香の失敗人生に大きく関わっていくことになる。

「校長先生、ありがとうございました。では次に、二学期に開催されます学園祭について、担当の近江先生より概要を説明していただきます。近江先生、お願いします」

「では、私の方から、学園祭の説明をさせていただきます。みなさんのお手元にあります、プリントの二ページをご覧ください。日程はそこにありますとおり、十月……」

担当教諭の声が職員室に大きく響き渡り、思い出にふけっていた

凜香も否応無く現実の世界に呼び戻される。

東高の学園祭は今どき珍しく、秋に開催されるのだ。

近隣の高校が三年生の受験に配慮して、五月、六月に開催するところが多い中、生徒の要望により、従来どおりの秋日程が組まれている。

やはり学園祭は秋だよなという生徒の意見に真っ先に賛同したのが、あの真面目で控えめな教頭だったというのだから驚きだ。

教頭に絶大なる信頼を寄せる校長が、すぐさまゴーサインを出したのは言うまでもない。

あくまでも生徒会と学園祭実行委員主導のもとで運営されるのだが、教師が携わる部分も多く、美術教師である凜香もここぞとばかりに数々の役割を担っている。

凜香はやや身を乗り出して、担当教諭の説明に聞き入った。

それにしてもこの職員室の暑さはどうだろう。

律儀にエアコン設定温度を二十八度を守る教頭のおかげで、座る場所によっては三十度を越えているにちがいない。

百人近くがひしめき合う職員室は、さながら真夏の温室のようでもある。

団扇代わりの透明ファイルのパタパタさせながら滴る汗を拭い、会議内容のメモを取る斜め前に座る五十代の男性教諭が気の毒になっってくる。

それに引き換え、隣に座る広海の涼しげな顔。

いかにも一生懸命話を聞いていますよという顔をしながら、実際この男の頭の中は、ノリのいい音楽が鳴り響いているに決まってい

る。

その証拠に膝に乗せた手は、明らかにピアノを弾くように右へ左へとリズムカルに動き回る。

いくつになっても落ち着きの無いやつ……。凜香は軽蔑の眼差しをたつぷりと広海に注ぐのを、今日も怠ることはなかった。

凜香の耳から、学園祭について説明中の近江の声が次第に遠のいていく。

眠気は無くなったはずなのに、意識が勝手に過去へと遡っていくのだ。

広海の指の動きに重ね合わせるように、凜香はあの若かりし頃の自分を再び思い出していた。

凜香は通学に往復で四時間以上もかかることを理由に、サークルには入らないと決めていた。

もともと仲間作りにも興味がなかった凜香は、大学では勉強して好きな絵が描ければそれでいいと考えていたのだ。

高校の美術部では、結局誰一人親しい友人など出来なかったし、心落ち着く場所でもなかった。

宇治を振ったと噂が流れた後は、生意気な鷺野としてみんなから一線を引かれていたようにも思う。

もうわずらわしいことはいやだ。大学では必要以上に人と関わるのはやめておこうと決めていた。

そう決めたはずだったのに……。

絶対に誰の甘い誘いにも乗らないと固く決心していたにもかかわ

らず、凜香はあるサークルに引き込まれてしまい、それがきっかけとなって広海と運命的な出会いをすることになるのだ。

あれは確か大学に入学して一週間くらいたった頃だったと思う。凜香は教授に課題の質問をしようとして教官室を探し、慣れない構内をぐるぐる回っていた。

するとどこからともなくピアノの音が聴こえて来るのだ。

もともとこの大学には音楽専攻科もあるのだから、ピアノの音が聴こえても何も不思議はない。

ただここは美術棟で、北のはずれにある音楽棟の音が、ここまではっきりと聴こえることなど、まずはありえない。

それは凜香が初めて耳にする曲だった。

しっとりとした異国情緒に溢れたメロディーに引き寄せられるようにして、いつの間にか旧棟の一階奥にある講義室の前まで来てしまう。

そこには、軽音楽サークル、ミニコンサートというタイトルのポスターが貼ってあった。

いいカモが来たとばかりに、どうぞどうぞと上級生らしき人に背中を押され、講義室の中に無理やり閉じ込められる。

薄明かりの中、凜香は錆付いた椅子に座り、ミニコンサートの客の一人として、そこに招かれてしまったことによりやく気付いた。

ピアノがやさしく鳴り、女性ボーカルのハスキーな声がピアノの音色にかぶさる。

どこか懐かしさの漂うその曲は、昔、父親が車の中でよく聴いていたアメリカのフォークバンドの曲に似ているような気がした。

コンサートが終わり室内を見渡すと、明らかに新入生と思われる見知らぬ顔が、十人くらいそこに並んでいた。

手にはプログラムが印刷されているチラシを持っている。きっとどこかで配っていたのだろう。

この時期、新入生の勧誘も兼ねて、こういった集まりをいろいろなサークルが企画していたのは知っていたが、まさか自分がそこに足を踏み入れることになるうとは、凜香とて思ってもみないことだったのだ。

でも聴いた音楽はすばりかつたし、学園祭でもないのに日常的にこういったことが行われる大学というところに、いい意味でのカルチャーショックのような衝撃を受けたのも事実だった。

凜香は高揚した気持ちを抱えたまま二時間かけて家に帰りつくと、真っ先にピアノの蓋を開け、今日聴いたボーカリストを真似て弾き語りを試してみる。

ピアノと言えはクラシック音楽しか結びつかなかった凜香に、新しい風が吹き抜けた瞬間だった。

そして翌日、あの先輩ボーカリストのようになりたい一心で、迷うことなくサークルに入会届けを提出したのだ。

ところがそのサークル。大いに問題ありの集団だということに、入会した初日に思い知らされることになる。

昨日演奏していたボーカルの人は他校のバンドのボーカルも兼任していて、すこぶる忙しいらしく、ほとんどこのサークルには顔を出さないなどと言うではないか。

彼女のボーカルにあこがれてこのサークルに入会した凜香は、南国の楽園から一気にツンドラ地帯に置き去りにされたような感覚を

味わった。

他のサークルメンバーも、新入生歓迎会や合コンのことばかり話していて、楽器を演奏するでもなく、音楽のおの字も語らない。

全くもって、インチキ音楽サークルだったのだ。

そうとわかれば凜香の次に取った行動は誰よりも早かった。

なんとか引き止めようとする先輩を振り切って、たった一日でそこから抜け出すという快拳を成し遂げたのだ。

せっかく入会してくれた新入生の五人のうち、すでに二人に逃げられたと、後日先輩がぼやいているのを耳にした凜香は、自分と同じようなのもう一人いるのかと妙に親近感を覚えた。

それが広海だったというのは、その時の凜香はまだ知るよしもなかった。

8・運命は動き始める（後書き）

ここまでお読みいただきありがとうございます。

以前クライスレリアーナというタイトルで連載していたものを、加筆修正のうえ、再投稿しています。

話の流れに大きな変化はありませんが、新しいエピソードを盛り込んだ内容になっています。

最後までお付き合いいただけると嬉しく思います。

9．ピアノと腕時計の相関図

「では、一時になりましたので、本日の職員会議はこれで終了します。午後は自主研修及び、補習になりますので、各自の仕事をお願いします」

ようやく教頭が締めくくりの言葉を述べ、会議の終わりを告げた。それにしても長かった。そして暑い。

学園祭の説明の後、進路指導について三年生の今後の予定を中心に話し合いが進んだ。

指定校推薦やAO入試が目前に迫っていることもあって、議論は熱を帯びてくる。

それでも教頭は不用意な会議の時間延長は快く思っていない。横道に逸れそうになると即座に軌道を修正して、予定通りの時間内ですばつと会議を終了させる手腕は、教頭ならではのと言えるだろう。

凜香は椅子に座ったまま大きく伸びをして、時計に目をやった。三十分後には、また例のごとく、補習講座に生徒がやってくる。それまでに資料の準備もしなければならぬ。つまり、このままでは昼食休憩は取れそうに無いと結論付けた。

それよりもこの短い休憩時間に最優先されることがある。さつきからチラチラとこちらを窺う視線の主の誤解を解かなければならないのだ。

その視線は決して凜香に向けられているのではない。

隣の席で腕を組み、じっと目を閉じている広海にのみ注がれている。

口数も少なく、見目だけは麗しい（らしい……）広海は、栄子だけでなく、既婚の女性教諭にもたびたび熱いまなざしを向けられる存在だ。

こんな奴に騙されるなと声を大にして言いたいところをぐっと堪え、凜香はすくつと立ち上がると、あからさまに顔を背けた栄子に遠慮なくつかつかと近寄って行った。

「里見先生。ちょっといい？」

凜香は職員室を出て行こうとする栄子を引き止めた。

「なんででしょう。あたし、今から社会科の研修で西高に行くんです。時間ないですけど」

大きなショルダーバッグを手にした栄子は、冷たく言い放つ。

「二分で済む。ちょっと来て」

凜香は有無を言わず栄子の腕をつかみ、隣の給湯室に連れ込んだ。

「や、やめてください。何するんですか？」

「ごめん、悪かった。昨日のことだけど……。里見さんにちゃんと言っておかないと、私も困るから」

「言い訳なんていいです。補習講座の件も、あなたが鶴本先生に根

回しされてたんでしょ？ どうせ、その持ち前の強引さで、鶴本先生に取り入ったに決まってます！」

「里見先生。だからそれは誤解だつて。私と鶴本先生は、何もないから。付き合つてるとか絶対にありえない。もちろん、大学時代の同期だし、全く知らない間柄ではないけど……」

「二人してあたしのこと、笑いものにしてたんだわ。ひどすぎます」

栄子の思い込みもここまでくれば大したものだ。こうなったら奥の手を使うしかない。

凜香はあまり気が進まなかったが、これを持ち出せばきっと相手も納得するだろうとしぶしぶ口を開く。

「里見先生、よく聞いて。私には……。私には、ちゃんと付き合つてる人が別にいる。前の勤務先に、そういう人がいるから……」

栄子がきょとんとした顔で凜香を見る。

「あははは……。びつくりした？ 里見先生、そういうわけだから。鶴本先生は私とは全く関係ない」

「そ、そうなんですか？ほんとに？」

「ああ。本当だ。だから、まあ、がんばつて。そうだ。あいつ……いや、鶴本先生の好物は、コーラだ。お茶類はあまり飲まない。差し入れする時はコーラで機嫌を取るといいぞ。じゃあ。健闘を祈つて……」

凜香はぽかんと口を開けている栄子の肩をぽんと叩いて、給湯室

をあとにした。

栄子と話していた時間は、ぴったり二分。凜香は資料をコピーして、どつと押し寄せる疲れを背中に感じながら、よたよたと音楽室に向かった。

日も暮れようとする頃、ようやく補習講座も終わり、グラウンドの整備をしている野球部の生徒たちを凜香はぼんやりと窓越しに眺めていた。

と言つても、これですべての仕事が終わったわけではない。今から職員室にもどつて、もう一仕事、いやもう三仕事ほどしなければ凜香の一日は終わらない。

終業式前後に行ったクラスの個別懇談の結果をまとめ、進路希望のデータを集計し、二学期の授業計画に沿った美術教材の注文もしなければ九月に間に合わない。

そつえば、奨学金を申請していた生徒の書類の審査も期限が迫っている。

補習講座の遅刻や欠席日数の多い生徒の家に電話をして、保護者とも話をしなければならない。

すっかり忘れるところだったが、美術教育研究会の論文も今日明日中に仕上げて、代表者宛てに送付しておかないと、また督促のメールが来てしまう……。

「はあ……」

たそがれ時の音楽室に、凜香一人のため息が十人分くらいになつ

て大きく響き渡る。

どさっとピアノの椅子に腰掛け、鍵盤の上に載せた右手をゆっくりとうごかしてみた。

ど、れ、み、と澄んだ音が鳴る。自分で調律もしてしまう広海のママさのお陰だろうか。

学校のピアノとは思えないほどメンテナンスが行き届いたグランドピアノは、意外にも凜香の手に馴染みがいい。

こんなことをしている場合ではないのにも思いながらも、一度椅子に張り付いてしまった腰を上げるのは、容易ではない。

初めは隣の生徒が弾いていたソナチネをポロンポロンと真似ているだけだったが、次第に熱が入り、自分でも気付かないうちに、しつとりとしたあの曲を弾き始めていたのだ。

途中盛り上がりかけたところで、みしつと床が軋む音がする。

凜香は何だろうと手を止め、音のする方向に振り向いた。するとどうだろう。

神妙な顔つきをしたよく知った人物が、黒板にもたれかかるようにして立っているではないか。

いつ、どうやってここに入ってきたのだろう。

凜香は怪訝そうな面持ちで、そこに立つ広海に目をやった。

「珍しいな……。おまえのピアノ、久しぶりに聴かせてもらった。そのノクターン、今のおまえの気持ちか？」

絶対に認めたくないが、黒板にもたれるその姿がやけにさまにな

っているこの男に、心の中を見透かされたような気がして落ち着かない。

「いったい、何だよ。勝手に入ってきやがって……」

凜香は広海を前にすると、なぜか攻撃的になる。そして言葉遣いも当然のように勇ましくなってしまうのだ。

「ここは俺の聖域だ。入って来て何が悪い。おまえな……。いい加減、素直になれよ。俺が何か話そうとすると、すぐにはぐらかすし目も合わそうとしない。こうでもしないと、おまえ、俺から逃げばかりだろ？　なあ、凜香。あれからもう八年以上経つんだぞ。もう時効だ。俺たち、そろそろ普通に付き合えるんじゃないか？　あつ、もちろん、まずは、同僚としてだが」

「広海。私は、普通に付き合ってるつもりだけど。これ以上どうしろと言うんだ？　それでも、あんたには同僚としての最低限の気配りはしてるつもりだ」

「最低限ね……。確かにその通りだ。昨日も、ご丁寧にコーラをプレゼントしてくれて、俺は嬉しかったぞ。背中に入れるのは想定外だったか」

やはり広海の皮肉は本日も健在だ。

でもちようどいい。あの時、何を言うつもりだったのかと訊くのに、いいチャンスかもしれない。

「あれは不可抗力だ。あんたが余計なことを言おうとするから、あなつたまでのこと。私はちつとも悪くないからな。なあ、広海。昨日はやっぱり、あのことを里見先生にばらそうとしたのか？」

「あのこと？」

「とぼけるな」

「おいおい、俺は、とぼけてなんかいないが……。って、もしかしてあのことか？」

二人にとってのあのことは、ひとつしかないはずだ。誰にも知られたくない若気の至りともいう、過去のあの失態。

「あれしかないだろ？ 他に何がある？」

本当にあのことを忘れてしまったのか、はたまた、からかっているのか。

凜香は広海の本心を探るように、執拗に攻めていく。

「わかった、わかった。あのことだよな。他にはない。でも、あのことは関係ないんだ。そうじゃなくて、ただ俺たちは、昔も今も仲がいいんだと言いたかったただだよ」

「はあ？ なんだよ、それ。少なくとも、今は全く仲がいいとは思えませんが……」

「いや、だから。そこはおまえが話を合わせてくれれば、里見さんもあきらめてくれるかな……。と。俺、里見さんタイプはどうも苦手です……」

「まったく、なんで私が、あんたの悩み相談の手助けをしなきゃならないんだよ。里見先生、ああ見えて、結構一途でかわいいんじゃないかな」

いかな。あんたにぴったりだと思うけど」

「おまえ、本気で言ってるのか？ 俺の気持がどこにあるのか知っててそれを言う？」

「あんたの気持なんて、知りませんが……。まさか八年間も同じ思っているなんて、信じろと言う方が無理な話……。です……。け……。ど」

「おい、凜香？ 大丈夫か？」

凜香は急に意識が遠のきそうになって、手でこめかみを押さえる。ふと横を見ると、広海が腰をかがめ、心配そうに覗き込んで来る。

「あー。大げさだな。大丈夫だって。軽い貧血だよ。最近、夏バテぎみだから」

「おまえ、かなり疲れてるだろ」

広海の眉がその男前を台無しにするくらい、情けなく八の字に下がった。

「少しね」

「なんか俺、責任感じるよ。この補習講座をおまえに頼んだの、間違ってたのかもしれないな……」

「同情はいらないね。引き受けたからには、最後まで務め上げる。広海には絶対に迷惑かけないから、安心しろ。……。それにしてもうかつだった。まさかあんたに私のピアノを聴かれるなんてさ。防音効いてるし、ちょっとくらいいいかと思った私が甘かった。あ

んたに聴かれるのだけは絶対に嫌だったのに」

「俺も、嫌われたものだな。でも、いい演奏だったぞ。人間いろいろ経験を積むと、それが音に出るって本当なんだな。おまえも人並みに、いろいろあつたってわけだ。なあ、もう一度弾いてみないか？　なんだつたら、俺がレッスンしてやってもいいぞ？」

「バカ！　あんたの前では二度と弾くものか」

「相変わらず、態度デカイな。でもおまえがショパンのノクターン、それも作品九の一だろ？　あれをそこまで情感をこめて弾くなんて、はつきり言って驚きだな。昔はショパンといえば、エチュードの革命一本やりで。あれは確かに笑えた。なんでそこまで怒ってるんだよって感じで切れもよかった。自由で、奔放で。でも嫌いじゃなかったな。おまえのピアノも歌も……」

言わせておけば、どこまでも人の心に土足で入り込もうとする。凜香は調子に乗るこの男が癪に障って仕方ない。

「ひーろーみー。いい加減にしろよ……。昔のことをあれこれ蒸し返すな。あんただって、言われたら嫌だろ？」

「俺か？　俺は気にしないな。昔のことなんか、何も思っちゃいない。別に知られたってどうってことはないな。そりゃあ、あの髪の色はやりすぎだったかもしれないが。いくつかあったピアスの穴も、今じゃすっかり塞がっちゃったしな。もし俺がここの生徒だったなら、間違いなく停学二週間、始末書つきってやつだ。いや、退学か？　でも今となっちゃあ、いい思い出だよ。凜香、ちよつと替われ」

凜香は無理やりピアノの椅子からはじき出される。

広海がでんと陣取り、カッターシャツの袖を捲り上げた。時計をはずし、当たり前のようにそれが凜香の手に渡る。

シルバーのオーソドックスなタイプの腕時計。

見覚えのあるそれは、八年ぶりに凜香の手のひらに収まった。

広海の指が流れるようにパラパラと空中で折れ曲がる。これも昔と変わっていない。

演奏する前に必ず行う準備運動のようなものだ。

早く職員室にもどって仕事がしたいんだけど……。そう思っているけど、今からピアノを弾く気まんまんなこの男を放っておくわけにもいかず、というか、凜香は学生時代、この男のピアノ演奏が何よりも好きだったのだ。

だから。ここから出て行くなんてことがそう簡単に……。出来るわけがない。

凜香は身体の力が全部抜けていくような疲労感を覚えながら黒板にもたれ、今まさに音を紡ぎ出そうとしている広海の横顔を、凝視していた。

10・不機嫌な背中

突然、目の回るような速さで広海の手が鍵盤を駆け上った。大きくてしなやかな広海の手が、鍵盤の上を舞うのを最後に見たのはいつだったのだろう。

魔法のように音を紡ぎだすこの手が好きで、真っ直ぐに伸びた背中が頼もしくて、弾きながら時々目を閉じて、次に関けた瞬間ちらっと絡む視線にどきっとして。

この人とならと思った時が……なかったわけではない。

変わったのは短くなった髪くらい。

幻ではない。あの頃のままの広海が、今凛香の目の前でピアノを弾いているのだ。

校内の各行事でのピアノ伴奏は、東高の場合生徒が弾くことになっている。

というのも、人前で弾くチャンスを出るだけ彼らに与えようと広海が配慮しているため、凛香が学校内で広海の演奏姿を見ることが、これまで本当に一度もなかったのだ。

裏を返せば、生徒たちも広海の演奏姿はほとんど知らないということになる。

中には、鶴本先生は全くピアノが弾けないから生徒に弾いてもらっているのだとまことしやかに噂が流れることも度々あった。

だが、音楽の授業でたまにその勇姿を目にした日には、あまりの演奏力の高さと、洗練されたパフォーマンズの美しさに、広海ファンの女子生徒たちが授業中失神寸前になった……とこれまた大げさ

な情報が一人歩きすることもある。

この曲は確かシューマンの子供の情景……じゃなくて。そう、クライスレリアーナだ。

残念ながら凜香が弾くには難しすぎるので聴くだけにとどめているが、好きなピアノ曲ベスト五に入るくらい、彼女にとって馴染みのある曲でもある。

どんなにテンポが速くても、どの音も奥まで深く鍵盤を押さえ込み、それでいて滑らかで繊細な音を生み出す広海のテクニックは、今も健在だ。

意外とうまいじゃないかと危うく声に出して言いそうになり、凜香は慌てて口を閉ざす。

文句なしの見事な演奏だ。そりゃあ、音楽教師だもの、それくらいは当然だろうと憎まれ口のひとつも言ってみたくなるけれど。

それを差し引いても、やっぱり広海はうますぎる。

たとえあの憎い広海が弾いているにしても、凜香はこの音楽教師のたぐい稀な才能を認めざるを得なかった。

聴けば聴くほど彼の音に引き寄せられ、胸をぎゅっと締めつけられるように苦しくなっていく。

そして次第に目の奥までじわつと熱くなってくるのだ。

大学の卒業演奏会でも、選ばれた三人に名を連ねていた。

一人はプロのピアニストとして活躍しているし、もう一人はヨーロッパに留学していると聞く。

大学の教えどおり律儀に教師になって、それでもこれだけの技量を維持している広海は、果たして今の自分に満足しているのだろうかとふと心配になったりもする。

凜香は自分の脳内が広海一色に汚染されてしまったことに気付き、頭をぶんぶん振った。

あくまでも、聴衆が誰もいないのはかわいそうだから、我慢して聴いてやっているだけなのだというのを肝に銘じ、自分を戒める。

凜香は広海の音楽にぐいぐい引き込まれていく自分を認めながらも、一方でそんな自分が情けなくもあった。

もしも広海に、今でも揺れ動く心が残っていることを悟らてしまつたら、今までの努力が全部無駄になるからだ。

あんなひどいことをした張本人である広海を絶対に許すものかと何度も自分に言い聞かせ、八年前に凜香の中にあつた広海へのすべての思いを断ち切つたのだ。

この音楽教師を喜ばせることだけは、なんとしても避けなければならない。

落ち着け。落ち着くんだ。広海の奏でる音色に聞き惚れて我を失うなんてことだけはあつてはならない。

どこかの知らないオヤジがわけのわからない曲を滅茶苦茶に弾いているんだと思い込め。

こんなやつピアノなんか、誰が聴いてやるか……。だれが……。聴いてなんか、やる……。もの……。か……。

「どうだ、この曲。おまえも知ってるだろ？ 全部で八曲あるんだ。で、次は……。って、おい、凜香？ どうした、凜香！ 大丈夫か？」

どうやら凜香は本当に意識がなくなってしまったらしい。

気付いた時には、隣の音楽準備室のスプリングのいかれたソファの上で、寝心地の悪さと戦いながら身体を横たえていた。

「ひろ……み？」

凜香の目の前には、心配そうに上から覗き込むなつかしい瞳があった。

どさくさにまぎれて髪を撫でられていたような気がするのだが、それを指摘する元気は残念ながらまだない。

「おまえなあ。倒れるなら倒れると、そうなる前に俺に言ってくれよ……。おまえのこと何も気付かずにピアノを弾き続けている俺って、かなり鈍感で、大マヌケ野郎だと思っんだが」

「いや、いつもそうなんで、別に気にしてない……」

「いつもって……。おっ！ 正気になったな。貧血か？ 昔も時々こんなことがあったよな。こうやっておまえを看病するのは初めてじゃないから、俺も心得たものさ。まさしく鬼の霍乱かくらんだな」

「ほつとけ！ 私だって、調子の悪い日くらいあるし。あんたと違って、繊細で硝子細工のような華奢な身体なものですから」

「ほお……。女性の教師の中で一番デカイおまえが、そんなにもろいとは全く存じませんでしたね。ったく人の気も知らないで……」

「広海……」

凜香は自分の口がいつもどおりの辛口を維持していることに少し安堵する。

が、しかし……。この状況から察するに、広海が倒れた凜香を介抱してくれただろことはもう間違いない。

ならば、恩人に対して少し口が悪すぎたのではないかと反省する。もう少し素直になって、ここは礼くらい言うべきではないかと。

「なんだ。まだ何か言い足りないのか？ おまえの毒舌はもう十分もらったぞ」

「あつ、いや……。ここまで運んでくれて、どうも……。ありがとう」

瞬く間に広海の顔から表情が消えた。

眉間に皺を寄せたまま口をポカンと開けて、まさしく放心状態だ。

「お、おまえ。本当に大丈夫か？」

「うん」

凜香は広海が屈んでいる方向に横向きになり、こくつと頷いた。

「なんだよ。おまえがしおらしくなると、気持ち悪いな」

「悪かったな」

「いや、悪かないよ。素直で結構。今日みたいな凜香は大歓迎だぞ」

「それはどうも」

また不意打ちのように、広海の手が前髪をかすめる。

凜香は触れるかどうかのすれすれのところで首をすくめ、広海の手をかわした。

「おっと、逃げられたか……。それはそうと、さっき何度も俺の名前を呼んでくれたよな。憶えているか？」

凜香の顔が一瞬にして曇る。

どうしてこいつの名前を呼ばなければいけないんだと、さも不服そう口を尖らせた。

「おやつ、その顔は信じてないな。言っとくけど嘘じゃないぞ。」

いやあ、俺って頼りにされてるなあって、マジで嬉しかった」

にやけた顔と長く伸びた鼻の下が、全くもって目障りだ。

でも、なんとなくこの目の前の男の名前を呼んでいたような記憶が残っている。

でもそれは不可抗力だ。この場所で凜香の側にいるのは広海しかないのだ。

他の人の名前を呼んだところで、誰にも聞こえないのだから。

だが、しかし……。だ。無意識で呼ぶ相手の名前が広海だとは、やはりいただけない。

凜香には恋人がいる。栄子に言ったのは口から出任せでもなんでもなく、結婚まで申し込まれた相手が本当にいるのだ。

今までの交際経験の中で最高に長く付き合っている。もうすぐ三年になるだろうか。

なのに、今の今まで、彼の顔すら思い浮かばなかったのはどういうわけだろう。

最近忙しくて、ずっと会っていない。電話もメールも……していない。

今までそのことを極力考えないようにしていた自分への罰のように、不安がどつと押し寄せる。

「凜香、そんな様子で電車は無理だろ？ 俺の車に乗ってけ。おまえの家まで送っていくよ」

「えっ？ そ、それは……」

「遠慮するなよ。それとも何か。俺の車には乗れないとでも？」

「いや、そう言うわけではないけど、そ、その……」

ここまで広海に世話になっておきながら今さらなのだが、これまで一人きりで他の男性の車に乗らないように常に心がけてきた凜香は、いくら広海が親切心で言ってくれたことであっても、そのポリシーを簡単に曲げることは出来ないのだ。

「迷惑か？ そつか……。おまえ、付き合ってるやつ、いるもんかな。なら、そいつに連絡するか？」

急に不機嫌な声色になった広海が立ち上がり、机の上に置いてあった時計を腕にはめた。

「あつ、それ！」

凜香は時計を目にするや否や、ソファの上に上半身を起こした。

「これか？　おまえさ、ほとんど意識が無かったのに、この時計は離さず握り締めていてくれたんだ。おかげで投げ出されなくてすんだ」

それを聞いて、ほっと胸を撫で下ろす。

この時計は、広海が大学時代から大切にしていた時計だ。父親からもらったと言っていた、国産のどこにでもある時計。

でも、どんな時でも肌身離さず持っていたその時計への広海の思いを知っているだけに、意識を失った時に落したりどこかにぶつけていたらと、不安になったのだ。

「で、どうする？ 来栖さんに電話するのか？」

「いや、いい。……つて、な、な、なんで？　なんで来栖のこと、知ってるんだ？　私、広海にそこまで言っただけ。」

東高の職員は誰も知らないはず……」

凛香は、誰も知らないはずの恋人の名を告げた広海を訝しげに見上げた。

「そして来栖さんとおまえは、うまくいって……ない」

目を丸くする凜香を追い詰めるように、広海が言った。

「そのとおりだ。でも、なんであんたが知ってるんだよ？ 誰に訊いた？ ねえ、教えろよ」

凜香はその場に立ち上がり、つかみ掛からんばかりに広海に詰め

寄る。

ところが、再び目まいがしてそのままソファに座り込んでしまったのだ。

「なあ、凜香。そんなんで、おまえ、一人で帰れないだろ？ 意地を張るのはやめて、今日は俺の言うとおりにしろ。なんなら車までおぶってやるぞ。ほら、ほら、つかまれ」

そう言って背中を向ける広海の肩を借りて、なんとか立ち上がった。いくらなんでもおんぶは勘弁して欲しい。

その時、凜香のお腹のあたりで、きゅーっと怪しげな音がした。広海が振り返り、怪訝そうに凜香の顔を覗きこむ。すると今度はぐるぐるともう一度音が鳴った。

「広海。ごめん。お腹……すいた。死にそう。私、今日一日、何も食べてなかったんだ」

「おいおい、凜香、マジで？　じゃあ、その貧血。空腹のせいだとしても？」

「うん。朝も寝坊したから、コーヒー一杯だけしか、飲んでない」

「昼も、食べなかったのか？」

「うん」

「よし。そうとわかったら、今から腹ごしらえだ。仕事はこれで切り上げるぞ」

広海がその持ち前の長い足を有効に使って、あっという間に準備室と隣の音楽室の電気を消し、戸締りを済ませた。

「来栖さんのこと、店に着いたら話すよ。それならいいだろう？」

凜香は返事をする間も与えられず、広海に引きずられるようにして、駐車場に連れて来られた。

いつの間にかすっかり広海のペースに巻き込まれてしまった凜香は、停まっている車を見渡し、栄子が社会科研修に行ったまま、まだ戻っていないのを確認する。

凜香は恋人の来栖にごめんねと心の中で小さく詫びて、まだ少しふらつきながら、助手席に乗り込んだ。

11・おたふく

広海が車を停めた店は、おたふくというありがちなネーミングの洋食屋だった。

学生の頃、二人でよく通った店だ。

ところが久しぶりに店の前に立った時、そこがおたふくだとは気付かないほど、店構えが変わっていたのだ。

店の前にぶら下がっていた黄ばんだのれんはどこにも見当たらず、そのかわりに小さなボードが脇に立てかけてあり、本日のディナーなどとカラフルな横文字が並んでいる。

店内も劇的な変化を遂げていた。

昭和の臭いをプンプンさせていた年季の入った椅子とテーブルがものの見事にすべて撤去され、モノトーンのシンプルなものに取り替えられていた。

壁は漆喰で塗り固められ、自然に近い明るい黄土色が店内に落ちて着いた雰囲気を生み出している。

気の利いた間接照明や、要所要所に飾られた小物類に至るまで、あらゆるところに細やかな演出がなされているのに驚く。

もうそこは洋食屋ではなく、すっかりカフェレストランに生まれ変わっていたのだ。

でも凜香はどこか物足りなさを感じてもいた。

少し脂ぎった床や、ぎしぎしときしむ椅子、そして、割烹着を着た気立てのいい店主のおばさんの姿がそこにないことに、一抹の寂しさを覚える。

白いシャツに黒いパンツ、そしてギャルソンエプロンをつけた今
どきの若い店員が、いらっしやいませと言って、グラスとおしぼり
を凜香と広海の前に置き、ブルーの表紙のメニューをテーブルの隅
に載せてそそくさと去って行った。

「なあ、広海。ここ、おたふく……だよな？」

凜香がそう訊ねるのを予測していたかのように、横に座る男は優
越感を帯びた笑みを浮かべながら、そうだと頷く。

それも、わざわざ間隔を空けて座っているにもかかわらず、その
わずかな隙間を無理やり埋めるように、ぐいぐいとくっついてくる
のだ。

他にも席は空いているのに、どうしてカップルが座るような横並
びのシートの席をあえて選ぶのかと訝しく思う。
が、正面から見つめ合う形になるのも、それはそれで気まずいの
ではないか。

凜香は改めて腰を浮かし、これ見よがしに、広海との間をしっか
り三十センチは取って、座りなおした。

「こいつ……。俺から離れたな？」

「あたりまえだ。なんであんたとくっついて座らなきゃならないん
だ。食べる時、肘も当たるし、邪魔だろ？」

「はいはい、わかりました。あなたさまの言うとおりでございます。
それにしても不自然だな。この空間。人間一人座れると思わないか
？」

そう言いながら、またその半分ほど間をつめて来る。こうなると

凜香は身動きが取れない。無情にも横は漆喰の壁だ。

はあ……とあきらめにも似た長いため息をつき、凜香は蔑むような目つきで、隣の男を見た。

「ははは。逃げれば追う。これ、男と女の法則だから。まあ、今夜くらい、辛抱しろよ。なあ、凜香。この店、雰囲気が変わっただろ？ 去年、リニューアルしたんだ。この店主のおばさんが三年前に亡くなって、息子が跡を継いだらしい。俺たちが学生の頃はおばさんが一人で店を切り盛りしてたけど、大変だったんだろうな。息子は結構有名な料理人で、おばさんの味を引き継ぎながらアレンジを加えて、昼時にはOLや主婦層で行列ができてるって噂だ」

「ふーん。そうだったんだ。おばさん、残念だったな。まあ、そんなに親しかったわけじゃないけど、青春時代の思い出がまたひとつ消えていくような気がする」

「そうだな。おばさんが生きているうちに、おまえと来れたらよかったのにな……」

広海が柄にも無く神妙な顔つきになる。

そして店員が置いていったメニューをおもむろに広げ、何にしようかと独り言のようにつぶやいた。

「広海は、ここにはずっと来てたのか？」

店の内情についてやたら詳しい広海に、確認するように訊いてみる。

「いや……。俺、新規採用の時は、県の西のはずれの高校に赴任させられてただろ？ その頃は一切来なかった。四年前に東高に移動

「なってからだな。またここに通うようになったのは」

「そうか……。で、あんたの彼女もここに連れて来たりするのか？」

凜香は、絶妙なタイミングでさっきの仕返しを謀る。

確か広海にも付き合っている女性がいるはずだ。凜香の恋人の名を知っている男に取引条件のように、話を切り出した。

「そんなことも、あつたかな……」

凜香は、遠い目をして思いがけない返事をする広海をまじまじと見た。

過去形の言い分から察するに、今はその彼女とは別れたとでも言うのだろうか？

「確かに去年、おまえが東高に転勤してきた時はまだ彼女がいたけどな……。去年の暮れに別れた」

それはまた、ご愁傷さまですと凜香は心の中で広海を哀れんだ。
まあ、デリカシーのカケラも持ち合わせない、こいつの歪んだ性格じゃあ、彼女もさぞかし苦労したことだろう。凜香はフンと鼻で笑ってみせた。

付き合っている女性がいるとわかっていても、この男にすり寄っていく女は数知れない。

こういう男と付き合う宿命とでもいうのだろうか。凜香は見たこともない広海の彼女に、大いに同情心を抱いた。

そう言えば。広海は音楽教師に採用された初年度は、ここから随

分遠い県西部の高校に配属されたのだ。

凜香は広海から奪い取ったメニユーを眺めながら、広海が就職した当時のことを思い出していた。

一旦西部学区に配属されると、よほどのことが無い限り、西部の学区内で教師の移動が行なわれるのが常なのだが、広海はたった三年で、ここ東部の学区に飛ばされてきたのだ。

それは凜香にしてみれば、大きな誤算だった。

そうとわかっていたら、凜香はなんとしても別の県の教員採用試験を受けたはずだ。

広海が院に進まず、就職すると知った時、凜香は迷わず院への進学を選んだ。

学校勤めなど、結局は狭い世界なのだ。一緒に採用試験を受けて、万が一同じ高校、あるいは近くに配属されようものなら、否が応でも、ずっと顔を合わせ続けなければならない。

それだけは凜香は何としても避けたかった。

そのために院に進学して就職の時期をわざとずらし、広海が西部学区勤めで官舎暮らしという風の便りを聞いて、安心して採用試験を受けた。

ここは日本国内でも上位に入るくらい、高校の数が多い県だ。

一緒の高校になることなど、宝くじの高額当選を手にするのと同じくらいに低確率だと踏んでいたのに、見事的中してしまったものだから開いた口が塞がらない。

凜香が前の高校に新卒で着任して三年目の時、東高から転勤してきた体育教師が、のちに彼女の恋人になる来栖だった。

その来栖が、東高に勤めている時、なかなかしつかり者の音楽教師が西部から転勤してきて、女生徒に人気だったとか、仕事も良く出来るいい奴だったなどと、ことあるごとに凜香に話していたのだ。

音楽教師と同等に自分も生徒から人気を博していたのを自慢をしかかったただけというのは、凜香も薄々気付いていたが、この来栖と言う男、見かけだけはさわやかな体操のお兄さん系を誇るだけあって、彼の言うこともなまじうそではなかったのかも和大目にみていた。

学生時代、競泳の全国大会で上位入賞の経験もあって、根っからのスポーツマンの来栖と凜香が付き合い始めたきっかけはあまり自慢できるものではなかった。

飲みに行った勢いでいつの間にそうなったというのがその答えだ。酔っ払った大男を介抱できるのは、その場に居合わせた女性の中で、たまたま凜香しかいなかったというのもあるが、やつとのこと来栖の住む官舎まで彼を送り届けたところ、突如正気になったこの男に告白され、夜を共にしたというのがそもそものことの始まりだった。

嫌ならばすぐに逃げ出すことも可能だった。

だが、すでに来栖のことを日頃から気にかけていた凜香は、このまま彼を一人にしておけなくて、ついつい誘いにのってしまったのだ。

この逆の話はよく聞くが、まるで送り狼が女である自分のように、凜香は職場の誰にも付き合っていることを話せないまま今に至る。

ところが思いのほか二人でいることが心地よく、凜香のありのま

まを受け入れてくれる来栖に、次第に愛情を感じ始めてもいた。

そして、来栖が得意げに話して聞かせる見知らぬ音楽教師の特徴が、どうも凜香の知っている昔の知人に重なるのだ。

ある日来栖の口から、謎の音楽教師の名が鶴本であると聞いた時、もうその人物が広海以外の誰でもないと凜香は瞬時に悟る。

まさか自分の恋人が、広海と知り合いなどとは思ってもみなかった凜香は、院に進んでまで就職時期をずらした涙ぐましい努力が、いとも簡単に音を立てて崩れていくのを感じ取っていた。

どうして西部にいた広海が東部学区にいるのか？ それは信じられないことだが、確かに事実のようだ。

でも、来栖にだけは広海と知り合いだということを絶対に知られなくなかった。

もしそのことが知れたら、恋人の来栖にさえ言っていないあの過去の失態が広海の口からばれてしまうかもしれないからだ。

凜香の過去最大の汚点であるあのことは、封印したまま来栖と付き合ってきた。

ピアノを弾くことも、人前で歌っていたあのことも……。来栖にはずっと内緒にしてきたのだ。

幸い、今日までそのことが話題になったことは一度もない。すなわち来栖は、まだ凜香と広海のつながりに気付いていないということになる。

嘘をつくのが苦手な来栖が、知っていながら知らないフリをするなど、とてもじゃないが出来っこない……はずだ。

ということは、広海も凜香が来栖の彼女であることは知らなくて

当然なのに……。

ところがさつき、広海は凜香の相手の名前を来栖だと、はっきり言い当てたのだ。

「おまえ、遅いなー。早く決めろよ。ここのステーキセット、うまいぞ」

来栖のことを考えていた凜香は、突然ぬつと顔を近付けて一緒に手元のメニューを覗き込む広海に驚き、反射的に壁際に身を引く。

あの頃は広海のことなど何も意識することなく、こつやっついても身を寄せ合っていたというのに、これしきのことではないだろうというのだろうか。

凜香はどくどくと暴れ回る心臓に、なすすべもなく、秘めやかに頬を赤らめた。

12・地中海風リゾート

「じゃあ、おまえもステーキセットでいいか？」

「ステーキ？」

「そう。だから言ってるだろ？　ここのはうまいって。おまえも食ってみる。元気になるぞ」

「それはさつきも聞いた。でも、よく考えてみるよ。私、これでも一応、身体が弱ってるんですけど。普通、そんな半病人にステーキなんか勧めたりするか？　……　たく、思いやりのかけらもないやつめ」

いくら空腹が原因で具合が悪くなったとはいえ、急にステーキなんぞが入ってくれば、内臓だってびっくりするに決まっている。

今の凜香には、リゾートとか、シチューとか。がんばってもハンバーグが関の山というところだろう。

本当に広海ときたら、これだから困る。

「半病人？　おまえが？　大丈夫、大丈夫。顔色も随分良くなった。じゃあ、俺はステーキセットにするから、少し分けてやるよ。で、おまえは？」

凜香の眉がピクツと動いた。さつきから……　というか、ここ最近、広海が馴れ馴れしくおまえおまえと連呼するのが気になっているのだ。いったい何様のつもりなのだろうと。

「私は地中海風リゾートでいい。それと、私のこと、おまえってあ

んまり気安く呼ぶな。里見先生に聞かれたら、また何を言われるか……」

「あ……。悪かった。つい昔の感覚でそう言ってしまったよ」

凜香は恋人の来栖にすら、おまえと呼ばれたことがない。

あまり大きな声では言えないが、彼は凜香のことをかりんちゃんなどと、くすぐったい名前で呼ぶ。

ワイハじゃあるまいし……。まるで業界用語のように前後を入れ替えて呼ばれることに、初めはびっくりしたが、慣れてしまえば結構女心をくすぐられ、嬉しいものだと思付く。

「これからは、気をつけるよ。じゃあ、こうやって二人きりの時も、鷺野先生って呼べばいいのか？ それって、いくらなんでもかしこまり過ぎだろ？ なら言わせてもらうが、おまえだって俺のこと、広海広海ってずっと呼び捨てじゃないか。前の彼女は、広海さんって、優しくそう呼んでくれたもんだ……」

なつかしそうに過去を振り返り、天井を仰ぐ男が少し不憫になるが、同情は禁物だ。

「そんなこと、知るか。どうせ、広海さん……なんて呼んでもらって、鼻の下長くしてへらへらしてたんだろ？ 私には到底無理だから。早くそうやって呼んでくれるかわいい人、見つければ？ 東高の卒業生にも、あんたのファンがいっぱいいるらしいけど。遊びじゃないなら、それもいいんじゃないか？ よりどりみどりだな」

「はあ？ 卒業生たちが悪いってわけじゃないけど。俺にはそんな趣味は無い。心配してもらわなくても、まっとうな方法でちゃんと相手をみつけるさ。じゃあ、結局のところ、お互い他人行儀な呼び

方は無理ってことで。俺、職場では絶対におまえって言わないから。誓うよ、な？ 凜香ちゃん」

「き、気持ちわるっ！ 凜香ちゃんはやめてくれ。あああ。もう何でもいいよ。好きに呼んでくれたらいい。凜香ちゃん以外なら何でも。私だって、気をつける。人前では絶対、広海なんて言わないから。特に里見さんの前では、絶対に！ そうだ。鶴本センサーって生徒みたいに黄色い声で呼んでやろうか」

「それもいいけど、出来ることなら、広海さんでよろしく」

「んなわけない！ ああ、なんてことだろう……。補習講座にかかわる前までは、広海と話すことなんてほとんどなかったから、こんなつまらないことで悩む必要もなかった。出来ることなら、一学期に戻りたい」

凜香は腕を組み、心底嫌そうに首を横に振った。

「そうだ、広海。安心しろ。里見先生にはつきりと言っておいたから。私たちは別に何でもないって」

「それはそれは、助かりました。でも、俺。悪いけど、里見さんのことはなんとも思っていない。誤解されたままの方が良かった。なあ、凜香？」

「いい加減に……。しーろーっ！」

どさくさに紛れて肩を抱いてきた広海の手をおもいっきりひっぱたき、フンと顔を叛ける。

その昔……。天にも昇るような幸せな気持で、広海と口づけを交

わしたあ直後、この男の本性が分かり、頬に手の型がつくほど平手打ちをしたのを、よもや忘れたとでも？

広海との恋が一瞬にして破れたあの日を思い出し、凜香の心が沈んでいく。

でも広海との付き合いもあとわずかだ。補習講座が終われば、また元通り、ただの同僚に戻る。

それまでの我慢だと自分に言い聞かせ、凜香は必死の思いで自分を奮い立たせた。

昔と変わらない欧風家庭料理を味わった凜香は、すっかり元気を取り戻していた。

リゾットは、少し塩辛かったが、残りを凜香から奪い取り全部平らげた広海はめちゃくちゃうまいと満足げに唸った。

えびがぶりぶりして甘みがあったという点では、凜香は広海と意見が一致した。

食事の相手がどうしようもない広海とはいえ、いろいろと世話になった以上、礼儀を欠くわけにはいかない。

律儀な凜香は、伝票をこっそりと手にし、二人分の支払いをしようと立ち上がる。

しかし奥の席にいるため、広海が邪魔で会計台に向かうことが出来ず、足踏み状態になる。

「おっと、それは俺にくれ。おまえに払わせるわけにはいかんだろ？」

「いや、それはこっちの台詞。あんたのことが嫌いなのと、世話に

なった礼はまた別の次元の話だから。ここは私が払う。お願い。払わせて」

狭い席で、伝票の取り合いが始まる。

他人が同じことをやっているのを見苦しく思っていたのに、それを自分が率先してやっているのだ。凜香はたちまち、自己嫌悪に陥った。

「いいか、凜香。よく聞け。このままだとずっと店から出られない。だから、ここは社会人としては先輩の俺が払う。そして、おまえは、食後のコーヒーを俺にご馳走する。どうだ。いいアイデアだろ？」

「えっ？ コーヒー？ でも、それじゃあ、この支払いの方が多すぎるし。あんたに損をさせるわけにはいかない。それに見ての通り、私は疲れ果てて弱っているから、そろそろ家に帰ってゆっくりしたいなと思ってる。だからここは私が払う。ね？ そうしよう」

はいそうですかなどと言おうものなら、向こうの思っ壺だ。ここは、どうしても譲れない。凜香の腕の見せ所だ。

「それは困ったなあ……。凜香。俺と、これ以上一緒にいたくないってわけですか？ あの話。まだ終わってないぞ。来栖さんのこと」

「あっ……」

凜香は一番大事な話を聞きそびれてしまったことに気付く。

そこは是非とも聞いておかなければならない。

もし来栖と広海が通じ合っていて、凜香のことも筒抜けであるならば。それは彼女にとって、抜き差しならぬ大問題なのだから。

「それと……。仕事のことだが、生徒のことで少し込み入った話もある。もう少しだけ、いいだろ？　なんなら、凜香の部屋に行ってもいいぞ。今でも大学の時と同じマンションにいるんだろ？」

仕事の話？　凜香は仕事に関することを言われると、めっぽう弱い。

それも生徒のことだと言われると、放っておけなくなるのだ。

凜香の心の中の天秤は、すでに広海の言い分に傾きかけていた。

学生時代凜香は、あまりにも大学への通学に時間がかかり過ぎるため、大学近くに小さなマンションを借りて暮らし始めた。

勤務先もマンションからそう遠くはなかったので、結局ずっとそのままそこに暮らしている。

ボロアパートでもカプセルホテルでも、マンスリーマンションでも良かったのに、両親がそれを許さなかった。

娘に何かあつてからでは手遅れだからとオートロック完備でセキユリティーもバッチリな贅沢なマンションに、無理やり住まされた経緯がある。

そのマンションならもちろん、広海もよく知っている。

学生仲間からは同棲しているのかと間違われるくらい、凜香のマンションに昼夜を問わず入り浸っていたのは、あるうことが、この目の前の男だったのだから。

「ええっ？　ほんとに行ってもいいのか？　久しぶりだな。おまえんちに行くの。ちよつとは女の子らしい部屋になったか？　掃除機はちゃんと買ったか？　カーテンはどうした？　布団は干してるのか？」

「うるさい！ 誰がうちに来てもいいって言った？ 自慢じゃないけど、私の部屋には彼氏にも入ってもらったことがない。今はもう何の関係も無いあんたを入れるわけがないだろ？」

「だから、話をするだけだって言ってるだろ？ 昔は入れてくれたじゃないか。あの時だって、俺はずっと紳士だったはずだ。違うか？」

「あたりまえだ。変なことしたら、追い出すに決まってるだろ？」

「おまえはそういうの、すごく嫌がったからな。俺だって、おまえに嫌われたくないし、責任の持てる立場でもなかったし。まあ、あの頃の俺たちは、目標に向かってまっしぐらだったからな。色恋沙汰に振り回されてる暇なんて無かった……。おまえ、本当に来栖さんを部屋に入れたこと、ないのか？ 信じられないな。そんな風だから、うまくいくはずの恋愛もダメになるんだよ……」

「ほつといてくれ。言っとくけど。私と来栖は、ダメになったわけじゃないから。ただお互い忙しすぎて、疎遠になってるだけだ。ダメだとか、決め付けないでくれ！」

「決め付けているわけじゃない。おまえ、それ、本気で言ってる？ 忙しすぎて疎遠になっているだけだと、本当にそう思ってるのか？」

広海の真剣な目が、凜香を試すかのようにじっとこっちを見つめている。

凜香は唇をかみしめ、広海の視線から逃れるように俯き、再び座

席に腰を下ろした。

13・カリスマ主夫広海

「なあ、広海」

凜香が力なく俯き、疲れ切ったような声で訊ねる。

「私と来栖のこと、どこまで知ってるんだ。あんたと来栖が元同僚で、結構一緒につるんでいたってのは、来栖に聞いていた。じゃあ、何か？ 来栖も、私と広海が知り合いだと気付いていたのか？」

「いや、気付いてないな。来栖さんの彼女がおまえだとわかった時、思わず俺も知ってるよと言ってしまいそうになったが、よそ様の彼女にずかずかと立ち入るほど、俺も無神経じゃないんで。聞き役に徹していたってわけさ」

凜香は広海の話しを聞き、幾分気持が軽くなった。

来栖にはまだ、あの思い出したくもない過去の汚点は知られていないということになる。

ところがこの男。来栖のことで、凜香も知らない何かを掴んでいるのは確かだ。

今ここで聞きだすことが出来るのだろうか。

「広海。あんた、何か知ってるんだろ？ 来栖のこと……」

凜香はそれを知りたいような知りたくないような、複雑な心境だった。

最近の来栖の様子を見れば、それとなく相手の考えていることくらいわかる。

あえてそのことを知りたくなくて、来栖を避けていたというものもある。

聞かないほうが身のためだというのは、男女間にはよくあることだ。

「凜香。見てみる……。客がいつぱいになってきた。外まで並んでるぞ。ここで話せることと、話せないことがある。場所を変えよう」

「どこに？ 私の家はダメだからな」

「あははは。あれは冗談に決まってるだろ？ 人妻ならぬ、人彼女の部屋に乗り込んでどうするんだよ。俺はこれでも義理堅いタイプだからな。来栖さんのことは尊敬してるし、その人を裏切るようなことは出来ない。なら……。俺んちはどうだ。グレードアップした俺の官舎暮らしを見たいとは思わないか？」

「グレードアップ？」

いつの部屋と比べてそんなことを言うのだろう。まさか学生時代のグランドピアノで占められていたあのワンルームと比べると？

ピアノが置ける学生マンションということで、広海の住んでいた当時の住処は、大学からはかなり遠かったはずだ。

大学近くの防音完備のマンションは賃料が高すぎて借りれなかったとぼやいていたのを思い出す。

あまりにも不便なところにある広海の部屋には、数回しか行ったことがない。

男の一人暮らしのくせに、掃除も行き届き、狭いながらも快適な

部屋だったというのは、悔しいが、今でも鮮明に憶えている。

「そうだ。前の官舎より、ずっといい具合に家具もレイアウトしてる。床もピカピカだぞ。つい先日、真夜中に突然思い立って、ワックスがけをしたところだ」

「あんたがきれい好きなのは知ってるが、前の官舎だって？ 私は昔の学生マンションにしか行ったことないけど。昔のあんたの彼女と勘違いしてるんじゃないか？ どうせそうやって、前の官舎に女を連れ込んでばかりいたんだろ？」

「えっ？ そうか？ あー。そうだよな。おまえは前の官舎は知らないんだ。それに言っておくが、俺は女を連れ込んだりはしない。官舎だぞ？ 変な噂が立つたら困るだろうが。そういうのは外で済ます。それが大人の男のやり方だ」

「偉そうに。その官舎に今から私を連れ込むんだろ？ 変な噂が立つぞ。いいのか？」

「ああ、大丈夫。おまえとなら噂が立つても本望だ……と言いたところだが。今住んでる東地区の官舎は老朽化が進んで、一昨年からは新たな入居者を受け入れていないんだ。おかげで、俺の隣も上階も、誰もいないよ。全体でも、三分の一くらいしか入居してないんじゃないか？ それに東高の職員は俺しかいないから、噂の立ちようがない。みんな、リッチだよな。若いのにオートロックの賃貸に住んでやがる。俺だって、そのうち……」

「わかった。わかった。わかった。じゃあ、あんたの家に行く。その代わり、話が終わったらすぐに帰るから」

広海の話は長い。黙って聞いていたら、延々話続けるのだ。

学生の頃は、いつだってそうだった。にもかかわらず職場では寡黙な二枚目で通っているの、人間として少しは成長したと思っていたのだが……。

やはりそれも間違いだったと気付く。

本当にこんな男の家にこのこついて行って大丈夫なのだろうかと不安になるが、凜香はそんなリスクを負ってでも、徐々に行きたい気持ちが高まっていた。

さつき音楽室でうかつにも倒れてしまったせいで、広海のクライスレリアーナを聴きそこなったことが残念で仕方ないのだ。

出来ることなら、続きが聴きたい。頼めば弾いてくれるのではないかと、かすかな期待を抱いていた。

広海のことだ。間違いなく官舎にランドピアノを押し込んでいるだろう。

来栖の話よりも、仕事の話よりも。何よりも、広海のピアノが聴きたい思いが勝って、誘いに乗ってしまった……ということだ。

凜香は、はやる気持ちをなんとか抑え込んで、広海の車の助手席に再び乗り込んだ。

もちろん店の食事代は、広海が支払うと言って断固譲らなかったため、凜香はしぶしぶそれに従った。

まさしく老朽化という言葉がぴったりな広海の官舎は、おたふくから車で十分ほどのところにあった。

凜香のマンションもここからそう遠くはないはずだ。

マニュアル車をいとも簡単に操って、駐車場にバックで入庫していく運転席の男をいつしか目で追っている自分に気付き、凜香は慌

てて目を逸らした。

五階建ての官舎は、よくある団地の仕様と同じで、玄関のドアも何度もペンキを塗り替えているせいかな、どこかやぼったさが拭えない。

自称インテリアマニアの広海も、ここでは自慢のセンスを存分に発揮できないのではないかと思えるほど、朽ち果てた感じの建物だ。

ところが……。真つ暗だった室内は、照明のスイッチを入れるや否や、瞬く間にくつきりと全容が露わになり、家具の色合も、デザインも。

無機質な電化製品までも、全く期待を裏切ることなく、美しいフォームを浮かび上がらせる。

内装は入居者が変わるたびに手が入られるのだろうか。

凜香のマンションよりも見栄えがいいのはどうだろうか。

もちろん、広海の掃除が行き届いているところが大きいのは言うまでもないが、これではますます凜香の部屋に広海を呼ぶことは出来なくなったと、心が沈みこんで行く。

広海の場合、これが日常だから驚きだ。初めて広海の家を訪れた人ならば誰もが、足しげく通って来ている彼女の仕業だと思っに違いない。

だがそれは間違いで。正真正銘、広海の手によって美しさがキープされているだろうことを、凜香は知っている。

あまりの美しさに、自分の部屋と是非ともトレードして欲しいものだと真剣にそう思う。

広海のような奥さん、いや、旦那さんを持つ人は、楽でいいだろ

うなあ……などとひとしきりため息をつき、うつとりとした目で部屋中を眺め回してしまった。

でも、もし。万が一にもこんな奴と結婚なんかしようものなら。部屋は見かけより使い勝手だと豪語する凜香とは、一日たりとも結婚生活は続かないだろう。それなのに……。

なぜかあの頃、広海が凜香のがらくた部屋に平気で入り浸っていたことをふと思い出す。

片付けると、頭ごなしに怒鳴られたこともなく、我慢している様子でもなかった。

当時はそんなことも気にならないくらい、のめり込むものが存在したと言ふことなのだろう。

やはりそれはあった。防音工事が施されている部屋に、グラランドピアノがでーんと据えつけられていた。

まっ白な壁紙に指紋ひとつついていない黒いつややかなボディーが映える。

本当にここがあのおんぼろ官舎なのだろうか。

凜香はまるで、モデルルームを見学する客のように、感嘆のため息を漏らしながら室内を歩き回った。

こんなことをしている場合ではないのだが、どうせ今夜が最初で最後の鶴本家への訪問なのだ。

短時間のうちに美しさを堪能させてもらわなくてはならないのだから、少しばかりの野次馬根性は見逃してもらうことにしよう。

一通り室内見学を終えた凜香は、広海に促され、台所と和室を繋げてワンフロアにしてあるリビングの白いソファに腰を下ろす。

「そのソファ、いいだろ？ 北欧の名だたる職人が作った物らしいが、店の移転による大幅プライスダウンってのをたまたま見つけて即決だよ。今では我が家の要とも言える家具だ。ベッド代わりにもなるし、大人でも三人は座れる。今からコーヒーを淹れてやるからな。おまえはそこで横になっててもいいぞ。疲れただろ？」

せかせかと立ち働く広海を横目に、凜香は言われるまでもなく、もうすでに身体を横たえていた。

こういったタイプのソファは、寝るためにあるのではないかと思えるくらい、座ったとたん、自然に身体が斜めに……なる。

凜香は、白い壁に不似合いな木目調の天井を見上げながら、本日の広海からの借りをどうしたものかと思案していた。

倒れた時の看病に始まり、おたふくの食事代や今も家に上がりこんで、コーヒーまで淹れてもらっている。

これではもう完全に、ただの同僚の域を超えてしまっているのではないかと思い悩んでいたのだ。

お礼に食事に誘うというのはよくあるパターンだが、これ以上広海と関わり合うのもどうかと思う。

まだまだ先の話だが、バレンタインデーの時に、義理チョコ増量で返すというのだろうか。

これはなかなかいいアイデアだ。凜香は満足げにこっそりとほくそ笑んだ。

というのも、今年のバレンタインデーには、どういうわけか、男の広海よりも、凜香の方が多くチョコをもらった。

見せ合ったわけではないが、職員室で席が近いため、お互いの戦利品が丸分かりだったのだ。

凜香は、その結果に複雑な思いを抱いていた。

もし自分が東高にいなかったら、きっと広海の方がたくさんもらえたはずなのにと普段憎たらしい広海に同情的な気持ちになっていた。

広海がかなり凜香のことをうらやましがっていたのも事実だ。

そんな広海にはファミリーサイズの袋詰めアーモンドチョコをどつさりと贈ってやればいいのだ。

広海はどんなに高価なチョコよりも、庶民の味のアーモンドチョコが一番好きだったはずだから。

うーん。挽きたてのコーヒーのいい香りが凜香の鼻先をくすぐる。

昔から、広海の淹れるコーヒーは、文句なしにうまかった。

広海がカップを二つ載せたトレイをソファの前のローテーブルに運んできてくれたのはそれから数分後だった。

「こうやって、おまえと二人でコーヒーを飲むのは、何年ぶりかな」

コーヒーカップを手に、ソファにもたれるようにして広海と並んで床に座る。

凜香はコーヒーを口に含み、広海の話に耳を傾けた。

「なあ、凜香。俺たち、あんな別れ方をしていなければ、結構うまくやっていったんじゃないかなあ。おまえはどう思う？ 俺の思い込みか？」

「ああ。思い込みだ」

間を空けずに答える。

「即答かよ……」

広海はがつくりと肩を落とし、ふうつと寂しげなため息をついた。

「私はあんたと付き合ってたわけでもないし、あのあと進展してたかどうかなんて、実際問題、考える方がどうかしてると思う。私はあの時、広海や他のメンバーに、騙されたんだ。あのことだけは一生忘れないからな。……今言えるのは、それだけだ」

「まだ、そんなこと言ってるのか？ 黙ってたのは……悪かったと思う。でも騙したわけじゃない。おまえならやれるし、きっと成功すると思った。あの時のおまえのステージは、最高だったと思ってる。客だって、俺たちだって、みんなおまえに釘付けになって。いつしか会場中が一体になっていた。おまえも、そのことはわかってただろ？」

凜香は悔しそうに唇をかみしめ、膝の上のコーヒークップに視線を落とす。

そんな話をするために、ここに来たわけではない。昔の話を蒸し返すのが目的ならば、今すぐにここから立ち去りたい。

凜香は不機嫌さを全身で表して、広海を睨みつけた。

「わ、悪い。つい昔のことばかり言ってしまった。そんなつもりはなかったんだ。ただ、おまえと二人でここにいるのが、夢みたいで。まだ信じられなくて。これから先、もう絶対にこんな時間が持

てるなんて思ってたから……。俺が悪かったよ。じゃあ、本題に入るけど。いいか？」

まだ広海の状態を許したわけではないが、凜香は黙ったまま頷いた。

「仕事の話と、さっきの来栖さんの話。どっちから聞きたい？」

凜香は迷いながらも顔を上げる。

「じゃあ、仕事の話から。まさか、また別の補習講座の手伝いをしろとか言っんじゃないだろうな？」

いくら生徒のためとはいえ、もう広海の手伝いはこりこりだ。

「それはない。補習講座は予定通り、あと二日で終わるよ。そうじゃなくて、実は、秋の文化祭のことなんだ。俺は今年度、生徒会の担当でありながら吹奏楽部の副顧問ってのは、おまえも知ってるよな？」

「知ってる」

そうだった。広海は、クラス担任の業務以外に、二足のわらじを履いているのだ。

凜香はクラス担任以外には、美術部の顧問と風紀担当に当たっている。

見た目は広海と同じ数のわらじを履いているが、風紀担当は他に五人もいる上、マツチヨな男性体育教師が頑張ってくれているので、当番の時だけ校門に立っていればいい。

広海の忙しさに比べれば、凜香の分担業務など、無いに等しいかもしれない。

「じゃあ、生徒会の文化祭実行委員長が、吹奏楽部にいるってのも？」

凜香は不思議そうに首を傾げる。さすがに、そこまでは把握していなかった。

が、それがどうだと言うのだろうか。

「知らないってか？ おまえ、本当に自分のクラスの生徒以外は何も知らないんだな」

「ふん、知らなくて悪かったな。美術部員なら知ってるぞ」

「そりゃあ、そうでしょう。でも、生徒はおまえを慕ってるっていうから、世の中ホントにわからないことだらけだな。で、そいつが俺に頼んできたんだ」

「何を？」

「先生たちのかくし芸を、舞台発表でやって欲しいって」

「か、かくし芸？」

「そうだ。おまけに、是非とも鷺野先生には出場して欲しいんだとさ。鶴本先生から頼んでくれと、泣きつかれた」

なんだ、それは……。凜香は小馬鹿にしたような冷やかな視線を広海に返した。

三年生の卒業にあたっての謝恩会や三送会では、そんなおふざけもたまにはある。

でも、文化祭だぞ？　なんで教師が生徒主体の舞台にほいほいと出なきゃならないんだ。全く、話にならない。

凜香は、おもいきり首を横に振り、却下と叫んで広海の話をおね除けた。

14・出会いは突然に その1

「どうしてもダメか？」

「あたりまえだ。却下」

「生徒の頼みでも？」

「も、もちろん……………」

いくらかわいい生徒の頼みであっても、理不尽な要望は拒否しても許されるはずだ。

「あいつらが言ってたぞ。鷺野先生はいつも近寄りがたくて怖いイメージだけど、そこが素敵で、かっこいいってな」

「……………」

今度は褒め殺し作戦だろうか。あまりにも見え透いた広海の手口に開いた口が塞がらない。

「そんな健気な生徒たちの願いを、おまえはいとも簡単に断ってしまっただよな？」

「……………」

直接生徒から頼まれたわけではないので、彼らが健気かどうかなんて、知ったこっちゃない。

そうそう。広海の言動に振り回されてはいけないのだ。

「一学期の終わりに生徒たちが勝手にやったアンケートがあるんだけど、男女総合の投票結果、おまえがダントツで人気教師ナンバーワンに選ばれたんだってな」

「えっ？」

文化祭のアンケートだとばかり思っていたのだが、そんなものであったとは……。凜香は今まで全く知らなかったのだ。

「集計結果は新学期が始まってから、生徒会の掲示板に貼り出されるらしいぞ。その中でも女子生徒に人気があるって、いいよな。同性に好かれるのは、おまえの人間性が認められている証拠だろ？」

「冗談だろ？ どうせ、女子生徒には、あんたが一番人気だろうし」

「いや、俺もそう思ったんだが……というのは冗談にしても、それが違うんだ。ほんの数票差だったらしいが、おまえに軍配が上がった。ちなみに、男子生徒の人気ナンバーワンは里見さんだったらしい。そこでだ。人気者のおまえに舞台で何かやってもらえれば、文化祭が盛り上がりたっても思っただろうな。あいつら、ああ見えて案外見る目があると思わないか？ 俺はおまえが選ばれて、誇らしく思うぞ。まあ、男子生徒が里見さんなのは、あれは見る目というよりも、本能的なものだろうけどな。なあ、凜香。ここらで一発、昔みたいに、舞台上で暴れてみないか？ 俺も一緒にやるから。なっ？ 頼むよ」

広海が両手を合せ、凜香に頼み込む。

「この通りだ。凜香、頼むよ。別に昔のことを公表する必要はない

んだし。おまえと組んで、歌やってただなんて、誰にも言わない。それならいいだろ？ な？ 凜香」

凜香は必要以上に顔を寄せて迫ってくる広海を追い払うようにしてコーヒを一気に飲み干し、ゴツンと荒っぽい音を立てて、カップをテーブルに置いた。

「お、おい、凜香。俺が初任給で買った記念のコーヒークップ、粗末にするなよ」

「はいはい、悪かったですね。それくらい、ちゃんと手加減してますから。なあ、広海。……うま……った。ひろ……の……ヒー」

凜香はそっぽを向きながら、あくまでも付け足しといったニュアンスで、棒読みのようにつぶやいたのだが。

「えっ？ 何か言ったか？ 聞こえないぞ。もう一回言ってくれ。なあ、凜香」

何かとても重要なことを聞き逃したかのように広海が慌てふためいて、執拗に凜香を問いただすのだ。まるで確信犯のように。

「ったく、もう……。だから。うまかったって言ってるんだ。広海の淹れてくれたコーヒー……」

とたん広海が形相を崩し、でれでれと笑顔になる。

「そうか。うまかったか。照れずに、はっきりそう言えよ。じゃあ、もう一杯どうだ？ ちょっと待ってるよ」

カップをトレイに載せて、いそいそと広海が台所に舞い戻る。
あの頃も、そうだった。凜香が一心不乱にキーボードと譜面に向
かっていると、いつの間にかテーブルには、湯気が立ち上るコーヒ
ーがそつと置かれていて。

ミルクも砂糖も何も入っていない、ただのブラックコーヒーだけ
ど、広海の淹れてくれたコーヒーだけは、そのまま飲めた。
すっかり濃い目の色がついているのに苦味が少なく、さらっとし
ていて、鼻の奥にはわつと芳醇な香りが広がっていく。

凜香は床から立ち上がってソファに座り直した。
そして、ふかふかの座面に手をついたとたん、身体が斜めに傾き、
いつしかゴロリと身体を横たえ、まどろみ始めてしまったのだ。

今からもう十年近くも前になるだろうか。

大学一年の夏を迎えた頃、凜香は軽音楽サークルを辞めたにもか
かわらず、一人暮らしを始めたばかりの部屋にポツンと置いてある
キーボードを弾きながら、歌っていることが多かった。

あのボーカルの声が忘れられなかったのだ。

歌うことがこんなに気持ちいいものだなんて、思ってもみなかっ
た。

次第に心がほぐれてゆき、優しい気持ちになっていく自分が嬉し
くもあった。

そしてとうとう、その年の秋が深まった頃、凜香がたった一人で
ストリートミュージシャンまがいのことまでやってしまうことにな
るだなんて、誰が想像しただろう。

一度やるともうやめられない。ストリートの魅力にどっぷりとはまっけていく自分を、凜香はもう止めることが出来なかった。

凜香が歌っていた場所は、大学に程近い駅前広場の一角だった。もうすでに何組もの人たちがそれぞれのパフォーマンスを繰り広げていたので、比較的にもぐりこみやすかった。

ギターをかき鳴らして、一人で歌う者。五人組みのロックバンドや、バックミュージックなしで、アカペラを朗々と歌いこなすつわものまで、それはそれは様々な音楽好きな若者がそこに集い、表現を楽しんでいたのだ。

演奏を聴きながら、ダンスをする人もいる。どこかのグリークラブの声量の豊かさにも驚かされた。彼らのクリスマスソングは今振り返ってみても絶品だったと思う。

まさしくそこは自由空間そのもので、道行く人もふと足を止め、老若男女を問わず笑顔になり、同じ音を共有する喜びに、ほんのひと時だけ浸っていく……。そんな場所だった。

黒いレザーのキャリーバックにキーボードとスタンドを詰めて、賑やかで人通りの多い一等地からは少し奥まったベンチの側で見よう見まねで始めた自分だけのオリジナルコンサート。

どんな機材が必要かもわからないまま、とにかくキーボードに新品の単一電池六コを装備し、予備の電池もバックに補充して、いそいそと現地に出向く。

マイクはないので、キーボードの音量を絞り声を張り上げ気味にして、おっかなびっくり、凜香のたった一人だけのステージが幕を開ける。

もちろん聴いてくれる人どころか、立ち止まる人もいない。オリジナル曲も悲しいかな二つしかないため、たとえ耳を傾けてくれる人がいたとしても、この二曲がエンドレスでは、すぐに飽きられる。

昼間、大学の講義中にノートに歌詞を書きとめ、夕方部屋に戻ってからキーボードに向かって作曲するという作業を繰り返し、十二月に入る頃には、十曲くらいのストックを持つまでになった。

そのうち一人二人と足を止めて聴いてくれるようになり、常連の客がついたのもこの頃だった。

ファンレターももらった。数人の女子高生が地べたに座り込んで惜しみない拍手をくれた時、凜香はあまりの嬉しさに泣きそうになったのを昨日のことのように思い出す。

クリスマスの恋人同士を歌った甘酸っぱい歌詞のアップテンポの曲が評判になり、何重にもなった人垣の前に、いっぱいしのライブ気取りを経験した日には、もうこの状況から抜け出せなくなっていた。凜香は完全にストリーートの魔力にとりつかれてしまったのだ。

凜香のすぐ後ろ側のベンチのところで、ギターを手に弾き語りをしている人があるのは当然知っていた。

ストリート開始初日にここで歌ってもいいかと了解を得た当人なのだから。

それ以降、目が合えば会釈を交わす程度だったその人に、クリスマス当日の夕方、演奏の準備中に突然声をかけられたのだ。

凜香はちょうど、底冷えのする石畳の上でキーボードスタンドを組み立てているところだった。

少し前から誰かの視線を感じていたが、路上ではよくあることなので別段気に留めもせず、黙々と作業を続けていた。

だが、しかし。なかなか立ち去らない上に、徐々にその人が距離を縮めてくる。

じっと見られているように感じる視線が正直気持悪くて、イライラが限界に達しようとしていた。

凜香の性格上、につこり笑って何か御用ですかなどとしおらしく訊くなんてことは、到底無理な話だったので、こうなったらどこまでも無視を決め込んでやろうと、絶対に顔を上げなかった。すると、遠慮がちに、こんにちはと言う声が、頭上をよぎる。

凜香の俯き加減の視線の先には、その言葉を発したと思われる人物の、履き込まれた大きなボロボロの靴があった。男の足だ。

「あの……。すみません。いつも君の後ろで、ギターやってる者です」

突然降ってきた男性としてはやや高めの響きのある声に、凜香はスタンドのネジを回していた手を止め、顔を上げた。

「ど、どうも。こんにちは」

かろうじてそれだけ言葉を返す。というか、いったい何の用だろう。

すらりと背の高いその人物を、凜香は訝しげに睨みつける。

よほど凜香の態度が怪しげだったのだろう。

目の前のその人物は一步二歩と後ずさりして、引き攣ったような

笑いを口元に浮かべ、真っ黒なレンズのサングラスを、すっとはずした。

15・出会いは突然に その2

横長レンズのスポーティーなサングラスを取り除いたその人は、予想に反して優しい目をしていた。

きりつとした眉の下で、眩しそうに目を細め、精一杯の笑みを浮かべている。

次第に光に慣れてくると、くつきりとしたラインの二重まぶたの目を大きく見開いて、ともすれば冷ややかにも見えかねないグレーがかったブラウンの瞳を露わにする。

凜香は心の中で、うーんと密かに唸った。

これはかなりの上物だ。まさしく世に言うところのイケメンの部類ではないかと。

では、そのイケメンギター野郎が、凜香にいったい何の用があるというのか。邪魔者はさっさとここから立ち退けとでも？

もちろん、ここは公共の場だ。役所や管理人が何か言ってきた場合は、速やかに指示に従うつもりでいる。

アンプを使用しないことと、夜はショッピングセンターの閉店時刻までという約束で、広場の管理団体からは使用許可が下りているはずだ。

どこの誰とも知らぬギター野郎にとにかく言われる筋合いはない。

凜香は毅然とした態度を崩さず、けん制するように睨み返した。

「あつ……。準備中に手間取らせてごめん。単刀直入に言うよ。よかったら、今日、俺と一緒に歌わない？」

自分の不利な立場を悟ったのか、ギター野郎は特上の笑顔と共に、そんな誘い文句を投げかけてきた。

「えっ？ それ、どういうこと？」

背中にギターを背負ったこの男が、本気でそんなことを言っているとは思えず、半信半疑で訊ねる。

「今日は、クリスマスだろ。一緒に演奏できたら賑やかでいいかなと思って。どう、やってみない？」

「急に言われても……」

「いつも後で君の歌を聴いてて、うまいなあと思っていたんだ。それに、君もその教育大の学生だろ？」

君もと言うことは、このギター野郎も教育大生ということだろうか？

でも凜香はこの男を学校で見かけたことなどない。広場付近には、いくつもの大学がひしめき合っている。

あるいは、当てずっぽうでそう言ったのかもしれないと思い、慎重に相手の出方を窺う。

まさか……。ストーカーなのか？ 凜香はこの男にますます不信感を募らせていった。

「あつ、いや。俺、決して、怪しい者じゃないから」

ずり落ちそうになったギターを背負い直し、イケメンギター野郎

から名を改めたストーカー男が顔の前でひらひらと手を振る。

「君、軽音サークルにいただろ？ 実は俺も入っていたんだけど、結局、辞めてしまったんだ。君がいなくなっただけにね。あのサークルと俺の音楽の方向性が、ちよつと違うような気がして……。それで、夏からここでストリートやり始めたってわけなんだ。先月、君が急に現れた時には、ホント、びっくりしたよ。絶対にサークルにいたあの人だっと思った。君は俺のこと、憶えてない？」

「ごめんなさい。全く憶えてないです」

「全くって……。まあ、普通は、そうだよな」

凜香は目の前で肩を落とすストーカー男が少し不憫になってきた。こうなると、ストーカー男というのは言いすぎかもしれないと反省する。

少しばかり譲歩して、最初の印象であるイケメンギター野郎に、イメージをもどすことにした。

そういえば、凜香に続いてすぐにサークルを辞めた人がいるとは聞いていたが、たったの一日だけ在籍していた凜香が、メンバーの顔を憶えているはずもなく。

改めて、イケメンギター野郎を足の先から頭のとっぺんまでくまなく観察してみた。

肩につくくらいの長めの髪は、明るめのブラウンに染められている。

いや、夕陽のあたる角度によっては金髪に見えるかもしれない。それくらい目立つ色だ。

ワックスで固められた前髪は微妙な角度を保ちながら、風が吹いても全く乱れる様子はなかった。

片方の耳にはシルバーのピアス。首には皮ひもでつるされた仰々しいクロスが掛けられていた。

穴だらけのジーンズにボロボロのスニーカー。

後からいつも聴こえてくる歌声は、複雑なコード進行をもとめせず、軽快に響く魅惑のテナーボイス。

そして、言わずもがな、ほぼパーフェクトなイケメンフェイス。

凜香はようやく納得した。女子高生が鈴なりになって後の男に群がっていた理由がやっとわかったのだ。

ということとは。このイケメンギター野郎と組んで歌えば、客が倍増するのだろうか。

そうだとしたら、この話を断る理由はどこにもない。

だが、一緒にやろうと急に言われても、どうすればいいのか凜香にはさっぱりわからなかった。

いきなり相手の曲にキーボードで合わせるなんて技も、残念ながら持ち合わせていない。

「どうだろう。とりあえず、今夜だけでも一緒にやってみないか？」

「それはいいけど。でも、私は何もできない……」

「心配いらないよ。君はいつもどおりでいい」

「そついうわけにはいかない。あんたに迷惑がかかるぞ」

ギター野郎の顔つきが一瞬強張った。きっと凜香の飾り気のないことは遣いにとまどっているのだろう。

いくらイケメン相手でも、凜香は自分自身を偽ってまでこの男に取り入るうとは思わなかったのだ。

「君さあ、見かけによらず、その、勇ましい感じなんだね」

「よく言われる。私は、あんたの好みの女じゃないことだけは確かだから。やめるなら今のうちだけど」

「いや、やめないよ。君のそのキャラ、俺は嫌いじゃない。何かを表現する人間は自然体が一番だと思う。俺だって、こんな身なりして路上でギター弾いて……。教師やつてる親からは勘当寸前の扱いだ」

そう言って、クックククと笑う。

「それならこうしよう。それぞれの持ち歌を交互にやって、最後に君のクリスマスの手紙だっけ。あれと一緒にやればどうか？ お客さん、驚かしてみようよ」

凜香の目の高さに合わせるようにしゃがみこんだギター野郎が、またしても極上の笑みを湛えながら、そう言った。

凜香はすっかりその笑顔に吸い込まれそうになるのを、やっとのこと食い止める。

その時、凜香の脳内はすでにキャンバスと化し、目の前のとろけそうに甘い男の顔を猛スピードでデッサンし始めていた。

「ねえ、君？　大丈夫か？」

凜香は男の声に意識を呼び戻される。えっと……。一緒にクリスマスの手紙をやるうところまで、話をしたはず……。だったよな。

凜香は雑念を取り払うようにぶるぶると頭を振った。

「あつ、ごめん。ちよつと考え事してた。なら。やってみるよ。あなたの言つとおりにする。ただ、悪いけど、クリスマスの手紙の楽譜の余分、ないんだ」

まさかこのような事態になるとは思っていなかったので、凜香は自分だけにわかるように書き留めたメモ程度の譜面しか持ち合わせていなかったのだ。

「ああ、それなら大丈夫だよ。いつも君の演奏を聴いていたからコード進行もわかるし。適当にこっちでハモるから、いつもどおりに歌ってくれたらいいよ」

適当にハモるって……。凜香はきょとした顔でギター野郎を覗き込む。

「あの……。後ろで聴いてただけで、私の曲のコードがわかるのか？　それって、あ、あんた、もしかして、プロのミュージシャン？」

こめかみをピクツと痙攣させながら凜香が訊いた。

「へっ？　俺がプロだって？　あははは！　違うよ。ただの音楽マ

ニアだよ。ああ、そうだ。名前もまだ言っていなかったな。俺、教育大音楽専攻の鶴本広海。専門はピアノで、こういったギターや歌なんかも少々。だいたい曲は一度聴くとコードはわかる。脳内で譜面も起こせる。絶対音感もあるらしい。でもさ、音楽専攻にはこんな奴、うじゃうじゃいるから。音楽専攻じゃなくても、ここでストリートやってる奴の中には、俺よりすごいのがいっぱいいるってこと。俺が特別なわけじゃないんだ。よって、将来は音楽教師志望。君は？」

「私？ 私は、鷺野凜香。美術専攻で、美術教師志望……です」

「鷺野さんか。鷺野さんは美術専攻なんだ。絵とか描くの？」

「まあね。油絵が専門だけど、イラストや漫画なんかも少し」

「へえ。すごいな。俺は絵は全くダメだよ。鼻の長さでしか、象とライオンを区別して描けないレベル。鳥に四本足描いたの、俺だから。ってことで、鷺野さんのこと、凜香って呼んでもいいかな？」

「ええっ？ いきなり呼び捨て？」

凜香は、あまりに馴れ馴れしいこの男にあきれ果てる。

「ごめん、ごめん。もちろん、失礼を承知で言ってるんだ。歌ってる途中にみんなの前で、君のことを鷺野さんって呼んだら、ステージがしらせるような気がするんだけど。俺、間違ってる？」

「あ、いや。そうかもしれない。お客さんに楽しんでもらうためには、そういったノリって大切かもな……」

「じゃあ、そういうことで。凜香って呼ばせてもらっね。君は俺のこと、広海って呼んでくれたらいい」

「ひ、ひろみ？」

「そう。広い海で広海。よろしくな」

イケメンギター野郎のペースにすっかり巻き込まれた凜香は、このあとただだけ打ち合わせをして、ショッピングセンターのイルミネーションが灯ると同時に、ぶつつけ本番で広海とのコラボステージを始める。

思ったとおりの反響で、一曲終わるごとに、客の輪が大きくなっていく。

広海が、凜香の十八番にして初めてファンの心を掴んだクリスマスの手紙をものの見事にハモリ、音に厚みを出してくれた。

まるで初めてシャドウと口紅をつけた高校時代の自分のように、今夜の演奏に胸のトキメキが収まらない。

あつちもこつちも恋人同士の二人連れで溢れ返るクリスマスの夜、本日の演奏の大成功を祝って、凜香は広海と一緒に駅前の立ち食いそばの店に入った。

歌っている間はそれなりに体内が暖かく感じたが、終わると同時に、身震いするほどしんと冷え込む冬の夜だった。

あの時、二人で肩を並べて食べたそばの味が今でも忘れられない。

この記念すべきクリスマスの夜が、凜香と広海のコンビ結成の初日だったのだ。

……ああ、いい匂い。そばのだしの匂いか？

……違うような気がする。そばじゃない。これは、コーヒーの香りだ。

………ってことは、ここはどこなんだ。あれ？ 目の前にいるのは……。

広海？ えっ、えっ、な、なんで？ 凜香は目の前で、どアップになる広海の顔にのけぞる。

「おまえなあ……。人んちに来て、のん気にまどろむなよ！ 俺がコーヒーのお代わりを淹れてやってる間に、フツー寝るか？ せっかくのうまいコーヒーが冷めてしまっただろうが。………ったく、襲っぞ！ このやろうっ！」

16・キュートな寝顔

ああ……。そうか。ここは広海の官舎だった。

凜香はようやく自分のおかれている状況を理解し、もそもそ上半身を起こす。

「わ、悪い。昔のことをいろいろ思い出したら、ついつい眠くなってしまうって……」

ソファのすぐ下でめいっぱい不機嫌な顔をしながら胡坐をかいている広海が、横目でじろつと凜香を見る。

「ったくもう……。で、俺の頼みは聞いてくれるのか？」

「えっと、文化祭のこと……。だよな？」

「そうだ。生徒をがっかりさせるな。なあ凜香。あいつらの注文に応えてやれよ」

「……考えておく。今すぐ返事しなくてもいいだろ？ こっちにもいろいろ心積りつてのがあるからな。まあ、あれだな……。前向きに……検討するよ」

「そうか！ よし、わかった。是非とも前向きに頼む」

広海の顔がぱつと明るくなった。

「なんでまた、そんな風に肯定的な気持になったんだ？ さっきはもうダメかと思ってたんだぞ。なんかいい夢でも見たのか？ 気持

よさそうにすやすや寝息を立てていたからな」

「いや別に。どこまでが過去の記憶で、どこから夢だったのかはよくわからない。ただ、広海と一緒に歌い始めた頃は、それなりに楽しい毎日で、仲良くそばを食べたりもしたなつて……。なのに、どうして一年後にあんなことになってしまったんだろう……」

「おまえもそう思うだろ？ なんでもつとまく立ち回れなかったのかと、俺だって、あの頃の自分が不甲斐なくて仕方ないよ。あの騒ぎの数日後に、おまえの部屋に置いていた俺の荷物が宅配便で送られてきて。ああ、おまえは本気だったんだ、これでおまえとも本当に終わっただんと自覚した」

「あれは、自分でもびっくりするくらい、素早い行動だったと思う」

「おまえの変わり身の早さのおかげで、あの後ひと月ほど、俺がどれだけ荒れたと思う？ もちろん正月も実家には帰らなかったし、バイトもクビになって。今だから白状するけど、俺が物心ついてから泣いたのは、あの時が初めてだった。もうボロボロだった」

連絡もすべて断って、顔も見たくないほど嫌いになった相手だというのに、凜香はその頃の荒れた広海を、何度か目撃したことがあった。

そこに広海がいるとわかっていながら、二人で通った居酒屋をふらりと覗いて広海の姿を確認すると、そのまま立ち去るのだ。

「あの頃の俺、どうしようもないほど若くて未熟だったんだ。恥も外聞も捨てて、おまえのところに泣きついて行けばよかったのに、変なプライドが邪魔してそれが出来なかった。おまえとずっと一緒にいたかったのに、失恋した自分に酔って、自分ほど惨めな男はい

ないと仲間の同情を煽って……。とうとう今日までそれを引きずって来たってわけだ」

「でもな、広海。あの時、あんたが泣きついて来たとしても、私はあんたを受け入れることは出来なかったと思う。あれで良かったんだよ。お互い違う世界を見て、いろいろな人と出会ってきたからこそ、今こうやって真正面から向き合えるようになったんだ。言っておくけど、あの時は、あれが私の精一杯の広海への抵抗だった。あんたのこと、本当に許せなかったんだぞ。思い出すだけでもいまだにムカついてくる」

もちろん、今でも広海を許すつもりはない。広海の身勝手さに、凜香の心はズタズタにされたのだから。

ただそれと文化祭のことは別の次元の話だ。文化祭実行委員長がどうしてもと望むなら、希望を叶えてやるのも悪くない。

教師が本音でぶつかれば、きっと彼らも本気を返してくる。お互いがもつと分かり合える、絶好のチャンスでもあるのだから。

「おまえの気持ちはわかってるつもりだよ。俺のやったことは許してくれなくてもいい。一生かけて償っていく。この先、ずっと」

「無理しなくてもいいぞ。まあ、私たちは、これ以上深入りすることもないだろうし、今のスタンスを続けていけば、お互いが傷つくこともないと思う」

「また、そんなことを言うのか？ 俺はやっと今、突破口が開いたと思ってる。おまえがどんなに嫌がっても、今度は引き下がらないからな。覚悟してるよ。でもな、俺、ちょっとシヨック受けてる。なあ、凜香。俺ってそんなに魅力ないのか？ 俺と二人きりになっ

ても、グーグー眠っちまうくらいリラックスできるって、どうよ……」

「あ。……どうしてかわからないが、広海といると、なぜか眠くなるんだ。それはもう、条件反射みたいに。昔だってそうだったじゃないか」

「ああ、そうだ。残念ながらそうだった。おまえを大事に思うあまり、おまえに手出しできなかった俺が悪いんです。俺がおまえをそんな風に育ててしまったんです。はい、そうです、その通りです……」

広海がふて腐れたようにして、ぶつぶつと文句を言う。

決して広海に魅力がなかったわけではないのだが。確かに凜香は、広海といると眠ってしまうことが多かった。

でもそれは、そこまで彼を信頼していたという証拠でもある。

だからと言って、妙齡の女性に向かって襲うぞとは何事だ。

起き抜けに聞いたあの言葉を、さらっと聞き流したフリをしているが、凜香の心臓はさっきから拍動の間隔が狭まり、まるで早鐘のようにドキドキと鳴って暴れ回っている。

この歳になると、そういった男女のコミュニケーションも身に覚えがないといえはうそになる。

いくら力自慢の凜香であっても、素手で男の力に敵うわけがない。最悪の場合、力ずくで押さえ込まれる可能性もある。

でもまあ、相手は広海だ。凜香に彼氏がいるのも知っている。とても本気で言っているとは思えない。

それに、凜香も大人の言葉遊びを真に受けて突っかかるほど、もう子供じゃない。

「私があんたの前でリラックスできるのは、それだけ鶴本先生を信用している……ってことで」

「そんな信用、別にいらないな。ああ、もったいないことしたよ。さつき襲つとけば良かった。絶好のチャンスだったのにな。おまへの寝顔、案外、かわいいんだぞ。何もしゃべらないおまえは最高にキュートだからな」

「キュ、キュート？　気持わるっ」

まさか広海の口から、そんな乙女な単語が飛び出してくると思えず、凜香は苦虫を噛み潰したような顔になる。

「なんだよ。せつかく褒めてやってるのに。もちろん、起きてしゃべっている凜香も好きだ。俺は来栖さんとは違うから……」

凜香は、しゃべらない自分が世の中を平和にするというのは、以前から十分に承知している。

それに、そんなに襲いたかったのなら、正々堂々と意気込みを見せてくれればよかったのだ。

凜香とて、ここのところそっち方面は、随分御無沙汰だったはずなんだし……。

凜香はいつしかとんでもない方向に思考が向かっていることにはたと気付き、急いで軌道修正を試みる。

それに、たった今、凜香の想い人の名前が広海の口からこぼれ出るのも、しっかりと耳にした。

凜香はソファの端に座りなおし、床に座ったままの広海にここに

座れと座面を指し示した。

「話の腰を折るようで悪いけど。そろそろ来栖のことも、聞かせて欲しい。まさか、あんたと彼がそこまで親しかったなんて、誤算だったわ」

「おいおい。だったわ、って……。凜香がそんな女らしい言い方をするのはヒジョーに珍しいな。本来なら何をおいても歓迎すべきところなんだが、そうも言ってられない。まあ、ふざけるのはこれくらいにして。……そうだな。来栖さんと俺は、かなり親しくさせてもらっていた。大概のことは、知ってるつもりだ。でも、来栖さんの名誉のために、これだけは言っておく。あの人、一度もおまえのことを悪く言ったことがないぞ。それに最後まで、おまえの本名を俺に明かしてない。あの人、狭い教員の世界で、噂が先行するのを随分嫌ってたからな」

「じゃあ、なんで私だってわかったんだ？ あんたの素晴らしい推理と予知能力で、私だとわかったとでも？」

「まあ、来栖さんのこれまでの話を繋ぎ合わせると、おまえ以外の人間は考えられなかった。来栖さん、彼女のこと。つまりおまえのことだろうけど、かりんって名前だと俺に紹介してくれてたんだ」

「た、確かに……」

「だから初めのうちは、来栖さんの彼女がおまえだと気付かなかったんだ。もちろん前の職場の同僚だとも言ってなかったからな。なんとなく似てるけど、全然違う名前だろ？ それと、そのかりんさんはとても女らしい人で、かわいらしいんだとずっとのろけてた。凜香、怒るなよ、絶対に怒るなよ。それって絶対に、おまえだとは、

わからないだろ？ もちろん、おまえは女だけど、女らしいとか、かわいいとかいう表現は……ちょっと違うと思うんだ。そうだよな？」

「うーっ。悔しいけど。広海の言うとおりだ。……でも。なんでそんな嘘を吐いてたんだろ。来栖の前でも、このとおり、ありのままの私だったんだけど」

来栖の真意が理解できない凜香は、無意識にちょこんと首を傾げていた。

「おっと、凜香。今一瞬、悩殺されかけた。おまえ、反則。そんな風にして俺を見るな」

「はあ？ 何、わけのわからないこと言ってるんだ。私がどうしようも勝手だろ」

凜香は首を元の位置に戻すと、目の前のやたら近い位置にいる男を睨みつけ、威嚇する。

「だ、だから、冗談だよ。そんな怖い顔するなよ……。で、先月、飲みに行った時、来栖さんの口から、とんでもない真実を聞かされて……」

「何を、聞かされたんだ？」

まだ冗談の続きを言ってるようにしか見えない広海の本気度を測るように、凜香は穴が開きそうなほど彼を見つめた。

「そ、それは……。おまえ、本当に何も聞いてないのか？」

「だから、何？ はっきり言えよ」

「だったら……。やっぱり俺からは、言えないな」

17・終焉の気配

広海が気まずそうに、目を逸らす。

凜香はそれでも知りたかった。来栖にいったい何があったのか、真実を知っておきたかったのだ。

「広海。あんたが来栖のことをかばっているのか、それとも、私にシヨックを与えないために事実を隠したいのか……。どっちなのかはわからないが、私は本当のことが知りたいんだ。時機を見て彼に直接聞くつもりではいるけど、その前にあらましを聞いて、気持の整理をしたいと思ってる。ねえ、広海。お願い、教えて。あんたが言ったなんて、来栖には言わないから」

「凜香。俺は別に来栖さんに言ってもらっても構わないさ。もしおまえが本当に知らないというのなら、それはルール違反だと思うかな。当然、来栖さんに否がある。なあ、凜香。いつから来栖さんに会ってないんだ？」

「先月から。その前もほんの少し、会っただけだ」

「そうか……」

まるで凜香の痛みを分かち合うかのように、広海が悲しそうな目をして頷く。

「広海……。本当のことを言うと、今年になってから、ほとんど会っていないんだ。恋人らしい関係は、ここ一年ほど全くない」

「あ……。まさか、そこまで疎遠になっていたとは。俺も知らなか

ったよ」

「向こうがとつくに冷め切っているのは、薄々気付いていた。別れる覚悟はとつくに出来ている……つもりだ。いつまでたってもかわいげのない私が嫌になっただと思う。だから、どんな内容を聞いても驚かないし、言ってもらったほうが逆にすっきりする。だから……」

「俺も、おまえが知っておいた方がいいとは思う。そりゃあ、知っておくべきだろう。でも結構キツイ内容だぞ。本当にいいのか？」

「いい。私は大丈夫だから、あんたの知ってること、全部言っ欲しい。別の女が出来たんだろ？ 違うのか？ ねえ、言ってよ。黙ってないで、早く！」

大方、女問題だろうと見当はついていてる。

職場にいい人が出来たのかもしれない。いや、卒業生からのアタックに負けた可能性もある。

何か言いたげな目をして、それでいてなかなか言い出せない来栖の心の葛藤を、凜香はずっと前から察知していた。

背後に別の女性の影がちらついていることにも、とつくに気付いていたのだ。

広海に言ってもらえれば、耐えられるような気がしていた。

広海なら、凜香がどんなに取り乱しても、きつとそのまま受け止めてくれるはずだ。

広海ならすべてを包み込んでくれる。広海なら、広海なら……。

「おまえなあ……。本当にさっきから、反則ばかりやりやがって。

今の凜香、めちゃくちゃかわいいし。というか、教師になってからのおまえって、ホント、別人かと思うくらいきれいになったよな」

照れながらそんなことをぬけぬけと公言する広海に、凜香は開いた口が塞がらない。

来栖のことはどうなったんだ。そんな齒の浮くような社交辞令より、一分一秒でも早く話の先を聞かせて欲しいというのに。

「去年の春、東高でおまえと久しぶりに顔を合わせた時、悔しいが、いい恋愛をしてるんだなあと思ったよ。ああ、俺はもう完全に出遅れたってな。でも俺は、今の女らしい凜香もいいが、昔のトンがった意味不明な凜香も好きだった。あれはあれで、俺のつぼだったし……」

告白タイムでもあるまいし、気安く好きだったなどと言う広海にますますあきれる。

「私もあのことがあるまでは、広海のこと、結構好きだったかも。相思相愛だったのに、おいしいことしたな。フッフッフ……」

来栖のことを早く知りたいのはやまやまだが、これは広海なりの気遣いかもしれないと凜香は思い始めていた。

ショッキングな事実を告げる前に和ませておこうという、ありきたりな作戦だ。

ならばそのお礼にと、極上のジョークで切り返したつもりだったのだが……。

広海の顔がじわじわと赤くなり、潤んだ瞳で凜香を見つめているではないか。

「り、凜香。相思相愛って……。ホントにそうだったのか？ それならそうと、なんであの時はつきり言ってくれなかったんだよう。俺は、ずっと独り相撲だと思ってたんだぞ。なあ、凜香。今から俺達、やり直さないか？」

はあ？　なんでそうなる。凜香は、この男の考えていることがさっぱり分からなくなっていた。

「広海の馬鹿！　空気を読めよ、空気を。今、そんな話をしてる場合じゃないだろ？　もう焦らすのはこれくらいにしてくれ。これでも私、結構傷ついてるんだぞ……」

「わ、わかったよ。俺が悪かった。ごめん……」

広海が決まり悪そうにぼそつと謝った。

「うん……」

「それで、さっきの続きだが……。来栖さん、それまで俺に話していたかりんのは全部嘘で、本当は全く正反対の女性なんだって突然言い出すんだ。彼女の真実を話すと、俺が引くんじゃないかと思つて、正直に言えなかったらしい」

「なんだ、それ……」

「実は、かりんは元同僚で、男っぽい性格で、こんな女性で、こんなこともあつて……って包み隠さず話してくれた。もちろん俺は引きはしなかった。かりんの個性は誰かさんと全く同じだし、世の中にはよく似た人がいるもんだと、逆に微笑ましく思っただくらいだからな。それで、その時俺は確信したんだよ。かりんという女性がお

まえたってことを。いつしか来栖さんは、自分の理想の女性像を俺に話していたんだ。さもそんな女性がいるかのように。おまえのことは好きだったけど、いつかは自分の理想の女性像に近付いてくれると、ずっとそう思ってた。でも、おまえは、そうならなかった……」

「そ、そうだったんだ……。ちょっとショックかも。どうすればよかったんだろう。女らしくと言われても、これでも精一杯、女らしいつもりなんだぞ！」

「わかってるって。おまえは十分に女らしいよ。そりゃあ、言葉は悪いし花柄ワンピースは着ないけど、心も身体も何もかも、正真正銘女だ。誰が何と言おうと、おまえは女だよ」

広海はそう言って凜香を正面から見下ろし、頬を撫でる。

「……知ったかぶりするな。身体まで確かめさせた覚えはないぞ」

広海の思わせぶりな手を払いのけ、調子に乗るこの男に釘を刺す。

「あー。せっかく優しく労わってやってるのに、そんな身も蓋もないことを言うなよ。おまえは確かに女だって、一般論を言ったままだろ。それと、俺の叶わぬ願望……」

「勝手に言ってる」

こんな奴を相手にしたのがそもその間違いだったのだ。

この男が語る来栖の姿を、このまま真に受けてもいいのだろうか。凜香の脳裏に一抹の不安がよぎる。

「俺って、さつきからおまえにやられっぱなしだよな。自分でも情けない奴だと思つよ。でもな、学校では俺の方がずっと形勢が有利だろ？ まあ懺悔の気持ちもこめて、ここではおまえに一步譲っておくしよう」

「私が黙っておとなしくしてるのをいいことに、学校でのあんたの横暴っぷりには、ちよいとばかり頭にきてたところだからな。いつか見てろよとずっと仕返しの機会を伺ってたんだ」

「おお、こわーっ。もう十分に仕返しはもらったから。これ以上は勘弁してくれよ。で、話はもどるが。東高に転勤が決まった時、おまえ、来栖さんにプロポーズされたんだよな？」

どうして広海がそこまで知っているのだろうと不快な気分に襲われるが、来栖と親しかったのなら、それも仕方ない。

「そ、そうだ」

凜香はとまどいながらも正直に答えた。

「でも、断った」

広海が有無を言わさぬ目で、凜香をじっと見据えて言った。

「そう……だ」

確かに凜香は来栖に結婚を迫られたことがあった。別の勤務先になるなら結婚しても仕事に支障はないからと、即、決断を迫られたのだ。

年齢的にも身を固めるのにはちょうどいいタイミングだったのか

もしない。

結婚を機に、家庭に入って専業主婦になれと言われたわけでもなかった。

二十七歳という年齢や来栖の真面目な性格を考えてもこの結婚話に異論はない……はずだった。

でも、踏み切れなかった。なんかまだ遣り残したことがあるような気がして、プロポーズを断ってしまったのだ。

彼が嫌いだとか、別れたいとか。そういうのではなかった。ただ、結婚だけは違うような気がしたのだ。

まさか断られるとは思ってもいなかったのだろう。来栖はその後、何度も凜香をくどき、プロポーズを繰り返したのだが、凜香の意志が揺らぐことはなかった。

そんな凜香にも変わらず、来栖は優しくかった。凜香がその気になるまで待つと言ってくれたのだ。

そして半年が過ぎ、一年経つても……。やはり結婚する気にはならなかった。

もし子供が先に出来ていれば話は違ったのかもしれない。ルーズになった時もあったが、ついにコウノトリは振り向いてくれなかったのだ。

「おまえに結婚を断られた時、来栖さん、かなり落ち込んでたからな。初めは、なんでおまえが来栖さんの求婚を断ったのか、不思議で仕方なかったけどな。でも考えてみたら、おまえ……。昔から、粹にはめられるのが大嫌いだったよな？」

「……うん。まあな。家事もあまり得意じゃないし、そもそも結婚

そのものに、憧れも持っていなかった。でも来栖とは、ずっと一緒にいたいと思ってた。別れるなんて、これっぽっちも考えたことなかった」

「それなのに、断ったんだ。女心はわからん。永遠の謎だな」

「ああ。私もそう思う……。断った理由を、なんて説明したらいいのか。今でもよくわからないけど、生活も含めて何もかも来栖と一緒にというのは、どこか違和感があつて。そんなにべったりしたら、自分の心の奥まで覗かれそうな気がして、臆病になつていたのかもしれない。だから私のマンションにも、一度も入ってもらったことがないんだ。広海ならわかるだろ？」

決して不潔にしているわけではなかったのだが、どうにもこうにも、整理整頓というたぐいの能力が生まれつき凜香には欠如しているのか、部屋の中がすぐに散らかってしまふのだ。

描きかけの絵から、雑誌類の気になる部分を切り抜いたものも、あちこちに散らばっている。

はたまた授業で使えそうな廃材や空容器まで、床を埋め尽くすほどのモノが常に散乱している状態なのだ。

いくらなんでも、これを見れば、誰だって百年の恋も冷めてしまっただろう。

「全くもって、おまえらしいよ。昔はよく掃除してやったよな。どうせ、散らかり放題で誰も呼べないんだろ？ 美術専攻してる奴って、美的センスにも溢れてるだろうから、初めておまえんちに行く時、ちよっとわくわくしてたんだぜ。でも、あれだもん……。まあ、創作する分には、あれくらいの空間の方がインスピレーション

が湧いて、逆にいいのかもしれないけど。じゃあ、あれか？ あの部屋を知ってるのは、俺だけ？」

「そうだよ。後にも先にも広海だけだ。だって、あんたの借りてた防音完備のマンション、大学から遠すぎただろ？ 私の家の方が駅前にも近くて便利だったからな。あんたなら悪い人じゃなさそうだし、寛大な気持で、入室を許可していたんだ」

「許可してくれて、光栄だな。だからと言っちゃなんだけど。おまえの部屋を使わせてもらうお礼を兼ねて、いつも掃除してやってたんだよな」

「はいはい、そうでした。たすかりました。そのごおんはいっしょうわすれません」

凜香の口から棒読みの謝辞が告げられる。

広海の顔が突然生気を失くしたかのように曇る。
あまりにもそっけない謝礼の言葉に気を悪くしたのだろうか？
もっと気持ちを込めて礼を言えとでも？

「広海？」

凜香は広海の顔色を窺いながら遠慮がちに彼の名を呼んだ。

すると、広海がそれと同時にどさっとソファにもたれかかり、目をつぶって大きく息を吐き出す。

天井を見上げる格好になった首のまん中で、喉仏が大きく上下するのが見えた。

「……来栖さん、見合いしたんだ。おまえに結婚を断られてすぐに」

「見合い？」

「ああ。来栖さんの親が、勝手に動き出したらしい」

18・そして、始まる

「見合い……」

凜香は力なくそうつぶやいたあと、まばたきもせず、目の前にある二杯目の琥珀色の液体をじっと見つめていた。

見合いとは。それはつまり、結婚を前提とした男女の出会いの儀式のことだ。

凜香とて、ここ数年、実家に帰るたびにその手の話を親から幾度となく聞かされていた。

客間のマホガニーのテーブルの上には、仰々しい台紙に貼り付けられたどこの誰とも知らぬ男性の写真が積み重なっていたのを思い出す。

来栖が見合い。

凜香は今日まで、全くその事実を知らなかったのだ。

「来栖さん、何度も見合いをさせられたみたいだな。もちろんそれは、親を納得させるために、形だけのものだったらしいが、この春に会った女性と、どういうわけか意気投合したらしくて……。かりんとのことも、まだきちんとしていないのに、とんでもないことをしてしまったって、自分を責めてたぞ」

凜香は黙って広海の話聞いていた。親思いの来栖ならば、それもあり得るだろうと妙に納得しながら……。

「まあ、俺は……。来栖さんの言う通り、とんでもないことやっち

まったなっと思ってたよ。でもまさか、まだおまえに言ってなかったとはな。だからと言って、俺が来栖さんを責められないのは、おまえだってわかってるだろ？ 来栖さんの親父さんは八十近いんだ。最初は親孝行のつもりで、しぶしぶ見合いに臨んだんだと思うし……」

凜香は一度だけ来栖の両親に会ったことがあった。

父親は、温厚で優しくそんな人だった。一人息子の来栖を、まるで孫を見るような慈しむ目で見ていたのを思い出す。

高齢で来栖を生んだと言っていた母親も、その時すでに七十歳を迎えていたはずだ。

「凜香。こんなこと言いたかないが、あきらめろ。あきらめて来栖さんを自由にしてやれよ。俺さ、おまえにかなりひどいことを言ってるっと思うよ。でもな、おまえが結婚を断った時点で、流れが変わってしまったんだよ。……それでもまだ、来栖さんが好きなのか？」

凜香ははっとして、横にいる広海を見た。

「こんなこと、おまえに訊いてどうするんだって話だが。でも大事なことだろ？ どうしようもなく来栖さんが好きならば。俺だっておまえの力になってやりたいと思うさ。今ならぎりぎり、そう言ってやれるよ。今なら……な」

「広海……。わたし、わたし……。来栖が、やっぱり好きだ。こんなになっても、まだ好きなんだ……。広海、ごめん」

「冗談であるにしても、広海が凜香を思ってくれているのは伝わってくる。」

やり直そうとまで言うてくれた人に向かって、ここまで言うのは、

凜香も心苦しかったのだ。

「そうか。好きなのか……。まいったなあ」

広海が両腕を頭の後ろに回し、ソファの背もたれに倒れこむ。

「なあ、凜香。何度も言うけどさ。どうしても、あきらめられない？　俺が来栖さんの代わりになることは、無理なのか？」

「ひ、広海！　なんてこと言うんだよ。広海は広海だろ？　来栖の代わりになんかなれないに決まってる。私は絶対にあきらめないから。そんな女なんか、来栖のそばからつまみ出してやる」

まだ、来栖本人から直接聞いたわけではないのだ。

本当のことかどうかもわからない状況で、あきらめるなんて出来るわけではない。

どうしてあの時、来栖のプロポーズを断ったのだらうと、凜香は今ごろになって悔やんでいる自分に気付く。

待ってくれると言った彼の言葉を信じて、甘えていた自分が今となっては許せない。

じゃあなぜ、結婚しないと決めた時にきっぱりと別れなかったのだらう。

彼を傷つけたなくて、自分も傷つきたくなくて……。時が二人のわだかまりを解決してくれるとも思っていたのだらうか。

結局、凜香のうやむやな態度が、ますますお互いを傷つける結果になってしまったのだ。

「ねえ、広海……。今からでも、来栖とやり直せると思う？　せつ

かくのプロポーズを、あんな風に断ってしまった私が悪かったって言えば、許してくれるかな？ そんな女のことなんか忘れて、私のところに帰って来てって言えば、また元通りになれる？ ねえ、教えてよ。広海、教えて！」

凜香はこつちを見ようとしない広海の身体を激しく揺すぶり、答えを待った。

その昔、この目の前の男の元を去った時、二度と同じ過ちを繰り返さないと誓って、来栖との恋愛に向き合ってきたつもりだった。なのに、またもや、凜香の手から大切なものが零れ落ちようとしている。

「凜香、落ち着けよ」

ソファにもたれていた広海が、ゆっくりと起き上がった。

「厳しいことを言うけど……。来栖さんとは、もう元にはもどらないと思う。だっておまえ、来栖さんに自分を全部さらけ出すのが嫌なんだろう？」

「あっ……」

凜香は呻くような声を漏らし、広海を掴んでいた手を離れた。

「今、俺に言っただみたいなおまえの気持を、来栖さんにぶつけたことがあるのか？ おまえの部屋にもあの人を入れないんだろ？ どうなんだよ。それでも来栖さんを好きだって言えるのか？」

「そ、それは……」

「相手を好きになる、愛するっていうのは、本来の自分を全部相手に受け止めてもらうことなんだ。それが出来るなら、今からでも来栖さんのところに行つて来いよ。俺は止めないから」

来栖のところに行けと言う男をじつと見ながら、凜香は自分自身に問いかけてみた。

今すぐ彼の元に行つて、この気持ちをぶつければいいんだ。

あなたが好きだ。だから見合いをした彼女とは別れてくれとすがりつけばいい。

そして、そして？ それからどうすれば？

凜香の思考はそこでピタツと停止してしまった。

その先にあるのは、もう結婚しないとわかっている。

凜香自らが来栖に結婚を申し出るしか、残された道はないのだ。でも来栖には、意気投合した見合いの相手がいて、彼の心はすでにその女で占められている……。

そんな来栖に、果たしてすべてをさらけ出すことが出来るのだろうか。

冷静になるんだ、落ち着いてじっくり考えろと、自分に言い聞かせる。

確かに来栖のことは好きだった。今でも好きだ。でもそれだけではない。

凜香はすでに気付いていたのだ。来栖は一生を共にする相手ではないと。

「どうした。凜香、行かないのか？」

広海の声が、凜香の心にずっと入り込む。

「広海……。私、やっぱり、行かない。いいよ、もういい。もういいんだ」

「ホントにいいのか？ 後で後悔しても知らないぞ」

「後悔なんて、しない。明日か明後日に来栖に会って、きちんと話をつける。私が一言、別れようって言えばいいだけだ。昔、広海の元を離れて、今また来栖を失って……。私は誰にも心を開けないし、頼ることも出来ない不器用な人間なんだ。こんなかわいげのない男みたいな女なんて、誰にも相手にされないよ。もう恋愛はこりごりだ。一生一人で生きていくことにする。広海も、私みたいにならないうちに、早くいい人を見つけて幸せになれよ」

ありったけの氣力をふりしぼって、そう言ったのに。

おまけに広海の今後のことまで気遣いをしてやったというのに……。

氣丈さを必死で保っている凜香を前にしながら、その男は肩を震わせ、声を上げて笑い始めた。

「くつくくつ、あはははっ……！ おまえ、やっぱりサイコー。大好きだよ、凜香。そうだ、その通り、誰とも恋愛なんかしないでいいからな。今までどおりまっすぐ前を見て、肩で風を切って、堂々と学校の廊下を歩いてくれたら、それでいいんだ」

涙を流さんばかりに笑い転げる広海が両手を広げ、きょとんとしている凜香をすっぱりその腕に抱きしめた。

「な、な、何するんだ！」

凜香が身をくねらせて広海の腕から逃れようとするが、ますますがつしりと抱きしめられ、１ミリたりとも動けなくなる。

「や、やめてくれ。それに、何だよ。学校の廊下を肩で風を切って歩けとか。私は背が高いうえに姿勢がいいから、そう見えるだけなんだ。ふ、ふざける、なー！　く、苦しい。離せよ、離してくれよ！」

「嫌だね！　こんなかわいい凜香を誰が離すものか。来栖さんありがとーっ！　おまえね、俺にだけ、何でもさらけ出してくれてるんだぞ。そこそこ、わかってる？　もう、今夜は帰さないぞ。そうだ、おまえ、体の具合、悪かったんだよな。ふふふ……。俺が、寝ずの看病をしてやるぞ。だから心配はいらないから……。って、おい、こら！　凜香！　大丈夫か？」

「ひ、広海……。もう、だめ……。だ」

その日二度目の貧血を起こした凜香は、そのままソファに倒れこんでしまい、本当に寝ずの看病をしてくれた某校の音楽教師に、次の日の明け方、丁寧に自宅に送り届けてもらうことになった。

意識が朦朧とする中、また何度も自分の名まえを呼んでくれたと、ハンドルを握る広海が嬉しそうに報告してくれる。

そして、シューマンのあの曲を弾いてくれと頼まれたとも言って、満足そうにフンと鼻を鳴らした。

凜香は広海の言うことを全部信じたわけではなかったが、クライスレリアーナを弾いてくれと頼んだことだけは、薄っすらと記憶の片隅に残っていた。

おまえが元気になったら全曲通して聴かせてやるが、今となつては、あまり気持ちよこめて弾けないかもしれないな……と、早朝の車の中でしたり顔で話す広海に、凜香はどうしてと訊ねてみた。

ところが広海は、知りたければ、図書館やネットでシューマンについて調べるとしか言わない。

決して口を割らない広海にこれ以上訊いても無駄だと観念した凜香は、絶対に自分で調べてやると、持ち前の負けん気を炸裂させる。売られた喧嘩は買うしかない。

が、クライスレリアーナを聴くということは、また広海と二人で会うということだろうか。

そう思った瞬間、凜香の思考回路がショート寸前になり、心臓のリズムまで狂いだすのがわかった。

夕べ、ずっと手を握っていてくれたのは、他の誰でもない、広海だった。

そのぬくもりが、今まさに彼女の指先に蘇り、凜香の心を再び乱れさせるのだ。

凜香は、自分の中で何かが始まったのを、今、確かに感じ取っていた。

19・ありがとう その1

夏休みもいよいよ今日が最終日だ。生徒達は今頃、徹夜覚悟で宿題と格闘中に違いない。

まあ、ほどほどにがんばれよと凜香はクラスの生徒の顔を一人一人思い浮かべ心の中でエールを送った。

美術の課題は、一年が水彩写生画と文化祭のポスター。

二年は四コマ漫画と文化祭のパンフレットの構成が課せられている。

そのうち文化祭で使い物になるものは、多分二割くらいだろうと予測する。

悲しいかな、本当に美術が好きで授業を選択した生徒ばかりではないのが現状だ。

書道は墨の後始末が面倒くさいし、音楽はクラシックがうざいし……などと散々文句をたれた挙句、消去法で美術を選んだ生徒が多いのは今も昔も変わらない。

ところが広海がこの学校に赴任してから、音楽を選ぶ男子生徒が増殖中だと聞く。

ギターやドラムなども使って、学期末にはミニコンサートまで開催する熱の入れように、音楽本来の楽しさを知った生徒がここぞとばかりに押し寄せる。

吹奏楽部にも続々と入部者がやってくるというから驚きだ。

広海が生徒の心を掴むのがうまいというのは来栖の話から推測していたので、まさしくその通りだと、認めざるを得ない。

凜香も広海の熱心さに誘発されて、負けじとさまざまなを取り入れてきたつもりだ。

漫画を題材にした実技演習も行っし、本格的な陶芸も窯元の協力を得て実現させた。

漫画といえば凜香が高校生の頃、あつかましくも出版社に投稿したことがある。

大賞や準大賞、佳作など名のある賞は逃したものの、入選者の中に名まえが載ったのを昨日のことのように思い出す。

その時の審査員の講評は……。

背景の書き込みはある一定のレベルに達しているが、キャラクターが淡々とし過ぎて、面白みにかける。次作に期待したいというものだった。

もちろん、それっきり投稿はしていない。漫画には早々に見切りをつけたのだ。

当時のGペンも、スクリーントーンもまだ凜香の机の引き出しのどこかで眠っているはずなのだが。

しかしもう二度と使うことはないだろう。部活の漫画好きの生徒に譲ってもいいかなと思う。

凜香は冷房が心地よく効いた自分の部屋でパソコンの画面を前に、キーボードの上で手の動きを止めて思考をストップさせていた。

こんなことをしている場合ではないというのに……。

風紀関係のプリントの原稿を今夜中に作り上げ、明日の朝、生徒が登校してくる前に印刷することになっているのだ。

と言っても、去年の原稿に少し手を加えるだけだから、そんなに時間はかからない。

それが終われば、後はもう寝るだけだ。まあ、パソコンの調子が

良ければという条件つきではあるが。

結局、七月も八月もカレンダーどおりの出勤で、有給休暇も自宅研修も取らなかったというか取れなかった。

もちろん部活もあるので土曜日も日曜日も大方出勤していた。

つまり、ほぼ毎日学校に出向き、広海と顔を合せていたという勘定になる。

蓄積された疲れが肩や腰に重くのしかかる。休みが……欲しい。この時期に及んで、凜香は切実にそう思った。

パソコンデスクの隅でキラリと光る、細い鎖状のアクセサリーの残骸が目に入る。

凜香はそれを見ながら、一週間前に来栖と会った日のことをぼんやりと思い出していた。

「これは、かりんちゃんが持っていてくれたらいいよ。返してもらおうなんて思っちゃいないさ」

「でも。私が持っても、もう……。先生の、その。彼女さんに、悪いし……」

凜香は、来栖が指定してきた創作和食料理の店の奥まった席で、筆箱の大きさくらいの箱を、相手に差し出していた。

「君がそんな気を遣う必要はないよ。邪魔になるようだったら、シヨップに持って行って、売ればいい。ブランド物じゃないし、たい

した金額にはならないけど、金やプラチナとしての最低限の価値はあるだろうから」

さつきから繰り返される押し問答に、とうとう凜香が折れる。その小箱を引き戻し、カバンにしまった。

中身は二本のネックレスと、ファッションリングだ。何かの節目に来栖を選んで凜香に贈ったものだった。

ネックレスの内の一つは、凜香も気に入っていて、肌身離さずつけていたものだ。

あとの二つは、あまりにもデザインがかわいらしすぎて、ほとんど身につけたことはない。

別れるからといってすぐに捨てるのも忍びなく、来栖に引き取ってもらおうと、家からいそいそと持ってきたのだ。

「かりんちゃん。本当に、ごめんね。もっと早くに会って、君にきちんと言うべきだったよ。悪かったと思ってる」

「ううん。終わったことはもういい。私だって悪かったと思ってるし。ちょうど、先生が見合いをしてる頃だったと思うが、あの頃、先生が何度か誘ってくれただろ？ でも、私がそれを断って……。確かに仕事も忙しかったけど、時間を作れないわけじゃなかった。先生が何かを言いたそうにしているのは気付いていたんだ。それを聞くのが怖かったんだと思う。それに、せっかくのプロポーズも断ってしまったし……」

「あの時に、きちんと別れるべきだったよね。僕も未練がましいことをしたと思ってるよ。いつかは君が僕のプロポーズを受けてくれるんじゃないかと信じてた。なのに、結局僕の方が君を裏切る結果になってしまっ。ねえ、かりんちゃん。僕の話、鶴本から訊いた

「んだろ？」

「えっ？ それは、違う……。昨日、先生に電話するまで、知らない…… かった」

「かりんちゃん、嘘はつけないからね。彼を傷つけまいと、そう言ってるんだろうけど……。鶴本は、君のこと、好きなんだろ？ あいつも君と同じで、嘘がつけないからね……」

凜香は思いがけない来栖の言葉に息を呑む。

「どういうことだろう。来栖は凜香と広海の関係は知らないはずだ。なのに、どうして？」

「僕が気付いていないと思ってた？ 鶴本はね、僕を困らせまいと思ったのか、ずっとかりんちゃんのことを知らない振りして、話を聞いてくれていたんだ。でもね、クリスマスが近い十二月のある日に、鶴本と飲んだことがあって。僕が席をはずして、戻ってきた時、あいつ、何かを口ずさんでるんだよ。よく聞いてみると、かりんちゃんが時々ハミングしてたのと同じ曲だったんだ。クリスマスのなにかって言うてたよね？ かりんちゃん、言ったよね。この曲は大学時代の忘れられない曲だって。誰が作ったのか知らないけど、クリスマスが近付くと、ついつい口ずさんでしまうって。あれ、かりんちゃんが作った曲だったんだね」

凜香は目を見開き、しばらくの間呼吸をするのも忘れて、来栖の口元だけをじっと見ていた。

20・ありがとう その2

「ああ、そんなに驚かないで。君を非難するつもりで言ったんじゃないから」

来栖が困ったように眉をひそめ、日に焼けた顔を曇らせる。

ひと目でスポーツマンだとわかる頑強そうな見かけからは想像もできない優しそうな声と、落ち着いた物腰は、久しぶりに会った今夜も全く変わりはない。

さわやかな体操のお兄さんスタイルはまだまだ健在のようだ。

「不思議に思った僕は、鶴本に訊いたんだ。それ、何て曲？ って。そしたら鶴本が、急に顔色を変えて、口を閉じてしまった。あいつ、無意識に口ずさんでいたんだね。これは何かあるなと思った。なかなか言うてくれなかったけど、僕のしつこさに負けて、ある人が作った思い出の曲だとやっと白状してくれたんだ。ある人って、もしかして、鶴本の好きな人だったりして……と冗談半分で訊いたら……。凶星だったみたいで。照れて違う違うとしきりに否定してたけどね。ああ、なるほどね、そういうことかって、すぐにわかったよ。あいつ、かなり飲んでたからな。いったいどれくらい飲んだんだよってくらい、酔ってた。それで、口が滑ってしまったんだろ？ この曲を知っているのは自分とその人と、ごくわずかな人だけだ……。って言うってた。その人のことが今でも忘れられない、とも……。付き合ってる彼女には、絶対に言えないって、苦笑いを浮かべてた」

凜香は心の中で、広海のバカと毒づく。広海が底なしなのは、学生時代もそうだったし、学校の飲み会でも確認済みだ。

でも、酔ってるそぶりは見せず、いつも淡々としていて、済ました顔をして帰っていく広海しか知らない。

酒の勢いで、自分でも気付かぬ間にそんなことまでしゃべってしまったのだろう。

凜香は何も言えずに俯いたまま、店員がこまめに継ぎ足してくれる緑茶のゆげの行方を追いながら、尚も話を続ける来栖に耳を傾けた。

「次の日だったかな、君に会った時、またもやあの曲を口ずさんでいる君がいて……。もう間違いないって思った。実はかりんちゃんが鶴本の忘れられない彼女なんじゃないかってね。二人は同じ大学の同期だけど、美術と音楽じゃ接点がないし、お互いに知ってるはずはないだろうと思い込んでいた僕が甘かったってわけだ……」

「せ、先生……」

凜香は顔を上げ、不安そうな目で来栖をじっと見つめた。

「鶴本の彼女とはすでに何度か会ったことがあったから、そろそろかりんちゃんのことをきちんと紹介してもいかなとも思ってた。でも、鶴本の忘れられない人が、僕の直感どおり君だとしたら。到底、二人を会わせるなんて出来ないよね。君と鶴本を再会させると、何かが変わってしまうんじゃないかと思って怖くて……。結局、あいつにはまだはつきりと、僕の彼女が君だとは伝えていない。鶴本も、君を知っているとは絶対に口を割らないからな」

来栖がお茶を一口飲み、また話し始める。

「君の転勤先が東高だとわかった時、僕がどれだけ動揺したと思う？ 何かの間違いじゃないかと、君に何度も訊き返したよね。だからあの時、すぐに君にプロポーズしたんだ。ここで君を捕まえてお

かないと、取り返しの付かないことが起こりそうな気がして。でも君はそれを受け入れてくれなかった」

「先生、ごめん。言い訳はしないけど、あの時は、うんと素直に言えなかったんだ。相手が先生じゃなくても、きつと断ってた。結婚なんて考えたこともなかったから。でもこれだけは信じて。私は、つ、鶴本のことは、東高に赴任するまで、同僚になるなんて知らなかったんだ。それに、私たち、ずっと絶縁状態だったから……」

「絶縁状態？　なるほど……。鶴本の態度がおかしかったのはそのせいかな」

「かもしれない。大学在学中に大喧嘩をして、それっきり。だから私が先生のプロポーズを断ったことと鶴本は、全く関係ないんだ。だから……」

「わかってる。信じてるよ。君が嘘をつけないのは、僕が一番よく知ってるから……。その頃、親からも結婚はまだかつてせつつかれていて。君に断られた事実を知らせたたん、君と結婚するとはかり思っていた親がひどく落胆して、親父は入院するし、お袋も泣いてばかりで……。いつまでも元氣だと信じて疑わなかった両親の現状を思い知らされた。挙句、誰でもいいから見合いをしろと泣きつかれて。三十四歳にもなる独身の息子が家にいるのは、親の世代には苦痛でしかないらしい。とにかく形だけでもこなせば、そのうち親もあきらめるだろうと簡単に引き受けたんだ。相手の女性には悪いと思ったが、気乗りのしない最悪な態度で見合いをして、なるべく向こうから断らせるように仕向けた。あと一回だけという約束で三度目の見合いをした時……。今の彼女と出会ってしまった。スポーツクラブのインストラクターをしている彼女とね。そしていつの間にか、お互いに……。僕はいつたい何をやってるんだろうって、

自分が情けなくて。そのうち、君に合わせる顔もなくなつて……」

「先生。もういいよ。その彼女。きっと先生の好みの女性なんだろう？ おしとやかで、優しくて」

「かりんちゃん。君にそこまで言わせてしまつて本当に申し訳ないでも、違ふんだ。どちらかと言うと、君に似てるかもしれない。さっぱりした性格で、彼女も学生時代、僕と同じで水泳の選手だったんだ。でもこれだけは言わせて。君のこと、ほんとに好きだった。君と付き合つた三年間は、僕の今までの人生で一番幸せな時間だったよ」

「私も。先生から優しさをいっぱいもらった。先生、ありがとう。今なら……。心からそう言える」

付き合い始めはそんなに好きではなかったはずだが、月日を重ねるうちに愛情を育んでいく、そんな恋愛だったと思う。

「こんな僕を許してくれるのか？ 何を言われても、それこそ、殴られてもいいと思うくらい、今夜は覚悟を決めてここに来たつもりだ。君が許さないというなら、彼女と別れる心積もりもある。僕はそれくらい君に対してひどいことをしたと思つてる」

来栖が自分自身を許せないと言うように、肩を怒らせ膝に乗せた拳を握り締める。

「先にひどいことをしたのは、私だから。先生の結婚の申し出を断つておきながら、今まで引きずってきたのは、この私なんだし。実は、一昨日、鶴本に叱られたんだ。自分自身をさらけ出して、もう一度先生にすがつてこいつてね。でも、出来なかった。素直になれ

ない自分が疎ましかった。私は一生恋愛なんて出来ないって、ようやく自覚したのかもしれない」

凜香は広海に言われた夜のことを思い出し、ふふっと小さく笑った。すると来栖が不思議そうな顔をしてこっちを見ていた。まるで凜香の心の奥を探るような目をして。

「鶴本が？ そんなこと、言ったのか？ そうか……。かりんちゃん、やっぱり鶴本に……」

「あつ、いや、そうじゃなくて。ただ、私の体調が悪くて、迷惑をかけたんで。その時に、ちょっとそつという話になって……」

ついでに告白されて、抱きしめられたなんて、口が裂けても言えない。

勝手に見合いをした来栖と同罪か、それ以上の大罪になってしまっているのか。

「わかってるよ。君が僕に対して常に忠実であってくれたってことはね。問題は鶴本だ。君が僕のところに行かないって、絶対的な自信があつたんだろうな。その証拠に、君は今、僕に別れを告げに来た」

「うん……」

「かりんちゃん」

来栖がこっちを見る。その眼差しは凜香にとって、痛いほどに真っ直ぐなものだった。

「な、何？」

あまりにも揺ぎ無い視線に、凜香はたじろぐ。

「ありがとう。今日まで、本当に、ありがとう……とう」

来栖が精一杯の笑みを浮かべてそう言った。

「あ、ああ……。こちらこそ、ありがとう」

凜香は心から素直にありがとうの言葉が言えたと思った。
本当にこれで最後だと言うのに、涙が零れ落ちることもなかった。
来栖も泣いてはいなかったが。その声は震えていて、涙を堪えているようにも見えた。

その店を出た時、来栖が乗ってきた車で送ろうと申し出てくれたのだが、もちろん凜香はいいよと言って首を振った。

来栖の隣のシートは、もう凜香の場所ではないのだから。
じゃあと軽く手を上げてそれぞれの方向に歩き出したのを最後に、
振り返ることもなかった。

電車の中でも、マンションまでの道中でも、寂しさは一切感じなかった。

こんなことなら、もっと早く話をするべきだったと思うほどに、
あつけない幕切れだった……と思ったのだが。

部屋に入って、化粧を落とし、シャワーを済ませて……。

ベッドに入ったとたん、胸が苦しくなり、目の奥が熱くなって得
体の知れないものがじわつと込み上げてくる。

必死にこらえても、それは押し留めることが出来なくて、枕に埋

めた顔から嗚咽が漏れ、凜香はそのまま朝まで延々と泣き続けたのだった。

鎖状のアクセサリーの残骸を握り締め、またパソコンデスクの上にそつともどした。

来栖と別れてから一週間経つ。あれ以来、凜香は来栖を思って泣くことはなかった。

あの時に流した涙と共に、来栖のことは、もう完全にふっきれたのだと思う。

パソコンの画面を眺めながら、凜香はハッと我に返る。

そうだそうだ、忘れるところだった。広海の思わせぶりなシューマンの話を調べようと思っていたのだ。

広海ときたら、凜香を見下したような傲慢な態度で、知りたかったら自分で調べるなどと言い放ち、心をこめてクライスレリアーナが弾けなくなった理由とやらを教えてくれなかったのだ。

検索の枠内にシューマンと打ち込んで、隣のボタンをクリックした。

ところが動かないのだ。マウスを何度押しても、画面は固まったままで変化がなかった。

もしかしてフリーズ？

凜香は罪のないキーボードを、破壊しない程度に加減してパシッとたたき、椅子からずり落ちるようにして散らかった床の上にゴロンと寝ころがった。

検索枠に置き去りにされたままのシューマンの文字が、まるであざ笑うかのように凜香を見下ろしていた。

21・フリーズ

もしパソコンの画面が、この後もずっとフリーズしたままだったら。

買った店に、このノートパソコンを持ち込んで、修理を頼むしかないのだろうか。

以前も同じような状況になった時、来栖に部屋を見られたくない凜香は、誰にも助けを求めることなく、一人でこそこそと店に壊れた……と思われるパソコンを持って行ったことがあった。

お助けコールセンターなるものの案内も説明書に書いてあったが、電話の説明ごときで解決するほどの簡単な不具合であれば、とつくに自分で修理できるはずだ、などと自信があるにもほどがある……くらいの間違った判断を下した凜香は、善は急げとばかりに救急病院に駆け込むがごとく、店の修理カウンターに出向いたことがあったのだ。

そして、店員に不具合状況を説明し電源を入れたままのパソコンを差し出すと、ものの数秒で問題は解決して……。

お客様、どこも壊れていないようですけどと言われ、にっこりと特上の営業スマイルを返される。

あとは、すごすごとパソコンを抱えて帰っていくしかなくて……。

そんな赤っ恥をかくのはもう沢山だ！ 凜香は誰もいない部屋で、思わずそう叫んでいた。

強制終了して、一から立ち上げるべきなのか。

それとも、鼻歌交じりで難なくパソコンを操るあの^{いんぎんぶれい}慇懃無礼な音

楽教師に出張修理を頼むべきなのか……。

凜香のパソコン恐怖症は何も今に始まったことではない。

普段から堂々とアナログ派宣言をしている凜香は、ペントタブを使って画面を見ながらすいすいとイラストを描き、色付けまでしてしまっ生徒の適応能力の速さにひたすら感心し、自分のふがいなさを恥じてもいた。

だからと言って、ここに広海を呼んだりしたら……。それは向こうの思う壺ではないかと、凜香は天井を見上げながら、思いとどまる。

というのも、凜香が音楽室で広海のピアノを聴きながら倒れてしまったあの日から、毎日、車で家まで送ってくれているのだ。

里見栄子がそばに居ようが居まいが、有無を言わずに凜香を車に押し込む。

おかげで、栄子の視線が何気に殺気を帯びているのはもちろん、遅くまで残っているごく一部の生徒からも冷やかされる始末だ。

ほんとに最近のませガキきたら！ 何がヒューヒューだ。

広海曰く、補習講座を無理やり手伝わせてしまったせいで鷺野先生を過労に追いやった……。と、さももつともらしい理由を周囲に吹聴して自分の行動を正当化している。

近所に住む職員同士が一台の車に乗り合わせて出勤や帰宅することはよくある話だ。

凜香と広海もその一環だと見られているため、まさか広海に下心があるなどとは職員は誰も気付いていない。

ましてや、学校一の変わり者として名高い凜香を相手に、広海が恋愛感情を持つなどと誰が思うだろう。

あの気難しい鷺野先生を気遣う責任感の強い鶴本先生として、広海の評価がうなぎ上りなのは、凜香にとっては不本意でしかなかった。

凜香は普段あまりアクセサリーを好まないが、ひとつだけ身につけているものがあつた。

それは来栖にもらつた、ゴールドの細い鎖状のネックレスだ。

軽くてあまり目立たなくて。シンプルなシャツにも映りがいい。来栖からもらつたからというよりも、凜香が持っている中で、唯一、使いやすいアクセサリーとして、日々愛用していたのだ。

そして、そのネックレスを広海に指摘されたことから、昨日の帰宅途中、大喧嘩に発展してしまったのを苦々しく思い出していた。付き合っているわけでもない相手に、お気に入りアクセサリーにケチをつけられ、外せ外さいの大騒動になつたあのことを……。

広海の質問に正直に答えただけなのに、そのネックレスが来栖からのもらいものだとなつたとたん、乱暴に車線を変更し、路肩に寄つて急停止する。

「そんなもの、未練がましくつけるな！」

と、広海らしからぬ剣幕でののしられ、

「放つといてくれ！」

と、これまた大声で凜香が気丈にも言い返す。

二度とあなたの顔なんて見たくないと怒鳴ってその場で車を降りた凜香は、怒りに任せて首に手をやり、次の瞬間、そのネックレスを引きちぎってしまったのだ。

細めのゴールドのチェーンが、凜香の手のひらで無残な姿をさらす。

無意識にとった自分の行動に、凜香自身が一番驚いていた。

一部始終を見ていた広海が車を降り、黙って凜香の腕をつかむと再び車に押し込めた。

「ごめん……」

先に謝ったのは、もちろん広海で。

まだ呆然としている凜香の右手を広海の大きな手が遠慮がちに包み込む。

そして向かった先はデパートのアクセサリー売り場。

千切れてしまったネックレスのお詫びにと広海が選んだ物はプラチナメッキのチェーンに人工ダイヤのトップがついたものだった。確か手に取ったものはイミテーションで、一万円にも満たないものだったはずなのに。

家に帰って開けてみた商品には、鑑定書のようなものが添えられ、本物のプラチナとダイヤで出来たものにすり替わっていたのだ。

いつの間に……。支払いの時、広海が店員とこそそ話していたのはこういうわけだったのかと、ようやくそのからくりが気づく。

これは高い。絶対に高い。こんな物をもらう理由はないと、すぐに電話をしたのだが。

「もちろん、ボーナス払いにしてもらったから、今は痛くも痒くもない。……まあ、俺にしてみれば結構な出費だったかもしれないけど、給料の三か月分にはまだまだ届かないくらいのもんだ。心配するな。ダイヤも小さいし……。まあ、給料一ヶ月分ってことで。クライスレリアーナが以前ほどリアルに弾けなくなったお詫びだ。だからもう。来栖さんのはつけるな。俺のささやかな願いを叶えてくれよ……」

と、なんとも意味不明な返事をもらい、ますます戸惑ってしまった。

でも、嬉しかった。理屈抜きに、嬉しかった。

いくら気に入っていたからとはいえ、来栖の思い出を引きずったものを平気で身につけていた自分の浅はかさにも気付かせてくれたのだ。

広海には感謝してもしきれない。

その夜、今度こそ本当に、来栖とはすべてが断ち切れたような気がして、心が軽く浮上していくような気持になった。

そして、広海の電話を切った後、もう一度広海の声が聞きたくなったのは……。

多分、本当だったのかもしれない。

そして、翌日。つまり今日の朝、どこか腑に落ちないまま、このネックレスをつけて出勤してみた。

夕べは嬉しいと思ったのだが、やはりどう考えてもこれは高価す

ぎるのではないかと首を傾げてしまう。

でも、広海の願いとあれば、もらうべき品物なのだろうけど……。

いかにもつけてますと見せびらかすのは、教育上の配慮として慎むべきだ。

そんなもつともらしい言い訳を自分自身に言い聞かせながら、学校内ではシャツの中に隠してつけていたが、帰りに広海の車に乗り込む前に一番上のシャツのボタンをはずして、少し見えるようにしてみた。

案の定、目ざとくそれを見つけた広海が、喜びの声を張り上げる。なんとも大袈裟なやつだ。

「うおおおつ！ 凜香姫。それ、つけてくれてたんだ。俺はてつきり、袋ごと突き返されるんじゃないかと思っていた。それにしても、似合うねー。昨日つけてたやつより、百倍似合う。いや、何万倍も似合うよ。なあ凜香。これから俺とデートしない？ 焼き鳥専門のうまそうな店を見つけたんだ。おまえには、レバーをたっぷり食わせてやるから……」

などと調子付く広海に丁重にお断りして、七時ごろ家に送り届けてもらった……というわけだ。

焼き鳥に少しばかり未練があるが、広海がデートなどと言うものだから、はいそうですかと簡単に行けなくなってしまったのだ。

俺と付き合ってくれと……。広海の真剣な言葉を、来栖と別れてからまだ一度も聞いていない。

それに、いくら貧血がひどいからと言って、レバーばかり食べさ

せられたんじゃ、たまったものじゃない。

レバーが苦手な凜香は、その単語を思い出しただけで、ぶるっと身震いしてしまった。

やっぱり広海は広海だ。いつまでたってもあの頃のまま。

ましてや、凜香は真正正銘、恋人と別れたばかりで、少なくとも傷心真つ只中……の妙齡の女性なのだ。

なのにあの態度。デリカシーの欠如した広海の数々の言動にげんなりする。

シャワーと簡単な夕食を一人で終えたあと、風紀のプリント作成の仕事をして、ネットでシューマンを検索したら、即行フリーズ。

まことに残念極まりないが、このままパソコンが動かなければ、残された道はただひとつ。そう、選択肢はあれしかない。

凜香は床に寝っころがったままベッドの上にある携帯に手を伸ばし、たぐり寄せる。

一人寂しく焼き鳥を食べているであろう広海の携帯番号を表示させ、ふうつと大きく息をはく。

そして、五秒間その番号をじっと眺めたあと。

くるりと腹ばいになった勢いで、通話ボタンをぎゅっと押し込んだ。

22・もう絶対に離さない

「もしもし……。広海？」

『はあ？ 誰？ あっ、ああ……。凜香か。ごめん。俺だ』

相手を確認めもせず電話に出る広海に、あきれて物も言えない。

『どうした、凜香。やっぱり焼き鳥食わせるとか、今さら言っなよ。おまえに振られっぱなしの寂しい俺は、あれからコンビニに寄って、カップラーメンを二つ買ってだなあ。それ食って、酒を飲むのもやめて。おりこうにピアノを弾いていたんだが。それにしてもおまえ、冷たすぎるぞ。せつかく誘ってやったのに、なんで……』

意外にもすぐに電話に出てくれたまではよかったのだが、その後の話は余計だ。くどくどと、うざいことこの上ない。

「パソコン、壊れた」

とにかく広海のオンステージを途中で遮断して、用件を簡潔に述べる。

『なんで行かないって断るんだよ……。って、ええ？ 何だって？ 壊れたのか？ パソコン……。が？』

「うん。おかしくなった。画面がフリーズしてる……」

『殴って壊したんじゃないんだな？』

「んなわけないだろっ！ ちょっとは、その。殴ったけど……。でも、そんな壊れ方じゃないから。ああ、だからいつも言ってるんだ。パソコンなんて大嫌だってな。なんですぐに壊れるんだよ！ 広海が自分で検索して調べろって言うから、こんなことになったんだ！ あんたのせいだ！」

凜香は腹ばいになったまま、握りこぶしで床の上をゴンと叩いた。

『おまえのパソコンが壊れたの、俺のせいだって？ やってらんねえな。俺が遠隔操作でおまえのパソコンをぶっ壊したとでも？ なんかあるわけないだろーが。ったく、しょうがないな。なら、強制終了してみ。主電源ブチって切って』

「そんなことして、もっと壊れて……。二度と電源が入らなくなったらどうしてくれる？」

『ごちゃごちゃ言うな。そんじゃあCターキーとA1と……』

「あああああつ！ 難しいこと言うなよ！ そんなもの押さえて、どうしろって言うんだ！」

『わかった。わかった。ほんとに情けない奴だな。じゃあ、そのまま待ってる。今からそっちに行くから』

「……って、来るな！ 来なくていい！ おい、広海？ こらっ！ 返事しろよ！」

切れてる。電話……。広海の返事はそれっきり途絶えてしまつて。凜香は仕方なく相手を見失った携帯を切り、むっくりと起き上がった。

そして物に埋めつくされたフローリングの床をまじまじと見渡して、あきれたようにため息をつく。

これはひどい。たとえその景色に免疫のある広海といえども、この部屋に通すわけにはいかない。

ならば……。パソコンを抱えて、マンションのエントランスに待機して待ち伏せするのはどうだろう。

住民に不審な目で見られても、この際、目をつぶるとして。

でも、いくら近いといっても、ここに来るまでには十分以上はかかるはずだ。

着替える必用もあるだろうし、戸締りやら、車のキーはどこだっけと室内をあちこち探す時間も必要だ。

ささつと床を片付けて、広海を出迎えるという選択肢もある。

ただし、ささつと片付けたものをどこに置くのかがまたもや問題になる。

リビングもクローゼットも、我が家にはどこにもそんなゆとりはない。

しかしよく考えてみれば、広海はパソコンを修理しに来るだけなのだ。

この部屋が散らかっていようがいまいが、彼には関係ない。

パソコンが直るのなら、この部屋を見られることくらい、別にしまわないじゃないか。

凜香はそうと決めたら急に元気になり、すくつと立ち上がって、湯を沸かすためキッチンに向かった。

えっと、コーヒーはどこだっけと戸棚を物色していると、無情に

もインターホンが鳴り、来客を告げるのだ。

な、なんと。広海だった。いくらなんでも早すぎるではないか。凜香は計算違いをしていたことにはたと気付いた。広海にかぎって、車のキーを探し回る時間を計上する必要などないということに……。

凜香は、とんでもなく早く着きすぎたその来客のためにオートロックを解除し、玄関ドアの前に力なくたたずむ。

ドアを開けて入ってきたのは。Ｔシャツにハーフパンツ姿でにと笑ってみせる、昔のままの広海だった。

「さ、これでオッケー！ これしきのことと慌てるな。簡単取り扱い説明書ってやつをノートパソコンのそばにおいておけ。で、今俺がマーカーでチェックしたところを、そのとおりにやればいいんだ。な？ 簡単だろ？」

広海が我が物顔でつかつかと中に入り込み、中腰のままいくつかのキーをちょちょっと押さえて、あっという間に固まった画面を修復する。

何事もなかったかのように、いつものトップページがデスクトップに浮かび上がった。

「あ、ありがとう。助かった」

凜香は無事元に戻ったパソコンの前に座り、横で満足そうな笑みを浮かべる出張修理マンにとりあえず礼を言った。

「いえいえ、どういたしまして」

「お礼はコーヒーしかないけど。車なんだろう？　ならアルコールは……」

「ああ。それより凜香。あなたさまは、シューマンを検索されましたが……。よければ、私どもが続きをお調べしましょうか？」

広海の妙にへりくだった物言いが、癪に障る。

「いいよ。後で調べるから……」

凜香はそつけなく返事をしながら、しまったと心の中でつぶやく。あの画面のままフリーズしたので、検索欄のシューマンの文字を広海にバッチリ見られてしまったのだ。

不覚だった。まるで、広海のことになって仕方ないみたいに思われなかっただろうか。

今ここでシューマンについて調べて、広海にしたり顔でもされようものなら……。

凜香のプライドはずたずただ。こういうものは、あとでこっそり調べるに限る。

「おまえさあ。あのこと、知りたいんだろ？」

立ったままの広海がにやにやしながら、椅子に座った凜香を見下ろす。

「べ、別に」

凜香は出来る限り平静を装って、画面にわざとらしく風紀関連のプリント文面を呼び出し、そ知らぬふりを続ける。

「またまたそんなこと言っちゃって。ホントに素直じゃないな。ほら、ちよつとどいてみ」

「えっ、あっ、な、なんだよ!」

「シューマン、クライスレリアーナ……っ。これでどうだ!」

椅子から放り出された凜香は、広海の指がキーの上をすべるように走っていく様子に目を奪われていた。

男性にしては細くて長い指が、まるでピアノの鍵盤を操るかのように、なめらかで無駄のない動きを見せた瞬間でもあった。

「おっ! いろいろヒットしたな。うーん、これがいいかな? まあ、読めよ」

画面にはシューマンの肖像画と、クライスレリアーナの説明が記されていた。

広海と場所を入れ替わるようにして、今度は凜香がパソコンの前に陣取る。

「シューマンはクララとの恋愛がまだ成就してない頃、自分の恋の苦しみを、ホフマンのこの同名の悲恋の物語に重ね合わせ作曲したと言われている……」

悲恋の物語? クライスレリアーナが?

クララというのはシューマンの奥さんだ。

そこには、シューマンが奥さんを振り向かせるために、いろいろ苦労したということが、つらつらと書かれていた。

「ははは……。どうだ。俺もいっぱしに、おまえに苦悩し続けてきたからな。でも、もう俺のクララは、どこへもいかないだろ？　なあ、凜香？」

広海はこれまで、シューマンと自分の心情を重ね合わせて、クラリスレリアーナを弾いていたとも言うのだろうか？

全くもって信じられない。凜香が広海と決別してからも、他の女性との噂が絶えなかったはずだが……。

白々しさにもほどがある。大声で、あざ笑ってやろうと思ったのに……。

どういうわけか、胸がじりじりと痛むのだ。

広海がそんなに思い悩むほど自分が女として値打ちがあるなどと、凜香には到底思えないからだ。

広海には、もっとふさわしい人がいるはずだ。なのに、どうして……。

過去にあんな別れ方をしたにもかかわらず、倒れた凜香を誠心誠意看病してくれたあの日も。

そして、過去の男のネックレスをつけていることに本気で嫉妬して、代わりの物を贈ってくれたことも。

そのどれもが、広海の真剣な気持の表れなのだとしたら。

凜香は、胸元のダイヤにそっと手を当て、締め付けられる胸の痛みが治まるのを待った。

その時、背中にふわつと風が当たったような気がして、後を振り返ろうとすると。

すぐ横に広海の顔が現れて、椅子の背もたれごしに後から彼が抱きついて来るのがわかる。

始めは柔らかく。そしていつの間にか、身動きも出来ないくらい、強く抱きしめられているのだ。

「なあ凜香。俺の気持ちは、もうわかってるだろ？」

首筋にかかる広海の吐息が熱い。

「ちょ、ちょっと、広海。何を……」

「いいから。じっとしてろよ。今回はおまえになんとわれようが、離れるつもりはないからな。もう絶対に離さない」

「広海……」

凜香は急に早鐘を打ち始める自分の心音を、身体中で感じていた。

23 天使のいたずら

「あの時は俺も若かった。おまえに一発殴られたくらいで、なんであんなにあっさりあきらめてしまったんだろうって、随分後悔したよ」

広海の手が、凜香の手を包む。それでもまだ彼は凜香から離れようとしなかった。

「あの後、何人が別の女性とも付き合った。おまえのことを忘れようと、新しい恋愛に夢中になっているフリもした。そのうち本気になる、この人を好きになると自分に言い聞かせて。でもそうならなかった。結果はこのありさまだ。相手のペースで付き合い始めて、相手に終わりを告げられる。相手がどんなに素晴らしい尊敬に値する人でも。きれいだと言われる人でも。夢中になれなかったんだ。やっぱりおまえじゃなきゃだめだ。凜香。やり直そう。な？ いいだろ？」

何人かの女性と付き合った？ も、もちろん、そんなことはわかってる。

わかってるつもりだ。今尚、新たに言い寄られていることも知っている。

なのになぜ？ このイライラした感情は何？

東高に転勤してきたばかりの頃は、広海に彼女がいるとわかって、ふん、そうか……くらいで聞き流していたはずだ。

ところが、そのわかりきっている事実を広海の口から聞いたとたん、心が落ち着かなくなる。

広海の彼女の話など、聞きたくない。凜香は自分の変わりように、

ただただ啞然としてしまふ。

そして、広海の最強の武器でもある蕩けるような甘い声で、やり直そうなどと耳元でささやかれた日には、身体中の力が抜けて、遠い日のあの口づけが鮮明に蘇る。

どうしようもないくらいつきりと、脳裏にあの時の光景が呼び戻されるのだ。

だが、しかし……。凜香はとある矛盾に気がついた。

広海とは厳密に言うところの恋人同士の付き合いはなかった。

あくまでも、音楽をやる者同士の連帯感みたいな繋りしかなかったと思う。

たとえ、お互いに好意を持っていたとしても、気持を確かめ合ったのは、別れの前のほんの数分だけだった。

あの、二度と思い出したくないステージが終わって、思いがけず広海に告白され、その数分後には凜香の強烈な平手打ち。

広海とはそれつきりだったはず。

そもそも、何をやり直すのか。スタートラインの設定に互いに相違があるような気がするのだが。

「なあ、広海？ やり直すってことは、まず、友達としてやり直すんだよね？」

そのところをはつきりとさせておきたい凜香は、なぜか重なっている広海の手には指を絡めて、問いただす。

「友達？ なんだ、それ……。俺たち、いったいいくつだよ。高校生じゃないんだぞ。それに、友だち同士はこんな風に抱き合ったり

しない。手を取り合ったりも……しない」

凜香が無意識に絡めた指に広海がぎゅっと力を込めた。

いつの間にそんなことになっていたのか、何も記憶にない凜香は、絡み合った手を見ながら、頬が熱くなつていくのを感じていた。

「でも……。おまえがまずは友だちから始めると言うのなら、我慢するよ。ただし、二日間だけなら」

密着している背中からも、広海の声があまやかに響いてくる。

「たつたそれだけ？　なんでそんなに急ぐんだよ。それに、私と広海はあの時、友達同士だっただろ？　その……。こんなこともしなかったし」

「はあ？　それはちがう。そりゃあ、こんな大胆なこととはしなかったが、心は繋がっていたはずだ。正真正銘、おまえは俺のハニーだった」

「ハ、ハ、ハ、ハニー？」

凜香は指をほどき、広海の腕を押しつける。

ハニーとか、ありえないだろ？

それとも、当時広海の前で眠りこけている隙に、何かしたとも言っただろうか。

いや、さすがにそこまではしないだろうが、広海のハニー発言には、危険な香りが付きまとう。

凜香が椅子から立ち上がろうとすると、広海がすかさず抱きついて来る。

もぞもぞ動いてみても、広海の腕はびくともしない。

「俺がおまえに告白した後、キスをしたあの数分間だけは、お互い心が通い合っていたと思ったけど。……違った？」

確かにあの瞬間、凜香の心の中に小さな天使が舞い降りて来て、天国にも昇りそうな幸せな気分になったのは認める。

好きな人に好きだと言われ、初めて唇を合わせ……。心躍るひと時だったのは、紛れもない真実だ。

でもその直後、ライブ出演を頼まれたグループのメンバーから言われたあの一言……。

それで、凜香は怒り狂い、広海との甘いひと時も、儚い夢のごとく、その場から瞬く間に消え去ってしまったのだ。

広海だけは信じていたのに、彼も他の仲間たちとグルだったと知ったあの瞬間、凜香は広海への思いを心の奥深くに封じ込めてしまったのだから。

凜香の体が次第に強張ってくる。

せつかくの広海のぬくもりも、あのことを思い出せば、再び憎しみに変わってしまう。

凜香の気持を察したのか、広海が突如腕の力を緩め、ゆっくりと椅子を回転させて自分の方に凜香を向き直らせた。

そして広海に引き上げられるようにして立ち上がった凜香は、その距離感といい、見詰め合っている角度といい、ムード満点の恋人同士のようなシチュエーションに、身も心も引きずり込まれそうになるのを必死に堪えた。

「凜香。あの時のこと、やっぱり、まだ怒ってるんだよね？ 俺が全くの無実だとは言わないけど、間違ったことをしたとは思ってない。おまえの才能をみんなに認めてもらえるいいチャンスだと思ったし、おまえもきつとわかってくれると、そう信じて疑わなかったんだ。あのステージが終わった瞬間、おまえに俺の思いを伝えたくて。そして、その先も二人三脚でやっていけたらいいと単純にそう思っていたんだ。でも結局は、おまえを傷つける結果になってしまっただけ。なあ、凜香。俺とおまえは、またこうやって出会えたんだ。俺たちはきつとこうなる運命だったんだよ。あの時の続きを、今から……やり直そう」

広海の片方が手が腰に回され、もう一方の手が後頭部に添えられた。

広海の顔がじわじわと近付いてくる。これって、やっぱり、あれ……だよ……な。

あまりの急展開に思考力がついて行かない。広海が目を閉じ、顔を斜めにして迫ってくる。

「あつ……」

凜香はこの状況に耐え切れず、吐息のような声を漏らした後、不覚にも目をつぶってしまった。

このまま少しだけ爪先立ちになれば、広海の目的に協力できる。

広海の首に腕を回し、そのまま距離を縮めていけばいい。

凜香の手が広海の首筋に差し掛かった時。凜香はパチリと目を開けた。そして。

「う、ごめん……」

そう言って、さつと顔を背ける。あと一歩というところで、凜香は広海を退けてしまったのだ。

「りんか？ どうしたんだよ。こっち向けよ。なんで逃げるんだ。俺のこと、そんなに嫌いなのか？」

広海の大きくてしなやかな手が凜香の頬をはさみこみ、悲しそうな目で覗き込む。

「ち、ちがう。嫌いじゃない。本当だ。多分、あの当時くらいには、好き……かも」

凜香は自由にならない顔を広海に向けて、必死の思いで訂正する。

「なら、なんで？ まさか、来栖さんのこと、まだ引きずってるのか？」

「うっん。それはない。絶対にない」

広海の手に挟まれたまま、凜香がふるふると顔を振った。

「それじゃあ、もうこんな無駄な追いかけっちはやめよう。凜香、そうだろ？」

「うん。わかってるって。……わかってるよ。広海の気持ちも。そして私の気持ちも……。でも、まだ自分が今後どうしたいのか方向が定まらないんだ」

「方向が定まらないって、どういうことだ？ 難しく考えすぎなん

じゃないか？ 俺は、凜香とずっと一緒にいたいと思うし、おまえにもそう思っただけだ。ただそれだけだ。おまえは俺と一緒にだと苦痛なのか？」

「そんなことない。一緒にいて欲しいと……思う。でもな、広海。考えてもみるよ。私と一緒にいて広海は幸せになれるのか？ 見ろよ、この部屋。足の踏み場もないんだぞ。我ながらひどいと思う。料理の腕だって、あの頃とちっとも変わってないし、というより、前よりひどくなってるかもしれないし」

ようやく広海の手から解放された凜香は、もう二度と自分のところに天使が降りてくることはないだろうと、しょんぼりとうな垂れて、長いため息をついた。

すると凜香の頭上でクツクツクツと堪えたような笑い声が聞こえて来る。

何だろうと訝しげに見上げると、今度は頭ごと抱え込まれ、大きな広海の胸に上半身ごと捕らえられてしまった。

24・哀れなキーボード

「おまえなあ。そんなつまらないことで悩むな。俺を誰だと思ってる？ 掃除くらい、いつでも手伝ってやる。料理だって心配するな。現におまえ、こんなに元気に生きてるじゃないか。まあ、貧血予防に鳥レバでも食べばなんとかなるさ。なんなら、おたふくで毎晩食えばいいし、俺の実家もそう遠くはないから、メシ食わせてくれって、夜襲をかければいいだろ？ お袋も喜ぶだろうし。お袋、おまえのこと気に入ってたしな」

凜香は広海の胸からダイレクトに響いて来る声に、しばし聞き惚れてしまった。

真夏だというのに、こんなに密着していても不快じゃない。

このまま広海の身体の一部になってしまってもいいと思えるくらい、心地良かった。

しかし、広海の思いやりは嬉しいが、女らしいことが何一つできない彼女など、そのうち持て余すのではないだろうかと不安になる。来栖も口に出してこそ言わなかいが、うまくいかなかった理由のひとつに、凜香の性格が災いしているだろうことはもう間違いないと思う。

相手を不幸にさせるとわかっていながら身をゆだねることなど、凜香には到底出来やしないのだ。

「おたふくに毎日行くななんて不経済だし、栄養面の片寄りも心配だ。だからと言って、広海のお母さんに世話になるってのも、何も出来ない子どもみたいで恥ずかしいだろ？ こんな私と一緒にいたら、あんただってそのうちストレスまみれになるって。だから……」

自分を卑下するつもりなど毛頭ないのだが、真実は歪曲するべきではない。

広海が思いとどまるよう言い聞かせるのだが。

「いや、今のままの方がストレスまみれだ。おまえにうまい手料理を期待するとか、家事の素晴らしさを見せてもらおうとか。そんなこと思っちゃいないって。仕事のことで一緒に悩んで、音楽や美術の話もして。たまに、こうやってぬくもりを確かめ合って。そうしたいから言ってるんだ」

たまにやることが逆のような気もするが……。

学生時代、紳士的な振る舞いを貫いた広海の言うことだ。

ここはその言葉を信じてあげるべきだろうけれど、前の男と別れたばかりの身でありながら、すぐに別の男に乗り換える自分がふしだらに思えるのは考えすぎだろうか。

「広海。これからのこと、もう少しだけ考えさせて。まさか広海とこんなことになるなんて、ついこの間までは、想像すらしてなかったんだし。でも、広海にこうやって抱きしめられるの、嫌じゃない。今も、ドキドキ……してる」

凜香は自分の言ったことが無性に恥ずかしくて、広海のTシャツを強く握り締め、顔を隠すように埋めた。

「そ、そうなのか？ それって俺にときめいてくれたってこと？ じゃあ、もう何も悩むことなんかないじゃないか。では遠慮なくもう一度。今度は逃げるなよ」

そう言って本当に遠慮なく顔を近づけてくる広海に、凜香は確信する。

やっぱりこっちがメインで、たまにするのは仕事や趣味の話なんだろうと……。

このまま広海の気持を受け入れてしまえば、その後どんな流れになるかは目に見えている。

そしてそれを止めるなら今しかないということもわかっていた。

凜香は目をしっかりと見開いて、ちよつと待つてと広海に合図を送った。

これは決して拒絶ではない。今はその時ではないという単なる合図だ。

また今度と言うニュアンスを込めて、広海の暴走を止める。

「広海、今夜はこれくらいにして……。そうだ！　お願いがあるんだけど」

驚いたような、それでいてがっかりしたような顔をした広海が、今度は何だよと言っつて凜香の肩に手を載せ、はあ、と落胆にも似たため息をついた。

「今からここでクライスレリアーナを弾いてくれ」

「ここで？　俺に弾けと？　おいおい、そもそもおまえんちにピアノなんてないだろ？　どうすればいいんだよ。ボイスパーカッション風にやれとでも？」

広海がきよろきよろと室内を見渡し、首を傾げる。

「あるじゃないか。あそこに」

凜香が指差した先には、服やら本やらスーパールの袋やらがうずたかく積み上げられた台のようなものがあつた。

「えっ？ あれって、もしかして……」

「そうだ。あの時も使っていたキーボードだよ。最近、弾いてないからな。荷物置き場みたいになつてるけど」

「おおっ！ なつかしいな。あんなところにキーボードが埋まつていたとは。ここ掘れワンワンじゃないんだから、もうちょっとどうにかならないのか？」

「だから、ずっと弾いてなかったから」

「おいおい。だからって、いくらなんでもあれじゃあ、キーボードがかわいそうだろうが。それにピアノより鍵盤が少ないから、あれで弾いたら音が足りないぞ……。そうだ。今からうちに来ないか？」

「ええ？ 今から？ もう遅いぞ」

せつかく広海の暴走を止めたと思ったのに、これじゃあ、その努力も水の泡だ。

何度も口づけを迫る男の家に誘われてどうする。凜香はその案を阻止する理由を必死で考え巡らせていた。

「遅いっただって、まだ九時過ぎだぜ。俺んちのピアノ部屋は防音してるし、上階も隣も空き部屋だから。結構遅い時間までのびのび弾けるんだ。さ、行こう」

広海の手が凜香の腕をつかみ、行こうと誘う。

「で、でも……」

「ふふん。おまえ、警戒してるだろ？ 心配するな。今夜はおまえの希望通り何もしない。まだまだ先は長いしな。その代わり飲むぞ。俺のオンステージが終わったら夜通し飲むから、おまえも付き合え。だから明日の出勤の準備だけは用意していけよ。それならいいだろ？ ほら、早くしろ」

凜香の部屋の勝手知ったる広海は、いそいそと戸締りを始める。

「明日の始業式のスーツはどれだ？」

これまた断りも無く凜香の背後にあるクローゼットを開け、明日着用予定だった麻のパンツスーツを見事に言い当てた広海が、ハンガーごとそれを引っ張り出す。

いつの間にか広海の戦略にまんまと嵌められた凜香は、普段画材を入れている大きな目のトートバックに着替えと仕事道具を詰め込み、そうそうこれを忘れちゃ仕事にならないと、パソコンの横に置き去りにされていたメモリスティックを慌ててバッグに放り込む。

そしてはたと気付くのだ。何やってるんだ？ と。

いくら同僚で、学生時代の仲間だからと言って、ホイホイついて行くのはいかなものだろう。

こんな夜遅くに、男の家に丸腰で乗り込むのだ。やばくないかい？ いや、相当まずいだらう。

けれどその昔、何度もこの部屋に広海が泊まったことがあったのも事実だ。

にもかかわらず危機的状況は全くなかった。周りの人間からは半同棲だと好奇の目で見られたりもしたが、そんなものは事実無根、二人の間には何もなかったと胸を張って言える。

あるのは心に秘めたちよっぴりの愛情と、正々堂々とした友情だけだった。

せつかく広海のピアノが聴けるチャンスなのだ。余計な心配をして好機を逃したくない。

行くと決めた凜香は前に父親からもらっていた冷酒を冷蔵庫から出し、トートバッグを肩に下げて持ってくれている広海に手渡した。

「おっ！ これ、おまえのおやじさんの好物じゃねーか。久しぶりだな」

笑顔になった広海が、ビンに頼ずりをする。

日本酒、ワイン、ウイスキーにビール。焼酎にウオッカ、紹興酒。何でもござれの広海が初めてこの冷酒を飲んだとき、うまいうまいと連発して涙を流さんばかりに喜んでいたのを思い出す。

クライスレリアーナと、せつかくだからショパンのエチュードあたりを二、三曲聴かせてもらって、ピアノの話を肴に飲み明かすのもいい。

あるいは失恋経験者同士、なぐさめ合うなんてのもありだ。

凜香は夏の間になしのびた髪を大きな目のバレッタでひとつに留め、スーツの色に合わせたベージュのパンプスを直接手に持って、広海と共にマンションを後にした。

25・そして、ついに恋の矢は放たれた

凜香は広海と並んで、マンション裏手の有料駐車場に向かった。

凜香の住むマンションは单身者専用で1LDKが基本の居住構造になっている。

ワンルームマンションよりはゆったりしているが、ファミリーマンションのように各部屋ごとに割り振られた駐車場はなく、希望者のみ抽選で使用区分が決められてるといふシステムだ。

車を持たない凜香には、当然、専用の駐車場はない。
おまけに数台分設けられている来客用駐車エリアも、常に誰かが使用中ときている。

学生時代、廃車寸前の中古車を取り回していた広海は、当時からマンション裏手のこの有料駐車場を利用していた。

でも今はあのおんぼろセダンではなく、東高に通勤してきた時にはすでにこのジープ型の四駆に変わっていた。

見かけだけはカッコいいある意味鉄の塊のようなこの車は、実はこの上なく乗りにくい乗り物だったりする。

背のある凜香であっても、よじ登るようにしてシートに座る。

通勤ごときに、どうしてこんな大袈裟な四駆を使う必要があるのか全く持って理解不能であるが、これが男のロマンだと言われれば、何も言い返せない。

凜香の父親も弟も同じことを言って、始終車を愛で^めているのだから、広海だけが特別変人なわけではないようだ。

今夜は室内着にスニーカーだからいいようなものの、スーツを着てパンプスなんぞを履いている日には必ず靴を落としそうになる。乗り込む時には細心の注意が必要だ。

後部座席のドアを開けた広海が、シートにトートバッグを投げるように置いた。

そしてその乱暴な扱いとは正反対に、まるで生まれたての赤ん坊を扱うがごとく、さつき凜香が渡した冷酒のビンをそーっとバッグとシートの背もたれの間に忍び込ませた。

「よし。これで準備は完了だ。さーて、我が家に向かうとするか」

満足げに運転席に座った広海がエンジンをかけると同時にオーディオが鳴り出す。

スピーカーにもこだわっているのか、やたら音がいい。もちろんBGMはクラシックで、モーツアルトのシンフォニーが流れている。

これほどこの車に似合わない選曲があるのかと思うくらい、奇妙な取り合わせだ。

信号を二つ過ぎると、隣町に入る。エアコンが効いてきた頃、7の数字が輝くコンビニが姿を現わした。

トラックも止められるように広めにとってある駐車場のど真ん中で、広海が車を停車させる。

ここで降りるとでも？ 凜香はいぶかしげに広海の顔を見た。

「つまみとビールを買っぞ」

そう言って、にっと白い歯を見せた広海がシートベルトをはずし、おまえも降りろと目配せをする。

そりゃあ、凜香が広海に渡した冷酒だけでは足りないのはわかる。でも家にビールの数本くらいはあるだろうに、それでもまだ足りないと言っのだろうか。

そう言えば……。見かけによらず、物事を理路整然と考えるタイプの広海は、部屋のインテリアだけでなく、冷蔵庫内もすっきりと、というのがモットーだったような……。

余計なものは一切溜め込まない主義なのだ。必要な時に必要な分だけ買い、物がなくなってから補充する。

部屋に物があふれないためにはいい方法かもしれないが、もしもの時を想定して安心を得ることを選択している凜香は、食材のストックは欠かせない派に属する。
なのでビールは必ず常備してある。

それに、コンビニで単発買いする酒類やつまみは高い。

今夜は多分広海の支払いになるだろうから大目にみるとしても、徐々に教育していかなければならないなど、いつしか今後の策を練っていた。が……。

でもどうして？　なんで広海の懐具合にまで首を突っ込まなければいけないのだろう。

ここのもともとも調子がおかしい。世の中の事象を、すべて広海フィルターを通して見ているような気がするのだ。

凜香はこの夏休みに急激に彼女のテリトリーを侵し始めたこの男の顔をまじまじと見つめてしまった。

「凜香。どうした？　行かないのか？　おつ。もしかして、俺に見惚れていたか？　そうか、そうか。うちに帰ってからゆっくり見せてやるから。な？　凜香、行くぞ」

ドアを半分開けた状態で、広海が茶化すように言う。

あの頃より少し肉付きが薄くなった頬に、くつきりとしたラインの二重まぶたの目は昔のままだ。

ともすれば冷ややかな人物だと思われがちだったグレーがかったブラウンの瞳は、今や慈しむような柔らかい眼差しに変貌しつつある。

今度この目に見つめられたら、もう逃げられないと思った。

「ほら、早くしろ」

助手席側にやって来た広海がドアを開け、凜香の手を取った。

やっぱりときどきして、息をするのも苦しい。

どうやら天使の放った矢は、再び凜香の心臓にピタッと命中したようだった。

店員さんのマニュアルどおりのいらっしやいませがしんとした店内に虚しく響く。

さすがに明日は始業式。いつも雑誌コーナーにあふれている青少年がやけに少ない。

問題集の解答丸写し作業も佳境に入っているのだろう。

広海は片手にカゴを持ち、500ml缶のビールを六本と、スルメ、サラミ、パッケージに入った焼きそばを素早く入れる。

一人暮らしのプロが選ぶ品は、無駄がなく、的確だ。だがやっぱり値が張る。

ならば発泡酒か次世代ビールでもいいのに、迷うことなくロングセラーのビール缶を選ぶのだ。

まったくこういうところが何年たっても広海らしい。

「おい、凜香。明日の朝のおにぎりも買っとくか？ それともパンの方がいい？」

そうだった。今夜は広海の部屋で夜を明かすわけだから、必然的に朝ごはんも一緒に食べることになる。

学生時代は菓子パン一個で済ませていた朝食も、最近はもっぱら和食中心のメニューだ。

いくら料理に見放されている凜香であっても、ご飯くらいは炊ける、というか炊飯器が炊いてくれる。ならば……。

「え？ ご飯くらい炊けば？ あとインスタント味噌汁でもあれば充分だけど。それに目玉焼きなら作れるぞ。それくらいなら私にも出来る」

私にまかせておけとでも言うように、凜香は胸を張る。

アルコールが入る前に炊飯器に米をセットして置けばいい。

卵くらいなら広海のすつきりした冷蔵庫にもあるだろう。

とたんに広海が形相を崩す。彼女に手料理を期待しないと言っておきながら、舌の根も乾かぬうちにこれだ。

だから男と言うものは、信用ならない。

「おおっ、それいいね。じゃあ夜明けのコーヒーは俺にまかせておけ！」

よ、夜明けのコーヒーだって？ 凜香は咄嗟に辺りを見回してしまふ。

こんなきわどい会話を誰かに聞かれてみる。激しく誤解されるではないか。

「それよりピスタチオ。これがないと飲んだ気がしない。広海も一緒にさがしてくれよ」

これ以上朝食の話はご法度だ。凜香はこの緑がかったひとりっ子のかわいいナッツの話題を持ち出し、ほっと一息つく。

だいたいどの店でも、ピーナッツの横にぶらさがっているはずだが。……ない。品切れだろうか？

店員にピスタチオのありかを訊ねようと、レジに向かってつかつかと歩き出したその時だった。

「せ、先生……」

どこかで見たことがある制服を身につけた女子高生らしき人物が、隣の陳列棚からぬっと現れて、凜香の前で驚いたように口をパクパクさせて突っ立っている。

「ん……？ えっ？ も、森口？」

凜香は目の前の生徒が東高美術部の生徒であることに気づき、上ずった声を上げてしまう。

なんでこんな時間にうちの生徒がいるんだと半ばパニック状態になり、心臓が超高速でバクバクと鳴り響く。

「おい、凜香。どうしたんだ？」

く、来るな！ ここから逃げろ！ と心の中で叫ぶも、夜明けのコーヒーに浮かれている男にそんな声が届くはずもなく。

背後ににじり寄るお気楽音楽教師の気配に、凜香の心臓は再び凍りついた。

26・壁に耳あり、コンビニに目あり

「あっ……」

「うっ……」

凜香の前に立ちすくむ制服姿の女子生徒が見えたのだろう。

広海は押し殺したような驚きの声を響かせ、女子生徒の森口は微動だにせず小さく呻いた。

「森口。何？ 何があつたんだ？」

すると今度は、制服姿の男子が森口の真後ろにやって来て、彼女に訊ねる。

凜香の後にはビールやつまみ類が入ったかごを下げた広海が。

そして森口の後ろには、やはり東高の男子生徒の姿が……。

四人とも、めいっばい目を見開き、お互いの視線を交差させた。

「つ、鶴本先生。こんばんは」

先に沈黙を破ったのは、ひょろりと背の高い男子生徒だ。森口の後ろでぴよこつと頭を下げた。

「すながわ……。あ、ああ。こんばんは」

今にも消え入りそうな声で広海が生徒の名を呼ぶ。

砂川？ 凜香はどこかで聞いたような名まえだなと首を傾げ、記憶を思い起こしながら、急に仕事顔になった広海の横にゆっくりと

後ずさる。

「おまえたち、なんでこんな時間にここにいるんだ？ 明日は始業式だぞ」

精一杯威厳を保ちながら、広海が生徒に対峙する。

ただし、皺の寄ったＴシャツとハーフパンツが見事にそれを半減させているのが残念なのが。

「あ、あのう……。今、予備校の帰りなんです。あそこの角のところの……」

砂川が窓ガラス越しに指をさす。

そこには大手予備校の看板がライトアップされているのがくつきりと見えた。

現役大学受験コースに通っていて、今が帰りだと言う。

「そうか。勉強がんばっているんだな。それで、君は？」

いつもの気迫をどこかに置き去りにしたような広海が森口に訊ねる。

森口は三年生だが、一年、二年と美術を選択していたので、広海は彼女を知らないのだろう。

「わたしも、そ、その。砂川君と、同じ予備校で。えっと、ルーズリーフが、なくなったので、ここにあるかな、と思って……」

余程緊張しているのだろう。今にも倒れそうになりながら小柄な森口が一生懸命弁明を唱える。

「よし、わかった。さつさと用を済ませて、帰れ。なあ、砂川。おまえたち、家は近いのか？ よければ俺が家まで送るぞ」

「あ、いえ。大丈夫です。ここから近いんで。俺、責任持つて、こいつを送って行きますんで。大丈夫です」

「そうか？ 遠慮はいらんぞ。夏の夜は物騒だからな」

「先生。ありがとうございます。でも、そ、その。邪魔しちゃ、悪いんで」

「はあ？」

「あつ、いや、何でもないです。ただ……」

急に頬を赤らめた砂川が頭をかきながら、何か言いたげに広海の様子を伺う。

「なんだ、砂川。言いたいことがあるならさつさと言えよ」

広海が少しイラつき始めている。

早くこの場を収めたくて口走ってしまったのだろうが、ますます雲行きが怪しくなってくる。

「は、はい。あの、どこかで聞いたことがある声が、突然隣の陳列棚の方から聞こえてきて。夜明けのコーヒーがどうのとか、ピスタチオだとか……。その声の人が女の人と話してる様子だったんで、やっぱり知らない人だったのかなと思って。でも女の人の声も聞いたことがあるよな、なんて思っていたら、急に森口の様子が変になつて……。覗きに来てみれば、やっぱり鶴本先生と鷺野先生だった

というわけで。す、すみません。先生たちの話、全部聞いてしまいました」

「砂川、お、おまえ……。あ、いや。別に聞かれてまずいことは、その、言っていないと思うが……。って、言ってたか？」

顔を引き攣らせながら広海が凜香に訊ねる。

次第に落ち着きを取り戻してきた凜香は、さあと首を振ってみせた。

たまにはあわてふためく広海を見るのもいいものだ。

「どっちにしろ、その、あれだな。別におまえたちのことを邪魔だなんて思っていないからな。いつでも送ってやる。でもな、今夜鷺野先生と一緒にいるのはわけがあつて……。前におまえに頼まれてただろ？ 文化祭の出し物のことだ。鷺野先生にもいろいろと相談しないといけないからな。今から二人で話し合いをすると、何時に終わるかわからないだろ？ だから、朝メシの心配もだなあ、その、必要じゃないかと……。とまあ、そういうことだ」

完全にしどろもどろになっている。しっかりしてくれよと、凜香は広海に励ましの視線を送る。

すると、助けてくれと言わんばかりの情けない目をこちらに向けてくる。

広海の嘘も、これが限界ということなのだろう。

ついさっきまで、デレデレとまわりついていたのは、どこのことだと言いたいのをぐつと堪え、凜香はあえて広海にべったりと寄り添うようにして横に並んで立ち、砂川を真っ直ぐに見据えた。

「砂川君。君が文化祭の実行委員長だったんだな」

「あつ、はい。そうです」

「今、鶴本先生が言ったことも、間違いじゃないが。まあ、見ての通りということ。今夜のことはあんまりみんなに公言しないでくれる？　君ももう高三なんだし、その辺のところ、わかるよね？」

凜香は低く落ち着いた声で、砂川に言い聞かせるように話した。

レジ担当のバイトらしき店員が時折こちらをちらちらと見ているが、声は潜めているつもりだ。迷惑はかけていない……と思う。

それに、幸い、他の客はいない。

「は、はい。もちろん。俺だってこう見えても、もう十八だし、その辺はわきまえてるつもりですから。まさか鶴本先生と鷺野先生が……。いや、けなしているわけじゃないですよ。学校ではそんな風に見えなかったから。どっちかと言えば、犬猿の仲かと思ってました」

「それも当たり。まあ、急展開ってことだな。大人には大人の事情があるから、ここは見逃してくれ」

「あの……。凜香ちゃん」

森口が控えめに凜香を呼んだ。美術部の女子やクラスの生徒から、なぜか凜香はこう呼ばれている。

気持ち悪い気がしないでもないが、生徒がせっかく親しみを込めて呼んでくれるのだ。

凜香は許容範囲内として、これを受け入れている。

「気を付けて下さいね。鶴本先生のファンってすっごく多いんです。

美術部にも熱狂的なファンのグループがあつて、誰もが先生と結婚できると思ってるんです。だから凜香ちゃん、彼女たちにはくれぐれもバレないようにした方が……」

森口が凜香を気遣う。

「わかった。そうするよ。ご親切にどうも」

そんなこと、言われなくてもわかつてると言いそうになるのを我慢して、淡々と答える。

そんな女子軍団より強烈なのがいるのだ。その名も里見栄子。彼女の執拗さに勝るものはない。何を隠そう、栄子にこの状況を知られるのが一番怖いというのに。

「あの……。鶴本先生も、用心した方がいいですよ」

砂川が真顔で話に割り込む。

「鷺野先生のファンもすごいです。生徒会にも熱狂的なファンがいて、先生のクラスの子としょっちゅうコンタクトを取って情報収集してますよ。鷺野先生ファンも女子が圧倒的に多いですからね」

「そうか、わかった。気をつけるよ……って、おまえにそこまで心配してもらう必要はないから。俺は大丈夫だ。それと、文化祭の件は彼女を説得中なんで、もう少し待ってくれ」

高三なのに文化祭の実行委員長も引き受けて、それなりに苦労もあるのだろつ。

やはりこの好青年に報いてやるべきなんだろうか。凜香の心が太

きく揺らぐ。

「砂川君。文化祭の事だけど。鶴本先生から詳しく聞いているよ。そうだな……」

凜香は腕を組み、天井の蛍光灯を仰ぎ見る。そして頷いた。

「よしっ。力になれるよう、がんばってみるよ。君には借りができたことだし……ね？ 実は私、学生のころ、ストリートでキーボード弾きながらボーカルやってたんだ。鶴本先生と組んでね。先生と相談しながらなんとか形にしてみるから、文化祭、楽しみにしてて」

「うわー。すっげえ！ いいんつか？ ほんとうにいいんつか？ やったあー。これで他の委員も安心しますよ。ありがとうございます。あの、これ、実行委員会のサプライズなんで、生徒や他の先生には口外しないようお願いしますね」

砂川が興奮のあまり、大きな声を出しすぎたため、バイトの店員がぎろっところちらを睨む。

「しーっ。砂川君。声が大きい」

砂川がペロツと舌を出し、恥ずかしそうに肩をすくめる。

「もちろん、誰にも言わないぞ。お互い、口外無用ってことで」

「わかってますって。まかしといてください……。それじゃあ、俺たちはこれで失礼します。……末永くお幸せに！」

末永くって……。砂川君、あんた取引うまいよ、将来大物だわと

実行委員長のしたたかさに凜香は目を見張ったが、言われっぱなしで終わる彼女ではない。

「砂川君こそ、森口のこと頼んだぞ。いつだったかな？ 夏休みに君たちが幸せそうにしているところ、音楽室から見たんだね。森口がキャンバスを抱えて歩いていた時……。森口、よかったな。いや、砂川君がよかったのかな？」

目を丸くした砂川と森口が、逃げるようにしてコンビニから出て行く。

ルーズリーフは買わなくて良かったのだろうか。

そんな若い二人の後姿を見て、凜香はクスツと笑った。

いよいよ店員の視線が痛い。この辺で、とつと店を出たほうがよさそうだ。

ピスタチオをあきらめた凜香は、早く支払いを済ませようと広海の持っているカゴを引っ張った。

ところが動かないのだ。広海が。

「ちょっと、広海？」

広海はぼかんと口を開けたまま、凜香をじっと見ている。さっきの森口のように、ぴくりとも動かずに。

そして、やっと広海の口からこぼれ出た言葉は。

「おまえ、ホントにホントなのか？ さっき砂川に言ったこと……。また歌ってくれるって。夢じゃないよな？ 嘘じゃないよな？ 信じていいんだな？」

凜香は放心状態の広海から力任せにカゴを奪い取り、一人さつさとレジに向かった。

その時、やっとバイトの店員の肩の力が抜け、顔がほころんだように見えた。

27・夫唱婦随

「お、おい、待てよ！」

凜香が財布を出す直前にレジカウンターに滑り込んだ広海は、支払いを終えた後、すたすたと足早にコンビニから出て行く凜香を追いかける。

「おまえ、砂川にあんなこと言って、本当に大丈夫なのか？」

腕を掴まれた凜香は、歩みを止め、広海の方に振り向いた。

「あたりまえだ。私が今まで嘘をついたことがあるか？ 広海、どうなんだ！」

凜香は片手を腰に当て、何か文句あるのかと、きれいなラインをした顎を気持ち前方に突き出す。

「ない……」

冷えた缶ビールが透けて見えるコンビニの袋を提げながら力なくうな垂れる広海に、凜香は余裕の笑みを浮かべる。

「だろ？ 言ったことは守る。砂川君のあんなに喜ぶ姿を見てしまったんだ。それで約束を反故に出来るか？ 私、そこまで悪人じゃないから。生徒のためだと思えば、なんでも出来そうなの気がする」

あくまでもこの決断は生徒のためだ。広海のためではないことを

凜香は自分自身にもしつかりと言い聞かせた。

「そうか……。やっとその気になってくれたか。なら、俺がドラムをやるとして、ギターを誰かに頼まないとな。そうだ、教頭はどうだ？ 昔、有名どころのコピーバンドやってたらしいぞ」

「えっ？ あの教頭が？」

「ああ。おまえだけでなく教頭まで担ぎ出したら、とんでもなくビッグなサプライズになるんじゃないか？ どう思う？」

「そりゃあ、いいと思う。けど……。教頭が首を縦に振ると思うか？ いつも忙しそうだし。無理だよ、きっと」

「そうか？ 俺は脈ありだと思うぞ。前に教頭が言ったこと、覚えてるだろ？」

「なんだ、それ」

凜香は広海がいつの話を持ち出しているのか、全く見当がつかなかった。

教頭が前に言ったこと……。凜香はうーんと唸りながら、記憶の糸をたぐり寄せる。

「ほら、一学期の最後の飲み会で。おまえが補習講座を断るなら自分が手伝うって……」

「ああ、思い出した。そんなこと言ってたなあ」

「ピアノが弾けるかどうかは知らないが、楽譜も読めるし、コード

も全部理解している。俺が授業で使った曲にも時々反応してくれて、専門的なことにも踏み込んでくるぞ。ああ見えてあの教頭、結構音楽マニアだ。絶対に話に乗ってくる」

真面目そうな顔しながら、教頭も若い時はそれなりに青春していたのと思うと、勝手に口元が緩み、微笑ましい気持になる。

「じゃあ、広海から教頭に頼んでみて。ということは、私がボーカルとキーボードを担当すればいいのか？」

「いや。おまえはボーカルだけでいい。ブランクも長いし、さすがに両方はキツイだろ？ キーボードは誰か他の先生に頼んでみるよ。俺がキーボードで、誰かにドラムをやってもらって手もあるからな」

広海がいつも簡単に自分の担当楽器をあれこれ唱えるが、これは口から出任せでも何でも無い。

広海は大概の楽器は全部そこそこにこなす。

キーボードはもちろんのこと、ギターとドラムもプロ級だ。

サックスにバイオリン、大学の音楽棟の片隅に眠っていたハープまで艶やかに奏でた日には、凜香は音楽のことで広海と張り合うのは絶対にやめようと心に誓ったほどだった。

「でも、キーボードやってくれる人、今から見つかるのか？ 夏の補習講座に誰も名乗りを上げなかったんだぞ。いないと思うけどな。ましてやドラムなんて、ますます無理だろ」

凜香は職員一人一人の顔を思い浮かべて、出来そうな人をピックアップしてみるものの、どれも望みが薄そうだ。

いったい誰が出来ると言っただろう。だからこそ夏休みの補習講座は凜香が餌食になったのではないかと、苦々しく振り返る。

「いや、いるよ」

広海が自信たっぷりに頷く。

「みんな、自分の仕事が忙しいのと、ブランクが長いので、昔のようにには弾けないと思い込んでいるだけだと思う。俺たちよりずっと上の世代は、フォークやニューミュージックの全盛期に青春してただぜ。十代の頃にギターやドラムに嵌った人口は、きっと俺やおまえの想像以上いるはずだ。俺がなんとかするから、任せておけおまえはとにかく、ボーカル一本でがんばってくれたらいい」

「えらい自信満々だな。でもまあ、確かに広海の言うとおりな気もする。私の父親もギターやるし」

「そうだろ？ まあ、俺を信じて吉報を待っててくれ。で、曲はもちろん、あの当時のオリジナルでいいよな。なんなら新曲もプラスしようか？ 今風のアレンジも加えて、しっとりしたのも一曲くらいは欲しいよな。アカペラなんかいいかも。でも、やっぱ、迫力のある方が……」

「ひーろーみー。全く、あんたって人は……」

凜香はあきれたように、首を左右に振った。生徒に頼まれたとか言いながら、広海本人が一番楽しんでいるように見える。

この生き生きとした表情。誕生日とクリスマスと正月が三つ同時に来たみたいに無邪気に喜ぶ姿は、昔とちっとも変わっていない。こ

ういつのを進歩がないというのだろう。

「なんだよ。俺、なんか変なこと言ったか？」

「ったく、でれでれと嬉しそうな顔しやがって……。あんたが楽しんでどうするんだ」

「別にいいだろ？　だって、考えてみろよ。おまえの歌が聴けるんだぞ。それもあの頃みたいに、俺と一緒にステージに立って、拍手喝采を浴びて……。これのどこが楽しくないって？　楽しいに決まってるだろ？　なあ、凜香」

「はん。勝手に言ってる。それより、早くあんたの家に行こうよ。遅くなったら、ピアノ、弾けなくなるぞ。それに、ビールもぬるくなってしまう」

いくら停車してる車が少ないからと言って、いつまでも駐車場のど真ん中で立ち止まって話しているわけにもいかないのだ。

時は刻々と過ぎていく。凜香はすぐそこに停めてある広海の人に向かって再び歩き始めた。

そして、助手席のドアに手を掛けた時、広海がそつと肩を揺すつた。

「凜香。俺達が一緒に東高で働けるのも、もしかしたら今年度で最後かもしれないな……」

急に何を言い出すのかと思えば……。

意味不明なことを口走る広海など、この際無視することにして、凜香はドアを開けようとするのだが。

広海がそれを許さなかった。

「ちょ、ちょっと。なんで閉めるんだよ。車に乗らないのか？ それに、今年度で最後ってどういう意味だ。高校の統廃合があるても？ そんなの聞いてないぞ」

車を背にして、閉まったドアにもたれかかるようになった凜香に、広海がありえないほど接近して顔を覗きこむ。

誰が見てもとも知れない公共の場で、それはないだろうと凜香はくねくねと身をよじった。

「こら、くにやくにや動くな。ちゃんと聞けよ。なあ、凜香。同じ職場に鶴本先生が二人いたら、どうする？ 困るだろ？」

「はあ？ 鶴本先生が二人？ あんたの親戚でも来るのか？」

「おまえなあ……。俺の言いたいことくらい、さつさと気付け。いか、これから言うことを、よく聞くんぞ。おまえんちは弟がいるだろ？ 俺んちはとりあえず俺が長男。つまり、おまえには鶴本になつてもらうことになる。だから、どちらかが別の高校に移動しないとまずいつてわけだ。でもって、俺の方が東高勤めが長いから、あそこから出る可能性が高い。そういうことだよ」

「鶴本になる？ この私が？ それって……」

「だーかーらー。夫婦になるって言ってるんだよ。俺とおまえがつー！」

28・そして、恋に落ちていく

今なんて言った？

だーからー。夫婦になるって言ってるんだよ。俺とおまえがっ……。

凜香は、広海がたった今口走ったことを、脳内で繰り返してみる。この目の前の男に、夫婦になるぞと宣言されてしまったのだ。それもあるうことが、夜のコンビニの駐車場で一方的に。そしてはつきりとした求婚の言葉がないままに……。

……こいつ、いくらなんでも先走りすぎだろ。誰がいつ、結婚するなどと言った？

凜香はまだこの男に、付き合うという返事すらしていない。

なんておめでたい奴なんだろうと、フンと鼻で笑ったあと、至近距離に迫ってくる広海を両手で押しのけた。

が、その瞬間、押しのけた手をぎゅっと掴まれ、広海が有無を言わせぬ目を凜香に向けるのだ。

すっかりプロポーズでもした気持ちになっているのだろうか。

なあ凜香、俺と結婚してくれるんだろ？ と何もしゃべらない無言の広海が、暗がりの中で、そう目で訴えているように見える。

だからと言って、ここで甘い顔を見せては女がすたる。

凜香はその名の通り、凜とした面持ちで、広海に真っ向から対峙する。

「いいか、広海。あんたが誰と夫婦になるかは知らないけど……。

そんな大切なことを、自分勝手にあれこれ決めるな。私はまだ、あんなと付き合ってもいいって返事すらしてないけど？」

凜香は心を落ち着け、子どもに言い聞かせるように、広海に今の気持ちを伝える。

「おい、返事も何も。もう十分に付き合ってるだろ？ 違うのか？」

「違う……と思う」

きっぱり違うと言い切れないところが辛い、やはりさっきの広海は、勇み足が過ぎやしないかと思う。誰が見ても順序が滅茶苦茶だ。

「あ。おまえ、さんざん俺の気持ちを弄んでおいて、それはないだろ？ なあ、凜香」

「うるさいなあ」

凜香は広海に拘束された手を振りほどこうと揺さぶったが、解けるどころか、ますます強く握り返される。

「広海。まずは文化祭を成功させること。すべてはそれからだろ？ それと、里見さん対策も考えてるのか？ 彼女、どういうわけか広海にぞっこんだよな。あんたがあれほどあからさまに彼女を嫌っているにもかかわらず……だ。これ以上面倒なことに巻き込まれるのは御免だから。きちんと決着つけてくれよ！ それでないと、広海とは……」

そつだ。とにかく里見栄子の件だけは、今すぐにでもなんとかし

て欲しい。

このままではまた修羅場に出くわしそうで、落ち着かないっただけじゃない。

ああいったタイプの女性には、態度だけでなくバシツと言って突っぱねなければわかってもらえない。

彼女が望みを抱いてしまうのも、すべて広海の優柔不断さゆえの結果ではないのか。凜香の不安は一向に治まらない

「決着？ それは無理だ。俺たちのことと彼女は関係ないだろ？」

里見さんが勝手に騒いでいるだけだからな。デートもしたことないや、二人でメシすら食ったこともない。それでもだめなのか？」

「だめだ！ あんたが期待を持たせるような態度を取るからだろ？」

ホント、広海は自覚なさすぎ。なんだかんだ言いながらも女子生徒に一番もててるのは広海なんだぞ。里見さんだけでなく、あんたを慕ってる生徒にも卒業生にも何をされるかわかったもんじゃない。あんたとの恋愛は、ある意味命がけなんだ。大学の時だって、あんたと一緒にいるっただけで、いったい何人の女子学生に嫌味を言われたか……。ということ。いい加減、この手、離してくれないか？」

凜香は広海からすり抜けるように手を引き離し、目にも留まらぬ早業で助手席側のドアを開けてよじ登るようにしてシートに座り、これみよがしにボタンと勢い良くドアを閉めた。

何がそんなにおかしいのか、クツクツと肩を小刻みに震わせながら、ぐるっと車の前方を回って運転席に座った広海が、すかさず身体を助手席側に傾けてきた。

こ、これは、いったい……。

「スキ有り！ どうだ、まいったか」

凜香は頬に手をあて、目を見開いた。

それは頬というより、目尻とこめかみの中間あたりだったと思う。柔らかいものがそこに触れ、びっくりして広海の方を向いてしまったものだから、最後は目蓋にまでかすってしまった。広海の唇が……。

「俺、アホだな。いちいちおまえにお伺いを立てるから、事がややこしくなるんだ。今、それに気がついた。不意打ちつてのもいいもんだろ？ 今夜の凜香は、いつもにも増してかわいすぎ。これくらい許せ」

「な、なんてこと、するんだよ。広海の、ばか……」

本当はもっと大声でののしるべきだったのに。

そして、いつものようにバカバカと連呼してやればよかったのに。

今の凜香に言えるのはそれだけで。耳まで真っ赤になっているに違いない顔を、広海に知られたくなくて、反対側に顔を叛ける。

ほんとうに、油断も隙もあったもんじゃない。

「なあ、凜香」

明らかに機嫌を取ろうとするような広海の猫なで声が、音楽の止まった車内に響く。

「里見さんのことは、きちんとするよ。確かに、俺の態度が曖昧だったのかもしれないしな。里見さん、校長の奥さんの遠縁なんだ。」

まだ教師になって日も浅いし、慣れないことも多い。心配した校長が、年も近いし面倒を看てやってくれないかって俺に頼んできたんだ。俺はまあ、それを常識の範囲内で、実行したってわけなんだが……。彼女、それを誤解したのかもしれないな」

凜香は初めて聞く話に驚きながらも、広海が常識の範囲内で栄子の世話をしていたと言う点に、反論はなかった。

いや、校長に頼まれていたにしては、なかなか冷たい対応だったのではないかと思えるくらい、あっさりとした関係に見えた。そこは及第点をやってもいい。

「近いうちにちゃんと誤解を解くから心配するな。校長にも、おまえの了解を取り次第、俺たちのことを報告するつもりだ。そうすれば、里見さんもそれ以上は無理難題を言ってこないはずだ。これなら、いいだろ？」

「うん。それならいい。でも、私も思い出したんだが……」

「何だ。まだ何かあるのか？」

「うん。私、この前、里見先生に言ってしまったんだ。広海に差し入れする時はコーラで機嫌を取るといいぞ、健闘を祈ってるって……」

先輩風を吹かせて、栄子の後押しをしたのはまぎれもなく自分だったと、凜香は後悔の念に苛まれる。

「おいおい。そりゃあ、まずいな。おまえ、そんな心にもないことを言っちゃったのか？ あははは！」

広海がシートベルトを締めて、エンジンをかける。エアコンが作動し、シートベルトに手を掛けた凜香の左半身にザーッと冷氣が当たる。

気まずい話の内容であるにもかかわらず、広海ときたら、さも愉快そうに鼻歌交じりでハンドルに上半身を預け、凜香を伺い見るのだ。

「笑い事じゃないだろ？　だって、その時はこんなことになるなんて、思ってもみなかったから……」

「じゃあ、俺が彼女に話をする時、おまえも正直に言えばいいだろ？　俺も正直に言うぞ。大学の中から、おまえのことが忘れられなかったってな。だから里見さんの気持には、これから先、一生応えることは出来ないって釘を刺す。おまえは、やつと今頃になって俺の魅力に気がついたんだって彼女に言えばいいんだ。な？　嘘じゃないだろ？」

「ったく、あんたって人は……。そんなんで、簡単に済むのなら、誰も苦労はしないから」

事の重大さに少しも気付いていないこの男にはもう何を言っても無駄だと、凜香はあきらめのため息をつき、うな垂れた。

「おまえ、自分のことわかってるのか？　里見さんのことをあれこれ思い悩んでいるだろ？　それを何て言うか知ってる？」

「……」

まだとやかく言ってくる広海を適当にあしらおうと、凜香は無視を決めこんだのだが。

「あのな、それを嫉妬と言った。おまえが俺のことを思ってくれている証拠。いいねえ。おまえに嫉妬されるなんて、本望だな。ではそろそろ、うちへと参りましようか？」

何が嫉妬だー！ 広海がアクセルを踏むと同時に、凜香の身体の中の怒りの炎がマックスに燃え上がる。

だがそれも長くは続かない。急激に勢いを失くし、燃えさかっていたはずの炎が跡形もなく消え去っていく。

確かに広海の言うとおり、それが嫉妬というもののなのかもしれないと気付く。

彼を取り巻くすべてのものが憎い。里見も、そして、広海を取り巻く女子生徒も、憎らしくて仕方ない。

もうこれは、嫉妬以外の何ものでもないのだろう。

広海が自分以外の女性と話をするのも嫌だ。こんなことで、同じ職場でやっていけるのだろうか。

職場には職員と生徒を合わせると、いったい何人の女性がいるのだろう。五百人？ それとも六百人？ とても管理できる人数じゃない。

来栖とて同じ状況だったはずなのに、全く気にならなかったのは、これまたどういうわけなのか。

凜香は自分の変わりように、ただただ首を傾げるばかりだ。

相当重症な恋の病に陥ったことを自覚しなければならないのは、やはり自分の方なのかもしれない。

凜香はさっきの広海の不意打ちのキスを思い出しながら、再び頬を染め、彼への思いをめぐらせる。

そして、ちらつと広海の横顔を視野に収めると、そのまま目をつぶり、そっと俯いた。

29・心のままに

「入れよ」

広海が閉まろうとする玄関ドアを背中を押さえて、凜香を先に部屋の中に通す。

その部屋は相変わらず美しく整頓され、モデルルームのようにすっきりと片付いていた。

どうしたら常にこのような状態が維持できるのか、凜香はまだまだ不思議でならない。

昔一緒にいた頃も、それはずっと謎だった。

だからと言って、いつもせかせかと動き回って、雑巾片手に掃除をしているというわけでもない。

凜香の雑然とした室内でも平気で横になるし、それを執拗に咎めることもなかった。

ただひとつ言えることは、広海の集中力が他に類を見ないほどすごいということだ。

普段はズボラに見えるのだが、一旦目標が定まると、短時間で完璧に物事をやり遂げることができる。

常に完璧な部屋の掃除や整理整頓も、その超越した能力の賜物なのかもしれない。

凜香は先日ベッド代わりにして身体を横たえていた白いソファにドサツと腰を沈めた。

「じゃあ、夜が更ける前に、おまえのリクエストどおり、ピアノを弾こうか？」

ソファの後に回り込んだ広海が、凜香の肩をポンと叩く。

「うん。まずは聴かせてもらわないとな」

凜香は振り返り、広海に答えた。

「おまえがここに泊まっていた晩、ずっと弾いてくれて言うてたからな。おまえに頼まれると、弱いんだ」

「そうか。それはいいことを聞いた。これからよろしくな」

凜香はにっと笑ってみせる。

「おい、俺の愛情を悪用するなよ」

「もちろん、悪用はしない。どんどん活用させてもらう」

「こら、凜香。それが悪用って言うんだ」

「広海。そんなこと、どっちだっていいだろ？ いつだって感謝してるから。でも、この前のことはよく覚えていないんだ。そうか、そう言えば、あの日もここに泊まったんだよな？ 迷惑かけたな…」

「…」

「迷惑？ でもまあ、あの時期にくらべりゃあ、最近は顔色もよくなったし、病院に行くほどでもなくてよかった。いろいろと無理強いて悪かったな。あの仕事はおまえにしか頼めなくて、というか、おまえとやりたかったんだ。里見さんがピアノを弾けるのは知っていたが、あの人はそういった器の持ち主じゃないだろ？ おまえな

ら任せられると思ったから……。おまえの看病くらい、どつてことはないよ。さーて、前置きはこれくらいにして。ではお聞かせしましょう。あれから毎日三時間くらい練習してる。こんなに弾き込むのも、学生の時以来だな。多分、技術的にはこれまでの最高の演奏ができると思う。ただ、気持の面で、どれだけシューマンに近づけるか……。凜香、おいで」

広海にソファの背もたれ越しに手を掴まれ、ピアノの部屋に連れ込まれる。

「よーし。じゃあいくか。おまえはそのラグの上にも座ってる。また前みたいに倒れられたら、たまらんからな」

広海はそう言って、防音室の戸を閉め切り、エアコンの電源を入れる。

そして、例のごとく腕時計を外し、凜香は黙ってそれを受け取った。

二重壁構造になった狭い密室に、凜香は俄かピアニスト男と二人きりになる。

本当に大丈夫なんだろうか。

でも、もう、ここまで来てしまったのだ。嫌ならば途中で引き返すことも出来たはず。

それをしなかった凜香は、広海にすべてを委ねているも同然だとすでに気付いていた。

お互いに想い合っているいい歳した男女の行く末など、火を見るより明らかだ。

とにかく今は、彼の導き出す音に集中しよう。凜香は、壁にもた

れるようにしてラグの上に座り、ハーフサイズのデニムを履いた足を投げ出した。

ラグの上には、ト音記号とヘ音記号がステッチしてある大きなクッションが無造作に置かれているのが目に入る。

これはいい……。

凜香の胸中にもやもやがよぎる。

以前の彼女にでも作ってもらったのだろうか。いかにも手作りと言うそのクッションを掴み、ラグに投げつける。

クソッ！ 女々しいのはどっちだ。来栖にもらったネックレスをさんざんこき下ろしておいて、自分は昔の戦利品を大事に残してるってわけか？ ううう、腹が立つ。

今凜香の心はどす黒い嫉妬心で乱れていた。

仕返しに生地を引き裂いて中の綿を出し、このクッションをめちやくちゃにしてやろうか、などと辛らつなシナリオすら組み立てる始末だ。

凜香の殺気にも似た空気が伝わったのだろうか。ピアノの椅子に腰掛けた広海が突如振り向く。

「おまえ、何やってるんだ？ そうだ。そのクッション使えよ。それを壁と背中の中に挟んでもたれると楽だぞ。去年の吹奏楽部の卒業生が、記念に手作りしてプレゼントしてくれたんだ。男子七名込みの二十人の合作だぞ。曲がったステッチも一生懸命さが伝わってきて味があるだろ？」

「そ、そうなのか？」

「ああ……。で、どうした？ 何かあるのか？」

広海が怪訝そうに、斜め上から凜香を伺い見る。

「あつ、いや、何でもない。あつはっはっ……！ そうか、卒業記念か。じゃあ、このクッション、遠慮なく借りるぞ」

「なあ、凜香。おまえ、本当に大丈夫か？」

広海の腕が伸び、凜香の額を押さえる。熱があるとでも思っているのだろ。心配そうに何度も額に手をかざす。

「だから、大丈夫だってば。私のことはいいから、早く弾いてくれよ」

凜香は慌てて、クッションの一つを抱き寄せる。もう一つは広海の言ったとおり背もたれにして。

生徒たちが恩師のためにと心をこめて作ったこのクッションを、あるうことか、めちゃくちゃにしてやるなどと思ってしまったのだ。このことは、絶対に広海に知られてはいけない。

凜香は広海を少しでも疑った自分が恥ずかしく、どうしようもないほど後ろめたい気持ちになった。

肩を左右交互に上下した後、首をぐるぐる回す。

簡単なストレッチを終えた広海の手が鍵盤の上に静かに据えられる。

彼の演奏は昔からダイナミックだった。フォルテはより強く、ピアノはより繊細に。

メリハリの効いた彼の演奏が、今また、凜香の目の前で始まる。

としていた。

Tシャツとハーフパンツ姿の、一見どこにでもいそうな大柄な兄ちゃんが、突然真顔でピアノに向う。

クライスレリアーナ第1番、二短調アジターティッシモ。

広海の指が鍵盤の上を低音部から高音部に向けて一気に駆け上がる。

そして縦横無尽にシューマンの世界を紡ぎ出していくのだ。

広海が奏でるメロディーは、大胆でかつどこか哀しい。

終楽章第8番、ト短調ヴィヴァーチェ・エ・スケルツァンドの付点のリズムが、いつまでも余韻を残しながら、全て弾き終わったことを凜香に告げる。

どうしたのだろう。広海の指が空中からそつと膝の上に下ろされ、もうそれ以上の演奏はないというのに、これで終わってしまうのが悲しくて。

涙が次から次へと溢れて止まらないのだ。頬を伝った涙が、膝の上に抱えたクッションの上に、ポタリ、ポタリと落ちていく。

クライスレリアーナ。この曲って、こんなに悲しい曲だったのだろうか。

いや、決してここまで泣くような曲ではなかったはずだ。

CDで好きなピアノリストが弾いているのを何度も聴いた。

ところどころでポツと浮かび上がる珠玉のメロディーラインに魅せられることはあっても、涙を流したことなどこれまでに一度もない。

決して認めたくないが、広海の奏でる音色に感動してしまった

に違いない。

いつも憎たらしいことばかり言って、気に食わない奴だけど。そして、そんな彼の言葉に一喜一憂して、心がときめいて、誰よりも気になる人……ではあるけれど。

ピアノを弾いている彼の姿は切ないほどに崇高で、その音色と相まって、一瞬たりとも目を離すことが出来なかった。

泣いてる顔なんか見られたくない。クッションを抱えてうつむいたまま、ト音記号のステッチ部分を出来るだけ避けるようにして、こっそり涙をぬぐう。

このままだと、涙の後が染みになるかもしれない。許せ、卒業生諸君。

凜香はクッションに顔を埋めたまま、二十人の生徒に向けて、密かに詫びの言葉を口にした。

「凜香……。おい、凜香？」

ペダルから右足を離した広海が振り返り、凜香に声をかける。

「泣いてるのか？　なあ、凜香。顔を上げろよ」

凜香は頭頂部を広海に向けたまま、顔をクッションにこすり付けるようにして、首を横に振った。

「おまえ、いったいどうしたんだよ。やっぱり、泣いてるんだろ？　俺のピアノ、そんなによかったのか？」

凜香は一瞬ためらったが、そのままの体勢で、こくこくと頷いた。広海から見れば、頭のとっぺんだけが小さく上下して見えている

はずだ。

「そうか。よかったか。でも、残念だったな。もうちょっと前だったら、もっと感情をこめて生々しい演奏ができたのにな。凜香への叶わぬ想いを、この曲に重ねて、苦しい心の内を鍵盤にぶつける……。そしたらおまえ、こんなもんですまないぞ。もっともっと激しく号泣すること間違いなしだな。……って、もしかして、おまえをピアノで泣かせたの、初めてじゃないか？ マジすげえ。それではもう一曲。おまえが前に弾いてくれた作品9の1のお返しに、シヨパンのノクターン作品15の2を、おまえだけに捧げる」

凜香はますます顔を上げることが不可能になった。

このノクターンは広海の十八番でもあり、学生時代に何度もねだって弾いてもらった曲なのだ。

装飾音符とは思えないほどの繊細なメロディーに何度心が震えたことか。

中間部分に左と右のリズムが数学的に合致しない難解なところがあるのだが、広海の手にかかる、何事もなかったかのようにいつも簡単になめらかに音が流れていく。

もうそれは人間のなし得る業をとくに越えているとしか思えないほどの表現力だった。

凜香の全身に心地よいメロディーが滲みこんで行く。

このまま命の終焉を迎えてもいいと思えるくらい、至福の時だった。

最後の六連符がだんだん小さくなり、ゆつくりと消えていく。

広海と過ごした過去が走馬灯のように蘇り、そして音と共に、今またゆつくりと消えていった。

「凜香。またいつでも弾いてやるぞ。今夜はこれくらいにしておこうか。そうだな、次はリストのメフィストワルツなんかどうだろ。これもきつと気に入ると思うぞ。今すぐ弾けないこともないが、ノクターンに比べりゃ、ちと長い曲だしな。今夜はもう時間がないから、また今度ということだ。さあ、そろそろ飲みましょうか？ お嬢さん」

グラスを持つような手をして、おどけながらクイッと酒を飲むマネをする。

上機嫌でピアノの部屋を出ようとする広海を追うように、凜香もその場に立ち上がった。

そして。

「広海、待って……」

凜香は呼び止めると同時に、先を歩く広海の背中にしがみついていた。

渾身の演奏の結果、広海のＴシャツは汗で濡れているけれど、そのすぐ向こうにある彼の背中……温かい。

広海から離れないように、Ｔシャツの袖の辺りをぎゅっと掴む。

「凜香……」

ピタッと立ち止まった広海のくぐもった声が、彼の背中に密着した凜香の耳に低く響いた。

ど、どうしよう。こんなことするつもりなどなかったのに……。凜香は咄嗟に取った自分の行動になす術もなく、そのままどうす

ることも出来なかった。

凜香の一番好きな曲を届けてくれた広海から離れたくなくて。もちろん、泣き顔も見られたくなくて。

このまま広海のぬくもりを確かめていたかったただけなのだけど。

黙ってないで、なんとか言えよ。暑苦しいぞとか、さっさと離れろ、とか。

なんならこのまま、一本背負いで決めてくれてもいいくらいだ。

凜香に亀の甲羅のように貼り付かれた広海が、そのままの姿勢でつぶやく。

「凜香。それはOKサインとみなしますが……。いいのか？ 後悔するなよ」

広海の袖を掴んでいた手を引かれ、するりと前に抱き寄せられる。そして見上げた先には、目を細めてじつと凜香を見ている広海がいた。

顎の先に指をかけられ首筋がすっと伸びる。

次の瞬間、広海の唇がそっと合わさり、何度も何度も啄ばまれる。

そう。これが広海の口付けだ。こうやって軽く唇を吸われ、徐々にしつとりと馴染んでいくのだ。

それと同時に、身体の力も抜けていく。凜香は必死で広海にしがみついた。

首に手を回し、より一層身体を密着させる。

ずっと凜香の背中を撫でていた広海の手が腰に降りてくるのを合

図に、そのままラグの上に二人して倒れこんだ。

その時、ピアノの脚に自分の足をぶつけた広海が、痛ってえーと言つて、凜香の上で苦笑いを浮かべる。

その表情が何とも言えずかわいく思えて、胸の奥がきゅっと痛んだ。

じつと見つめる彼が愛おしく、その頬を慈しむようにそっと指でなぞる。

どうしたのだろう。もう止まっただはずの涙が、また溢れ出る。ひと筋、ふた筋と、目じりを伝つて、ラグの上に流れ落ちた。

好きだ。広海が好き。凜香はこんなにも広海を愛していたのだと気付き、湧き上がる想いに打ち震える。

「広海……」

「うん？　なんだ」

頬に、額に、小さく口付けながら、広海が訊ねる

「好き……。広海が……。好きだ」

凜香から顔を離れた広海が、目を丸く見開く。

「り、凜香……。俺も好きだよ。ずっと好きだった。愛してる……。だから、泣くなよ。な？　もう泣くな」

広海の唇が流れ落ちる涙を拭うように、優しく凜香の頬に触れていく。

そして広海の吐息が耳たぶから首すじに到達した時、凜香は纏っていた理性をすっかり手放した。

30 過去を乗り越え、そして今

防音室に掛かっているアナログ時計が、深夜の零時過ぎを指し、それはかれこれ二時間近くもこの狭い部屋にいることを証明する…。最初はピアノを聴いていただけだったのに。

汗ばんだ広海の胸に顔を埋めるように抱かれながら、凜香は彼の肩にそっと口付けた。

するとすぐそれに応えるように、凜香の額に彼の柔らかい唇がすすめる。

そして彼女の上に覆いかぶさるように身体を動かした広海が、凜香を覗き見る。

「ああ……。このままずっとおまえとこうしていたい」

広海がそう言って目を細める。

「私だって……」

広海の唇が軽く重なり、すぐに離れていく。

「シャワーに行くけど……。おまえは？」

ようやく身体を起こした広海が凜香の頬を撫でながら掠れた声で言った。

「えっ？ あ、ああ……。広海が先に行って。私はあとにする」

「俺は別におまえと一緒にでもいいんだぜ」

薄明かりの中、再び広海の視線が凜香の全身を舐め回すように追いかける。

凜香は反射的に身をよじり、手で身体を覆い隠した。

広海と一緒にシャワーだって？　いくらなんでもそれは無理だ。無理に決まってる。

もちろん来栖と付き合っている時も、そんな大胆なふるまいを敢行した記憶はない。

こういうことは暗闇でこっそりと……というのが凜香のモットーだ。

「な、なにを言ってるんだよ。……だから、そんなに見るなってば！　もういいから、さっさと行けよ！」

「今さら、何恥ずかしがってるんだ。もう手遅れだよ。はははは……。わかったわかった。じゃあお先に」

広海は、凜香の慌てる様子を楽しんでいるかのような余裕のある態度で豪快に笑い、引き締まった体躯を惜しげもなく晒しながら、部屋を出て行った。

凜香は大急ぎで辺りに撒き散らした衣服をかき集め、身繕いを整えて隣のリビングルームのソファに腰を下ろした。

まさか今夜、広海とこんなことになるうとは……。

アルコールを口にしないうちにまき起こった数々の行為は、どれも広海の真っ直ぐな想いが込められているようで、ゆっくりと凜香の心のわだかまりを解きほぐしていった。

嘘偽りのない広海の気持ちをしっかりと受け止め、彼女自身も想いのすべてを彼に注ぎきった有意義なひと時だったと思う。

広海とこうなるのは時間の問題だというのはすでにわかっていた。声を大にして言うようなことでもないが、もちろん凜香は男性と身体を重ねるのは今回が初めてではない。それは広海も同じだろう。

でも……。来栖にも、そして遠い日の記憶の中に薄っすらと残る初めてだった人にも感じたことの無かった苦しいほどの胸の高鳴りと広海への愛しい気持ち、ずっと彼女を取り巻いていたのだ。

広海がささやく言葉の数々も、口付けも、その先にあるものも。すべてが凜香の心を震わせ、魂までも揺すぶられたように感じたのは決して言い過ぎではない。

幸せだった。この人とこれからもずっと一緒にいたい、もう離れたくないと思った。

バスルームの折り戸がガタツと鳴るのと同時に、キッチンの食器棚のガラス戸がガシャツと音を立てて共鳴する。

広海がシャワーを終えて出てきたのだ。

タオルを腰に巻いただけの広海が凜香の前に現れ、交代だと言って嬉しそうにタッチをする。

凜香は目のやり場に困りながらも意識をしっかりと持って、着替えの入ったトートバッグをむんずと掴み、バスルームに逃げ込んだ。

広海がシャワーをしながら準備をしてくれたのだろう。

団地サイズの小さな四角い湯船には、湯がたつぷりと入っていた。凜香はゆつくりと身を沈めると淵に手を掛け、そこに顔を載せて、広海と初めて口づけを交わした大学二年のクリスマスの日を思い出していた。

前年の秋にストリートミュージシャンの仲間入りをして、広海の誘いでユニットを組むようになって一年経った頃、彼の音楽仲間にはライブハウスでの演奏の助っ人を頼まれたのだ。

インディーズで活躍中の音楽グループが、キーボード担当メンバーの突然の脱退で困っていると言う。つまりその日一日だけ、凜香にキーボードを変わりにやって欲しいということだった。

が、しかし。凜香はストリートの活動はそれなりに楽しんでやっていたのだが、それ以上のことはあまり乗り気ではなかった。もともと人見知りの激しい方であるし、人と接するのが苦手なこともあり、そろそろ広海とのユニットも辞め時なのではないかとまで思い始めていた時期でもあった。

それを知った広海がしきりに凜香を引きとめ、なんとか一年持ちこたえたという部分もあり、この演奏依頼もできることなら断りたかったというのが凜香の本音だったのだ。

でも、どうしても助けてやってくれという広海の願いを結局断りきれず、彼の言うことをそのまま信じてライブを引き受け、リハールにもしぶしぶながら参加した。

ところが……。ライブ当日にとんでもない事実が判明するのだ。

凜香のために用意されていた派手な衣装と、プログラムの変更。
そして……。

そのグルーブを脱退したキーボードのメンバーなんて、元々存在しないと突然知らされる。

そもそもそのライブは凜香と広海のために企画されたもので、広海の音楽仲間と、ある有名なレーベルのレコード会社が仕立てた、インディーズとしてのデビューライブだったというわけだ。

その先には、メジャーデビューへの道も開けていたらしい。

あまりの仕打ちに驚いた凜香は、広海に説明を求めたが、広海も知らなかったとシラを切る。

そんなはずはないと思いつつも、満員の観客が今か今かと凜香と広海の出番を待っている状況で、ヘソを曲げてステージを放棄するわけにもいかず……。

とりあえずこの場をこなそうと、すでに用意されていた超ミニのレザースカートに膝上までのロングブーツ、ヘソ出しで、ラメ入りのド派手なタンクトップという、目を覆うような奇抜な格好で観客の前に立ち、ステージが始まった。

もちろん恥ずかしさのあまり何度も卒倒しそうになったのは言うまでもないが、どういうわけか、曲が進むごとに照れの皮が一枚ずつ剥がれていき、広海のギターとサイドボーカル、そして他の仲間たちのドラムやベースに乗せられて、いつになく楽しいステージになってしまったのだ。

ライブ会場の最前列には、いつもストリートで陣取って応援してくれている馴染みの女子高生の顔もあり、彼女たちから力をもらっ

たおかげで、一層盛り上がったステージになったのかもしれない。

無事出番が終わり、楽屋で仲間から労いの言葉をかけてもらう。いつの間にか、開演前の怒りもどこかに消え去り、興奮冷めやらぬまま廊下の隅で広海に抱きしめられ、そのまま告白されるのだ。

そして、天にも昇る気持ちで交わした口づけの後、通りかかった仲間がニヤニヤしながら広海に言ったひと言が、凜香に真実を突きつける。

「鶴本。やっぱ、おまえの言ったとおりだったよ。レコード会社の人も手応え感じてたみたいだぞ。凜香ちゃん、すげえな。もうデビュー間違いないだよ。俺らはバックバンドで支えるから、おまえはもっと曲を書いてこれからがんばってくれ。それにしても鶴本って、プロデュースの才能もあるんだな。衣装もプログラムもバッチリだったぜ」

そう言つて、広海の肩をパンと叩いて、消えていった仲間の男。

凜香は広海を睨んだ。多分、怒りに燃えさかる目で。

広海はしまったと言つような顔をして、申し訳なさそうに眉を顰め、凜香を窺い見る。

「ごめん、こうでもしないと、おまえはここに来ないだろ、などと言つて。」

広海はすべて知っていたのだ。それも、凜香に内緒で全てのことを運び、おまけに彼女の心まで奪い取ろうとした。

凜香の手のひらが広海の頬を捉え、周囲一帯にパシッと乾いた音を響かせる。

衣装を着たままコートを羽織り、荷物を抱えて即座にそこを飛び出した凜香は、その日から広海とのコンタクトを一切拒絶したのだ。った。

あの日以来、彼から顔を背け続けたにもかかわらず、神様は再び凜香を広海に引き合わせた。

あの時のほらわたの煮えくり返るような激しい怒りも、今では嘘のように鳴りを潜めてしまった。

凜香自身が教師になってみて、当時の広海の気持ちが理解できるようになったのかもしれない。

凜香も常々、生徒の才能の芽をどうにかして伸ばしてやりたいと思っている。

有り余るほどの感性をきらめかせている生徒に、その才能を伸ばすため、あの手この手の助言を惜しまない。

あの時の広海が凜香にしたのと同じことを、彼女自身もやっているのだ。

凜香のミュージシャンとしての将来を、彼なりに後押ししてくれていただけなのに。

それを裏切り行為だと思い込んだ凜香は、ずっと彼のことを恨み、自分も彼を愛しているのにその気持にわざと蓋をして、つい最近まで彼を拒否し続けて……きた。

「おい、大丈夫か？」

バスルームの折り戸がガバッと開き、広海が中を覗きこむ。

凜香は突然の広海の出現に、声も出ない。

上半身を隠すことも忘れて、手に載せていた顔をはっと上げ、過去に戻っていた意識を現在に引き戻す。

「おお、生きてるな。よかったよかった。眠りこけて、溺れちまつたんじゃないかと思ったぞ。早く上がって来いよ。ビールがよく冷えて、うまそうだぞ」

広海に手を引っ張られて無理やり湯船から出された凜香は、彼の手で広げられたバスタオルにふわりと包まれ、その上から再び力いっぱい抱きしめられた。

31・派手好きな彼氏

凜香は、あれから明け方まで広海と飲み続けた。

砂川の期待に応えるため、あれこれ策を練ったのだが、不思議な物で、ついさっきまでのとろけそうなほどの恋人モードが、瞬時に昔の音楽仲間モードに切り替わり、時に激しく議論を交わしたりもした。

かと思えば、ギターを取り出してきた広海がゆつくりとアルペジオを奏で始めると、いつしか一緒になつかしい曲を口ずさみ、長年のブランクなど微塵も感じさせないくらい息の合ったハーモニーが、室内に響く。

いくら住人が少ない官舎とはいえ、真夜中だ。近隣から苦情が舞い込む可能性もある。

歌い終わったあと、凜香は広海と顔を見合わせて、いたずらをした後の子どものように首をすくめてクスツと笑った。

そしてその先は、以前の二人には決してなかったこと……。そう。見つめ合い、顔を寄せて、そつと唇を重ねるのだ。

初めビール味だった口づけは、凜香の父親お気に入りの冷酒味に変わり、広海のとっておきの白ワイン味で締めくくられる。

一晩の間に交わした口づけの数は……。もう途中から数えるのを放棄してしまうくらい、何度も何度も唇を合わせた。

六時半に携帯のアラームで目が覚めた時、凜香はソファの上に行儀よく横たわっていたが、広海は凜香の真下、リビングの床で、ビールの空き缶を枕にソファとテーブルの細いすき間にはまり込むよ

うにして眠っていた。

確か、二人で抱き合うようにしてソファに身体を横たえたはずだったのだが……。

凜香も知らないうちに、広海が自然落下したということだろう。いくら北欧製で大きめのソファと言っても、大人が二人で寝るのには到底無理があると、今ごろになって気付くのだ。

凜香は、床に転がって気持よさそうに眠っている広海をそのままに、今日の始業式のために持参した麻のパンツスーツに着替え、朝食の準備に取り掛かった。

ピカピカに磨きこまれたシンクの下からフライパンを取り出し、これまた新品同様のコンロの上にそれを載せて、目玉焼きを作る。初めて使う他人のキッチンなのに、凜香のイメージどおりの場所に使用したい物が収納してあり、とてもスムーズに事が運ぶ。

半熟卵が好きな広海のために、黄身が固まらないうちに皿に移し、冷蔵庫の野菜室に入っていたトマトを切って添え、リビングのテーブルに運んだ。

「広海、ひーろーみー。起きろ。朝ごはん、出来たぞ」

凜香はしゃがみこみ、まだ寝ている広海を揺り動かす。

目を開けた後もしばらく微動だにしなかった広海が、ようやくいつもと違う朝の状況を認識したのか、慌てて身を起こし、極上の笑顔振りまいて凜香を抱きしめた。

目玉焼きと湯を注いだだけのインスタント味噌汁の朝ごはんを、

恋人になったばかりの男性と向かい合って食べる。

凜香にとつてそれは、生まれて初めての経験だった。

今まで付き合った相手とは、一緒に朝を迎えたことなど一度もなかったのだ。

広海の淹れてくれたコーヒーも最高においしい。

いい香りが部屋中を包み、満たされた気持になる。

毎朝広海のコーヒーが飲めたなら、どんなに幸せだろうとまで思ってしまう。

目の前の愛しい人は、いつにも増して目じりを垂らし、じっとこちを見つめた後、微笑みかけたりする。ちよつと薄気味悪い。

「広海。へらへらしてないで、早くコーヒーを飲めよ。さ、仕事に行くぞ。忘れ物はないか？」

凜香は食器を片付けながら、部屋をぐるりと見回す。

「ある。大事なものの……」

そう言つて、コーヒーカップを手にした広海がぬつと立ち上がり、シンクの前に立つ凜香の唇を、これまた器用に瞬時に奪う。

どんな忘れ物だ。朝からキスとか。もう本当に信じられない……。凜香は広海のありえない行動に耳まで真っ赤にして、ぷいと顔を背けた。

夕べはアルコールも入っていたし、自然とそういうことも出来た。でも今は太陽の光が燦々と窓越しに降り注ぐ朝だ。恥ずかしくて、どんな顔をすればいいのかわからない。

万が一、学校内でそんなことをやってみる。即、別れてやる。凜香は鼻息も荒く、広海をギロリとひと睨みし、身支度を整えた。

ほんの数時間前まであれだけ飲んでいたにもかかわらず、二日酔いにはほど遠い凜香は、まだまだ飲み足りない気分だった。

それは広海も同じで、凜香に対してデレデレする以外は、至つてまともだ。

けれど、さすがに車で通勤するには無理があるので、最寄駅から電車を使うことに決めた。

となると、別々の車両に乗る必要がある。生徒達も乗ってくるので、そのあたりは細心の注意を払わなければならない。

広海との新たな人生の幕開けでもある新学期が、とうとう今日からスタートしたのだ。

美術教室は中館二階の東の端にある。準備室にも机があり、三代の男性教師と一緒に、第二の職員室としてこの部屋を使っているのだが。

本日は始業式だったため、平常の授業がない。

ホームルームを終え、クラス業務から解放された凜香は、提出されたばかりの山のような宿題を抱え、美術準備室にやって来た。

三時からは定例の職員会議が始まる。それまでに提出物のチェックを済ませようと、かさ高い荷物を胸の辺りで抱え込みながら、準備室のドアを開けようと手探りで鍵を差し込む最中だった。

荷物を下ろせば、もつと簡単に開けられるのはわかっているのだが。

半ば、鍵開けゲーム的な感覚で、凜香はいつもその状況を楽しんでもいた。なのに……。

「おい、何やってるんだよ。鍵、貸してみ？」

そう言つて凜香の手から有無を言わせず鍵を奪い取ると、片手でも簡単にガチャッと準備室のドアを開錠し、さあ、中へどうぞと凜香を部屋に押し込むスーツ姿の男……。

まるで高級ホテルの接客係のように、しなやかで卒のない身のこなし……つて、そんなことではなくて。

なんでこいつは、ささやかな人の楽しみを、そんなに簡単に奪うんだ！

「あと少しで開きそうだったのに！ この、KY野郎！」

凜香の怒りは収まらない。

「おい、何怒ってんだよ。おまえが困ってるだろうと思って、人がせつかく親切に開けてやったのにさ。広海さん、どうもありがとうつて、どうして素直に言えないんだ？」

「はあ？ 何で礼を言わなきゃいけないんだよ。私はね、いつもこうやって抱えきれないくらいの大荷物持つて、鍵開けてんの。一発で鍵穴にささったときの嬉しさといったら、ホールインワンどころの騒ぎじゃないんだぞ。あと少しだったのに……。ったくタイミンクの悪い奴め。で、なんで南館三階の主がここにいるんだ？」

机の上にドサツと荷物を置いた凜香が腕を組み、広海を問いただす。

「おまえに会いに来たに決まってるじゃないか。昼休みくらい、一緒に居てもいいだろ？　なあ……」

なあ、凜香……と猫なで声で擦り寄ってくる。凜香は呆れ果てて、横に立つ広海を軽蔑の眼差しで睨みつけた。

こいつは今、何か体内の部品が外れかかっているのだ。理性を保つネジをどこかに落としてしまったに違いないと思うことで、気持ちを落착ける。

だが、このまま野放しにしておくわけにはいかない。

はつきりと言っておく必要があるそうだ。凜香は心を鬼にして、

広海に向かって言った。

「一緒にいていいわけがないだろ？　いいか、広海。ここは学校だぞ。始業式で、授業が早く終わったといっても部活はある。ここにだって、誰が来るかわからないんだぞ？」

「別に変なことするなんて言っていないし。今朝駅で買ったパンを食べながら、例の件の相談でも……と思っただけ」

広海はパンが入った白いレジ袋を持ち上げ、にっと笑う。

例の件で……。ま、まさか、結婚のことだろうか？　凜香は急に焦りを覚える。

夕べは一応、関係の進歩はあったわけだし、気の早い広海は、結婚後のお互いの仕事の話にも触れていた。

けれど、まだきちんとしたプロポーズの言葉を聞いたわけではな

い。

そこところは、きっちりけじめをつけてもらわないと困る。

広海ときたら、まるで我が物顔で向かいの男性教師の席に腰を下ろし、ペットボトルのキャップをくるくると取りはずして、コーラをゴクゴクと飲んだ。とてもおいしそうに。

そして三角パックに入ったサンドイッチを、食パン四枚分の厚みのままかぶりついて満足げな笑みを浮かべ、愉快そうに話し始めるのだ。もちろん、例の件について。

「このカツサンドは結構いけるな。ソースがいい味出しててうまい。……で、教頭に頼んだら、二つ返事で引き受けてくれたぞ」

って、もうそんなことまで頼んだのか？ それはきっと仲人のことだろう。

広海の手回しの良さに、呆れて物も言えない。最近は何人なしの式が主流と聞くのだが、広海の考え方が案外古風なのかもしれない。

それとも広海の実家が旧家で、結婚にあたっているいろいろややこしいしきたりが待ち受けているとでも？

だが凜香は今までに一度だってそんな話を聞いたことがない。

学生時代に何度か招かれた広海の実家は、ごく普通の一般家庭だった。

ただし、父親は広海が高校生の時に亡くなったと言っていたので、母子家庭なのだが。

「衣装はどうする？ 俺はどうにでもなるけど、おまえはこだわりのあるだろ？ レンタルという手もあるけど、手持ちのをリサイクル

ルというのも……」

レ、レ、レ、レンタル？ それって、もしかして、ウェディングドレスのか？ ま、まあ、どっちでもいいけど……。

凜香はあまりにも進みすぎる結婚話に、段々ついて行けなくなってきた。

手持ちのをリサイクルというのも引つかる。

広海の母親がその昔に結婚式で着た思い出の一着があるとでも言うのだろうか。

だとすれば、これは相当手ごわいことになりそうだ。

「おまえ、なんか顔が赤いぞ。どうしたんだ？ そっか……。タベのこと、思い出したんだな。なんなら、今夜も。俺はいつでもオツケーだが……」

「ば、馬鹿！ だから、学校でそんなこと言うなって、さっきから言ってるだろ！」

ここに広海以外誰もいないとわかっていても、室内をきよろきよろと見回してしまう。

こんなところを誰かに見られたらどうするんだと、気になって仕方ないのだ。

それにいつでもオツケーとか、大声で言うことじゃないだろ？

凜香は昨夜の一部始終を思い出し、再び赤面する。

「えっ？ おいおい、凜香。なにか勘違いしてませんか？ 俺はただ。今夜もおまえのために、ピアノを弾いてあげましょうかと言ってるだけなんですけどねえ……。いや、もちろん、おまえのリクエ

ストとあらば。ピアノ以外でもお応えする所存ではありますが」

こ、こいつ。おちよくりやがって。凜香の怒りとも恥ずかしさとも取れる行き場のない感情が溢れそうになる。

夕べ広海のかもし出すフェロモンにすっかり吞まれてしまった結果がこれだ。

こんな奴に心を許してしまった自分が情けなくなる。

またもや、この恋は失敗なのだろうか……と思わせるのに十分な証拠がこんなにも出そろった。

「凜香、まあ落ち着けよ。この話の続きは家に帰ってからということで。今夜はきちんと布団で寝ような。もうソファはこりごりだ。落ちた瞬間は、あまりの背中への痛さに目から星が飛び散ったんだぞ。なのにおまえは爆睡中だし。で、舞台なんだけど……」

今夜もまた一緒に過ごすことを宣言された凜香は、この男にはもう何を言っても無駄だと悟る。

おまけに披露宴の舞台のことまで言われても、今の凜香にはこれ以上何も考えられなかった。

相当派手な結婚披露宴をお望みの目の前の恋人に我慢ができなくなった凜香は、こぶしで机をドンと叩き、立ち上がった。

「広海！ どうしてそんなに先々のことを、あんた一人で勝手に決めるんだ。芸能人でもあるまいし、結婚式に舞台なんかいらないだろ！ ウェディングドレスだって、そんなもの、今から決めてどうするんだ。そんな話をする前に、やることあるんじゃないのか？ いつ私があんたと結婚するって言った？」

広海がサンドイッチを口に頬張ったまま、ピタリと動きを止める。

きょんとした顔で。目を丸く見開いて。

そして、次の瞬間、何かを察知したかのように彼の目にキラリと光が宿り、再びもぐもぐと口を動かし始めるのだ。

伏目がちになった広海がふっと息を漏らし、不敵な笑みを浮かべてゆつくりと顔を上げ、凜香を見た。

32・告白は突然に

「おまえ……。何か勘違してるだろ？」

食べかけのサンドイッチを机に置き、腕を組んだ広海が訊ねる。

「はあ？ だから、なんで教頭に仲人なんか頼んだんだって言うてるんだ。いくらなんでも、気が早すぎるだろっ！」

「な、仲人だつて？ ははん、やっぱりな……」

広海がこれみよがしにふんぞり返り、ますます傲慢な態度を露わにする。

「なんだよ、言いたいことがあるならはつきり言えよ。この、自信過剰のせっかち野郎！」

もう我慢ならない凜香は、恋人である目の前の男に、とんでもない暴言を吐いてしまう。

「おまえなあ、ちょっとは慎めよ。その口」

広海が身を起こし、片肘を突いて手の甲に顔を載せ、もう一方の手で凜香の額をツンと突いた。

もちろんその顔は少しも怒ってなどいなくて。凜香の暴走を楽しんででもいるかのように余裕たっぷりにはくそ笑む。

凜香は広海のそのポーズを以前どこかで見たような気がしてならなかった。

音楽室の肖像画、だったかな……。そうだ。フォスターだ。

「凜香……。言っちゃあ悪いが。それは激しい誤解だぞ。俺が教頭に頼んだのは仲人のことなんかじゃなくて」

「へ？ 仲人じゃない？」

「ああ。ギターのことなんだけど」

「ギター？」

凜香は目の前の和製フォスターを、しばしじっと見つめた。
もしかして、それって、あれのことだろうか。そう、タベ砂川と
約束した文化祭のサプライズ企画……。

凜香は内心焦りだす。つまり、広海が言っていたのは、決して結婚のことではなかったということだ。

衣装というのもウェディングドレスなんかではない。ステージ衣装のことなのだろう。

ならば、もちろん家にある派手目の服をリサイクルすればいい。
スパンコールくらいなら縫い付けることは出来る。舞台もしかり。
すべて、文化祭の話だったのだ。

「はははは……！ おまえさ、人の話をちゃんと聞かないから、こ
うなるんだよ。俺たちの結婚式のことだと誤解してしまったんだろ
う？」

「う、うん。まあ……ね」

早合点しすぎた自分が恥ずかしくて、馬鹿みたいで。顔なんか上げられるはずもなく。

さっきまでの勢いはどこへやら。凜香は俯いたまま、こっそり広海の姿を上目遣いに盗み見ることしか出来ない。

「でも、そんなおまえのフライングも、間違っちゃいないぞ。結婚の話もいろいろ決めなければならぬことが山積みだしな。住む家のことやそれぞれの親へのあいさつもまだだしな」

広海がはつきりと文化祭のことだと言わないものだから、早とちりしてしまったのだ。

広海との結婚を待ち焦がれていると思われなかっただろうか。プロポーズの言葉もあやふやな今、このままズルズルと結婚まで話が進んでしまうのは、凜香としては納得がいかない。

以前も来栖とは職場恋愛だったはずなのに、こんなにやりにくかったのだろうか？

学校では二人つきりになることもほとんどなかったし、もっと普通に過ごしていたと記憶している。

周りの誰も二人の異変に気付くことはなく、非常に静かな恋愛だった。

なのに今は……。

昨夜、身も心も一つになった時の広海の甘い囁きや切ない表情が、何度も凜香の脳裏に蘇る。

広海から滴り落ちるおびただしい数の汗の雫すら愛しいと思った。

いくら昼の休憩中とはいえ、職場でそんなことを思い出してしまう自分が許せないのだが、それでも尚、恥ずかしさとありえないほどの胸のときめきで、もうどうにかなりそうだった。

こんな状況で文化祭の話など、初めから無理だったのだ。

「さーて、さっきの続きだが……」

広海が文化祭のサプライズ企画を進めていく。

額くだけの凜香は到底何も考えられなくて。広海の声が、目が、口が。その手の指も、髪の毛一本一本も。

すべてが凜香の心に新たに上書きされていく。

これが人を好きになるということ？

広海との距離が急激に縮まったこの夏以降、凜香は自分自身の内面の変化にただただ驚くばかりだった。

「……凜香？　おい。聞いている？　なんだ、おまえ。パンも食っていないじゃないか。なんなら俺がもらうぞ」

「うん、やる」

広海が置いてくれた焼きそばパンをポンと差し出す。

「おまえ、やつぱり変だ。本当に大丈夫なのか？　夕べ、飲みすぎたか？　おまえならあれくらいじゃ、びくともしないはずだが。熱でもある？」

にゅっと伸びてきた広海の手ひらが凜香の額を覆う。

もちろん中腰になった広海が、机をはさんで上半身ごとこっちに近付いてくる。

グレーがかったブラウンの瞳が、凜香のすぐそばで瞬きもせず、彼女の額の辺りを心配そうに見つめていた。

「熱は……ないか。どうしたんだろうな」

広海が何か言葉を発するたびに心が震え、鼓動が早まる。そのままずっと額に触れていて欲しかったと思うほどに。

「今夜は早めに休もうな」

再び腰を下ろした広海の手が、ずっと凜香から離れる。そして凜香と目が合ったとたん、自然に広海の口元がほころび、ほっとしたような笑顔を浮かべる。

凜香はその瞬間、心の中で何かがはじけた音を聞いた。

このまま沈黙し続けて、広海への想いを閉じ込めておくのはもう不可能だ。

「す、好き……」

耳を疑うような凜香の突然の告白に、ほころんでいた広海の口元が急激に強張る。

いったい何を言ったんだと、彼の目がその真意を探るように凜香を見据える。

「広海が……好き」

言ってしまった。真つ昼間に。それも学校で……。

広海はぎょっとしたように目を見開き、口をパクパクさせている。それでも凜香はやめなかった。

「なんでこんなに広海のことを好きなんだろう。広海は？　広海は私のこと……」

「り、凜香……。俺もおまえのことが大好きだよ。でもな、ここ、学校だから。これ以上は……な？」

慌てて室内をぐるりと見渡した広海が声を潜めて言う。

凜香はようやく広海が焦っている理由に気付いた。そうだ、ここは学校だった。

グラウンドでは部活中の生徒が掛け声を轟かせている。

何てことだろう。凜香ともあろう人物が、場をわきまえずに好きだななどと思いのままを口走ってしまったのだ。

自分の無防備さにあきれ、茫然自失状態になっている凜香の手を、広海が包み込むようにして握った。

そう言ってもらえて嬉しいと目を細めながら。

その時だった。ガラガラと音を立てて美術準備室のドアが開いたのは。

「あつ鷺野先生。ここにいたんだ。夏休みに伊勢方面にスケッチ旅行に行つてね。これ、おみやげ……」つて。な、な、な、なんで鶴本先生がいるんだ？　俺、教室間違えた？」

ノックもせずに準備室に入つて来たもう一人の美術教師が、再び廊下に出て、場所を確認している。

「さ、佐々木先生。間違つてないですから。ここ、美術準備室です」

広海とほぼ同時に大慌てで手を引つ込めた凜香は、佐々木瑛太という美術教師に、やや上ずった声でそう言った。

もう一度準備室に入ってきた佐々木は、にやりと意味ありげな笑顔を向ける。

「もしかして、お二人。今、手、握ってなかった？ あれ？ あれれれ？ おいおい、これってもしかして……。取り込み中だったってこと？ いやはや、邪魔して悪いっ。そうだ、俺、職員室に用があったんだ。ってなわけで、どうぞこゆっくり」

「佐々木先生！ 違うんです。待ってください！」

凜香は椅子から立ち上がって、必死になって叫んでいた。

Ｕターンして廊下に出て行った身体をまたもやＵターンさせて、にかつと白い歯を見せながら佐々木が振り向く。

「あ、いいんだよ、君たちはそのまま。気にすることないって。あはは……。ここに入ってきたのが俺で良かったってことで。それじゃあ、邪魔者はさっさと失せますね。……そうか、そうだったのか。あははは。いや、参ったな……」

不可解な笑い声を上げながら、佐々木が準備室から遠ざかっていく。

ただしこの人は、むやみに噂を広めたりしないし、職員間のいざこざに首を突っ込むようなタイプでもない。

だがこの人のいい隣人に、これからどんな顔をして会えばいいのか。

凜香は広海と顔を見合わせ、冷や汗と共に思わず苦笑いを浮かべ

てしまった。

こんな状態でこれから先、まっとうに仕事を続けていけるのだろうか。不安が募る。

佐々木の靴音と笑い声が聞こえなくなると、広海がのっそりと立ち上がった。

「んじゃ、俺もそろそろ行くわ。でもまあ、見られたのが佐々木先生で良かったんじゃないの？ あの人なら俺達のこと、悪く言わんでしょ」

などと、のん気なことを言いながら準備室のドアを開け、廊下の左右を確認し……。

あつと言つ間にその場から姿を消し去った。

あんたは忍者の末裔か……。

凜香の辛らつなぼやきが、誰もいなくなった準備室に虚しく響く。いなくなつてほつとするやら、どこか寂しいやら。せつかく広海にやると言つたのに、机の上にポツンと置き去りにされた焼きそばパンが妙にわびしい。

凜香は袋を開け、ひと口そのパンを頬張った。結構うまい。

世界で最初にパンに焼きそばを挟んだ人は天才だと賞賛することも忘れない。

そして不幸中の幸いがひとつあることに気付く。
さっきの美術教師のことなのだが、実はこの人。里見栄子のこと
が好きらしい。

彼女と広海が付き合っているのかと凜香は幾度となく佐々木に訊ねられたことがあったが、これまでは知らないとしか言いようが無かった。

栄子が広海にぞっこんなのは佐々木も承知していたので、いつ広海が落ちるのかとはらはらしていたのだ。

あの意味不明な佐々木の高笑いが再び凜香の耳に蘇る。

ずっとライバルだと思っていた広海がそうでないとなり、湧き上がる喜びを抑えることが出来なかったのだらう。

きつと今ごろ学校内のどこか片隅で、やったーと声高らかに叫び、小躍りしているのはもう間違いない。

「佐々木先生、よかったな……」

凜香はそうつぶやき、また一口。ぱくつと焼きそばパンにかぶりついた。

33・アポロの横顔

その日、凜香がおたふくについたのは夜の九時前だった。

職員会議が長引き、そのあと書類を片付けて教室の戸締りを確認し、広海と一緒に学校を出た時、すでに八時半を回っていた。

昼に食べた焼きそばパンなんてとつくの昔に跡形もなく消化してしまっただろう。

凜香のお腹は五時くらいからグーグー鳴りっ放しで、会議中突如訪れる沈黙に冷や汗をかいた。

早く何か食べたい。そして……眠い。

凜香が何を注文するのかあらかじめわかっていたとも言つように、オーダーするや否や、瞬く間にきのこパスタがテーブルに運ばれてくる。

このスピーディーさがおたふくの人気の所以でもある。

待っていましたとばかりに、喜び勇んでフォークにパスタをくると巻きつけ、パクつと食べる。

きのこオリーブオイルと醤油の絶妙なバランスが凜香の喉をうならせるのだ。

しめじとエリンギの菌ごたえがたまらない。上に散りばめられた海苔がよりいっそう全体の風味を引き立てている。

あまりのおいしさに、すべてを独り占めしたくなった凜香は、隣に座る広海のフォークがこちらに伸びてこないことを密かに祈った。

「なあ、凜香……」

ドキッとして広海を見る。が、彼のフォークは自分の皿の上でチキンのグリル焼きを突き刺している真っ最中だった。

パスタが狙われているのではないとわかったとたん、凜香は安堵のため息を漏らし、心置きなく彼の話に耳を傾けることが出来た。

「今夜の予定なんだが」

一口大に切ったチキンを口に頬張りながら、広海がこちらをちらっと見て言った。

「ここから俺の官舎まで、歩いても二十分くらいだ。メシが終わったら一緒に車を取りに帰って、おまえのマンションまで送って行く。そしておまえは着替えや仕事道具を準備して、また俺の官舎に舞い戻るってのはどうだ？ それとも、ここで待ってるか？ 俺だけで車を取りに帰ってもいいぞ。おまえ、やっと体調が戻ってきたばかりなものな。これ以上、無理はさせられないから。そうだ、ありったけの着替えを持って来るといい。いちいち取りに帰るの、面倒くさいだろ？ そうすりゃあ、週末までうちにいられるじゃないか」

今度はチキンの横に添えてあるブロッコリーをフォークで刺し、凜香の口の前に鮮やかな緑色の物体をちらつかせるのだ。おまえも味見するかと言って。

「って、私にくれるのは野菜ばかりかよ」

凜香は放り込まれる直前に口を閉じた。

「あたりまえさ。女性はこういうのが好きなんだろ？ 現におまえ、

きのこばかり食ってるじゃないか……って、えっ？ 鶏が食いたかったのか？ なら、そう言えよ。よし、一切れおまえにやろう」

広海が凜香の口に無理やりブロッコリーを押し込んだあと、チキンの小さな一切れをパスタの横にちょこんと置く。そして……。

「お、おい。誰がパスタを食べていいって言った！ あーあ。なくなっちゃったじゃないか。私の大事なきこのパスタが……」

フォークに巻きつく限り何重にも巻きつけたパスタを奪い取った広海が、目にも留まらぬ早業で食べてしまい、満足げな笑みを浮かべる。うめえうめえ、と何度も言って。

「ったく、油断も隙もあつたもんじゃないな。で、この後、うちまで送ってくれるのはいいが、また広海んちに戻るって、なんか面倒くさいな。今日はこのまま帰ろっかな……」

食べ物への恨みは、愛よりも深し。凜香は空になった皿にフォークを置き、パスタ泥棒にチクリと先制攻撃を仕掛ける。

「その選択肢はなし。おまえは今夜も俺と一緒にだ。いいな」

「勝手に言ってる」

「じゃあ、勝手ついでに言わせてもらうが。実は、提案があるんだ……。おまえも官舎に移って来ないか？ 俺の部屋の隣、空いてるだろ？ 希望すればそこにに入れてもらえと思うんだ。ただ数年後には、あの官舎は民間に売却するって噂もある。県も財政難だからな。このご時勢、建て替えるより、いつそ売っぱらって、資金を調達する方がいいってことなんだろう。立ち退きまで取りあえずあそ

ここにいて、将来は、俺がおまえの転勤先に合せて新居を選ぶという段取りでどうだ」

凜香は目がテンになった。付き合い始めてまだわずかの時間しか経っていないというのに、もう新居の話ときた。

それに、まだ広海との結婚を承諾した覚えは、一切……ない。

「なんで私が官舎に移らないといけないんだ。今のままでも不都合はないと思うけど？」

毎日職場で顔を合わせているし、こうやって夜も一緒に過ごせるのだ。

凜香はそれで十分だと思っているのだが。

「毎回荷物を取りに帰るのも大変だし。俺の部屋に二人一緒に住むには狭すぎるし。じゃあ、俺がおまえのマンションの近くに引っ越せばいいんだろうけど、ピアノを動かすとなると、いろいろ問題もあるしな。だから、おまえが官舎に来て、おまえの借りた方を寝室とアトリエとして使えば、ちょうどいいと思うんだけど？ 2DK二つで4DDKKだ」

「はあ？ なんだよ、その4DDKKってのは。意味がわからない！」

「だから……。隣なら、ベランダの境界板を取ってもらえば、行き来も簡単に出来て、部屋が繋がるってことだよ」

そんなこと、いちいち説明してもらわなくてもわかる。だから、凜香が言いたいのはそうじゃなくて……。

「おまえ、嫌なのか？ いいアイデアだと思ったんだが……」

凜香は答える気力すら残っていなかった。もう、疲れた。これ以上広海と話していても落ちが明かない。

凜香は今すぐにでも家に帰って、一人で自分のベッドに横になりたいと思った。

「おまえ、怒ってるだろ？ 何が気に食わないんだ。パスタの味見のひと口が多かったからか？ もう一品、何か追加しようか？ ピザもつまそうだぞ。あつ、それとも……。今日の昼、佐々木先生に俺たちのことがバレちまったのが心配なのか？」

本当にわからないのだろうか？ 首を左右にかしげ、不機嫌さの理由をあれこれ詮索する広海に、凜香は呆れ返っていた。

ここまで鈍感とあれば、今までの彼女もさぞかしこの男には苦勞させられたことだろうと同情する。

今ならまだ間に合う。ただちに広海と別れて、この際この男に立派なのでも付けて里見栄子に差し出した方が身のためではないかとさえ思う。

広海へのイライラがピークに達してきた。

「あ　！　んもうっ！　グタグタうるさい奴だなあ。味見のことも、佐々木先生のことも。どれも気にしてない。あのなあ、はつきりと言っておくけど……。私、あんたと結婚するなんて、ひとつ言も言っていないですから。勝手にほざくな！」

言ってやった。そうだ、そうだ。ちゃんとプロポーズもしていないくせに、一人勝手に盛り上がるな、と言いたいのだ。

凜香は柄にも無くぷーっと頬を膨らませ、広海の皿に残っている

一番大きなチキンのグリル焼きに垂直にフォークを突き刺し、素早く口に放り込んだ。

「なんだ。そういうことか。俺、ちゃんと言わなかったっけ？ おまえも了解済みだと思ってただけだな。俺の前で、そんなにかわいくすねるなよ。なあ、凜香。……って、俺の、俺の、俺の！ とつておきのチキンのグリル焼きが！」

「はいはい、そうですよ、すねてますけど何か？ だから私、今夜はあんたちに行かないから。うちまで歩いて帰るし。広海も自由にな……にしてもこのチキン、うまいな」

凜香は柔らかくジューシーなチキンのグリル焼きを堪能した後、グラスの水をクイッと飲み干した。

「わ、わかったよ。じゃあ、一緒に歩いておまえんちに行こう。今夜は月がきれいだしな。そうだな、四十分もあれば着くだろう。おまえをマンションまで送り届けたら、俺はとっとと退散するから。それならいいだろ？ さ、メシも済んだし、もう出よう」

広海がすくつと立ち上がる。その隙に、今夜こそ自分が支払いをしようと伝票ホルダーに手を伸ばすが、結局、広海に奪い取られてしまった。

いつものことだが、もし今夜限りで別れる……なんてことになれば、このまま甘えっぱなしになってしまう。なぜかすっきりしない。

凜香はつり銭をポケットに入れる広海に、仕方なく、いつもありがとうとボソツと礼を言う。

ほとんど収入も変わらないのに、男だからというだけで、一方ばかりが支払うのはおかしいと常々思っていたからだ。

すでに凜香の気持を察していたのか、広海が店を出たところで振り返り、特上の笑みを見せる。

「おれがそうしたいだけなんだから、おまえは何も気にするな。おまえのために支払う金は、惜しくもなんともない。俺の全財産をおまえにやってもいいとさえ思っている……と言っても、貯金はほんのわずかしかないけどな。あはっはっはっはっは！」

などと言って……。

「おい、どうしたんだ？ 凜香？ おい！」

悩殺。

凜香は立ち止まったまま、一歩たりとも動けなくなってしまった。いったい何事だろうと、歩道の真ん中で立ち止まる凜香を避けるようにして道行く人が迂回していく。

凜香の心臓がますます早鐘を打ち始める。

広海の写真に、声に、そして、その優しさに触れたら最後、彼に見つめられるだけで、身体中が蕩けそうになるのだ。立ってられないほどに。

やっぱり広海は自分だけのもの。里見栄子に渡してなるものかと、凜香は自分自身に言い聞かせる。

「じゅん。ちょっと、その……」

凜香は口ごもりながら、下を向いた。

「変なやつだな。まあいい。さあ、凜香。行こう。もたもたしてる
と明日になっちまうぞ」

広海がぬつと手を出してくる。彼の手に引き込まれるように、凜
香は自分の手を重ねる。

重ねたはずなのに、広海の手はそのままどこかに消えてしまい、
そして……。

広海の腕が凜香の肩をぎゅっと抱き寄せるのだ。

そつと横を見ると……。広海の横顔が月に照らされて、輪郭がは
つきりと映し出されていた。

それがあまりにも明瞭に浮かび上がっているように見えたので、
驚きのあまり声もでない。

すつと通った鼻筋とぱつちりとした目元が、石膏像のアポロの横
顔にぴつたりと重なってしまう。

何度も何度もデッサンしたアポロ像の輪郭は、目をつぶっていて
も形作ることが出来るのだから。

こんなにも似ているだなんて、今まで全く気付かなかった。

ヘルメスでもない。ブルータスでもない。

凜香が他の何よりもアポロ像のデッサンを好んだのは、広海の面
影をそこに追い求めていたからなのだろうか。

「なあ、凜香……」

口を開いたとたん、アポロが広海に生まれ変わる。

「なに？」

広海が照れたように口元を緩め、ふっと息を漏らした。

「今日の昼、嬉しかったよ。俺のこと、好きだと言ってくれただろ？」

「あ、ああ……」

凜香は頷く。確かにそう言ったと。

「俺、あの時、ホントにどうしようかと迷った。真剣に悩んだんだ。あのまま学校を抜け出して、おまえを連れて帰るところだったんだ。誰に何を言われてもいい、免職になっても後悔しないとまで思った」

「広海……」

「佐々木先生が来てくれたおかげで、目が醒めたけどな」

髪の上から、広海の柔らかい口付けが、二度、三度と舞い降りてくる。

耳たぶに彼の熱い吐息を感じた時、凜香の心臓がどくつと鳴った。

肩にあった広海の手が、髪を梳くように上から下へと撫でる。そして動きを止めた次の瞬間。

「凜香。……結婚しよう。なあ、凜香。俺と結婚してくれる？」

アポロの求婚は、突然だった。

34・月夜のプロポーズ

結婚しよう。

広海の目が凜香だけを見て、はつきりとそう言ったのだ。

声が少し上ずっているように感じたのは決して気のせいではないだろう。

プロポーズを切り出すタイミングを彼なりに吟味し、断られる可能性も踏まえながら、腹をくくって挑んだ結果に違いない。

ところがどうだろう。いざ言われてみると、まるで夜空にひっそりと浮かぶ月のように、あくまでも冷静で落ち着き払っている自分がいるのに驚く。

それはもつと神々しく感動的瞬间で、ああロミオ……と、シェイクスピアの悲劇さながらに、感極まって涙を流すほどの場面だと思っていた。

無上の喜びに包まれ、溢れんばかりの幸福感に酔いしれて。

この先、どんな人生が待っていようと、この人と一緒に立ち向かっていくのだという使命感に燃え、ひしと抱き合い、お互いを慈しむ……はずだったのに。

その気配のカケラすらどこにも見当たらないのは、どういうことだろう……。

来栖にプロポーズされた時は、ただびっくりして、なんで、どうして、と疑問符ばかりが凜香の脳裏を埋め尽くした。ありえないことだと思った。

今度こそ巷で語られていたような、ロマンチックな経験ができるのではないかと心のどこかで広海のプロポーズに期待していた凜香は、あまりにも普通すぎるこの流れに、肩透かしを食らった気分になる。

それもこれも、全部広海が悪いのだ。

プロポーズの前から、結婚を前提にした話ばかりするから、ここぞと言う時に喜びと感動が薄れてしまったのだろう。

でも……。世間で繰り広げられるプロポーズは、案外こんなものなのかもしれない。

映画や小説のようにはいかないというのは薄々気付いていたではないか。

結婚してくれの言葉もないまま、いつの間にか結婚していたという人もいると聞く。

それに比べれば今夜の広海の姿勢は好ましい部類に入るのではないか。

凜香は広海の勇気を讃え、生真面目に彼を見つめ返した。

そして、うん、わかったとこれまた生真面目に返事をする。

「凜香……。本当にいいのか？」

広海が少し眉を下げて、心配そうに凜香を覗き込む。

そうなのだ。凜香は愛想を振りまくのが大の苦手ときている。

そのせいか、いつも澄ましていてお高くとまっているとか、つつんしていると言われることが多い。

こんな時くらい、にっこりと優しい笑みを返せたらいいのだが、広海の緊張が伝染している今、それは凜香にとって無理な相談だった。

「だから、いいって言ってるだろ？」

幸せな気分をつまく表現できない凜香の口から出る言葉は、いつだって勇ましい。

「俺で……いいんだな？」

あれほど自信満々に引越しや結婚後の勤務のことまでも話していたくせに、いざとなると情けないほど弱腰になる。

つべこべ言わず黙って俺について来いと胸を張って言うてくれればいいのに……。

凜香はふとそんな考えを持ってしまった自分にびくりしていた。自分の意見を持たない優柔不断な男も嫌いだが、強引で封建的な男はそれよりも嫌いだったはずなのに。

だが、自分をリードしてくれる男性像を無意識のうちに広海に期待している自分がいるのを知った今、凜香は自身の心境の変化にともなうまどう。

「まったく……。広海がいいって、何度も言ってるじゃないか。広海以外の男とは……結婚しない」

凜香は自分の言動が恥ずかしくなって目を逸らし、密着しながら隣をゆつくりと歩く広海のスーツのボタンを、紺色の生地ごとぎゅっと握り締めた。

「そうかそうか。それを聞いて安心したよ。って、今夜のおまえ。かわいすぎないか？ ああ、俺。マジでヤバイくらい、おまえがか

わいいく思えるんだが」

凜香の頭をがばつと抱え込んだ広海が、もう一方の手で、ボタンを握っている彼女の手をがっしりと捉えた。

知らない人が見たら、広海が誘拐犯だと疑われるくらい、がんじがらめになっているのだ。

「ひ、広海。このままじゃあ、歩きにくいんだけど……」

そうされるのが決して嫌ではないのだが、広海の腕が凜香の視界を妨げ、足元がおぼつかなくなるのだから仕方ない。

「あ　ごめん」

広海が腕の力を緩め、凜香の頭にあつた手が、肩に下りてくる。

「よし。そうとなつたら式は早いほうがいいな。冬休みに式を挙げるってのはどうだ？」

凜香はぴとつとくつついてきた広海の顔を押しつけて言った。それはあまりにも早すぎやしないかと。

「冬休みに……なんて、無理だよ。いろいろ準備もあるし、間に合わないって。それに寒いぞ。家族や招待客にも気の毒な気がする。来年の春休みじゃだめなのか？　それか、夏休み」

「な、夏休み？　夏休みはいくらなんでも遅すぎるだろ。俺は待てないね。それなら先に籍だけ入れて、明日からおまえに同居してもらつ」

「明日から同居？　なんでそうなるんだ。信じられない。本気で言ってるのか？」

「あたりまえだ。今だってそれに近い状況なんだし。おまえは嫌なのか？」

「嫌とか、そんなんじゃない。非現実的だろ？　生徒になんて説明するんだ。内緒にするには無理があるし。校長だっていい顔はしない」

「籍はちゃんと入れるんだ。別に誰にも咎められないと思う……けど。やっぱり、ちよつとまずいか……」

「ああ。まずい」

「じゃあ……。百歩譲って、春休みに式を挙げるのなら。それで手を打ってもいい。それが限界。それ以上引き伸ばすのは絶対にダメだ」

凜香の肩を抱いていた広海の手がこもった。

でも凜香の本心は、春休みでも早すぎるのではと思っていた。

それは、結婚を先延ばしにしようとか、広海との生活に不安があるとか、そういう理由ではなかった。

問題は来栖の存在だ。

つい先日別れたばかりなのに、もう次の相手と結婚が決まったとなると、二股疑惑は避けられない。

栄子にも言ってしまったのだ。自分には前任校に彼氏がいるので
広海とは付き合っていないと……。

あれは夏休みに入っただけのことだった。それなのに、もう広海
と結婚するなどと、いったいどんな顔をして言えというのだろう。

これが二股でなくて何？

だが、待てよ。来栖の方が先にルール違反を犯したのではなかつ
ただろうか。

凜香という相手がいながら、勝手に見合いをして新しい相手に出
会ってしまったのは、来栖だった。

もうすでに冷え切った関係ではあったが、彼と別れていたわけ
ではない。

凜香が広海に身も心も許したのは、昨夜のこと。来栖とはそれ以
前に話し合い、きっちり別れている。

栄子には広海からきっぱりと言ってもらえば、なんとかなるだろ
う。

凜香は自分に非がないとわかった、幾分気持が楽になった。

「おまえさあ、また何か一人で考えて、勝手に結論出してるだろ？」

「ええっ？ あっ、い、いや、その……」

広海に急に顔を覗きこまれ、しどろもどろになる。

この頃、このようなパターンが多い。

顔を見られているだけなのに、心の中まで見透かされているよう
な感覚に陥るのだ。

凜香は脳内に駆け巡っていた二股疑惑を消し去り、遠慮がちに広

海と目を合わせる。

「そ、それじゃあ、その……。結婚式は春休みで」

「よしつ。これで決まりだな。今月中にでもおまえの実家に行つて、ご両親にあいさつするよ」

「あいさつ？ ああ、そうか。そうだよな。結婚つて二人だけの問題ではないんだもんな」

凜香は結婚へのあまりにも早い展開に気持ちがついていけない。そうだった。親にはまだ何も知らせていないのだ。

来栖と別れたことすら言っていないというのに、昔の友人と結婚することになったと言えば、さぞかしびっくりするだろう。

凜香の両親は共働きだ。それも自営業なので多忙を極めている。急にあいさつと言っても、家にいないのであれば話にならない。

「なあ、広海。多分うちの親、今月中に会つのは無理だと思う。両親そろつて、北海道に転勤中なんだ。文化祭が終わってからでもいいか？」

「俺は別にいいけど……。それにしても、北海道つて。えらい遠いな。札幌か？」

「いや、違う。函館だ」

「函館？ へえ。そうなんだ。でも、夫婦揃つて北海道に転勤つて、なんか、すごいなあ。昔からおまえの親父さん、忙しそうだったのは知ってるけど。でもおまえんち、自営つて言つてなかったか

？　なのに転勤って、どういうことだ？」

「あ。私も詳しいことはわからないが、とにかく今は函館にいる。運送業だから、何か利便性があるんじゃないかな？」

「ふうん。そうか。じゃあ、ご両親がこっちに帰って来た時、おまえの実家にお邪魔させてもらうことにするよ」

「そうしてくれ。それはさておき、うちの両親は私たちの結婚に反対はしないだろうから、はっきり言って、事後報告でも問題はないっていうか、これまでもさんざん見合い写真を押し付けられて、結婚をせっつかれていたからな。結婚が決まったって言えば、大喜びすると思う。それに広海のことよく知ってるし」

「見合い？　それは聞き捨てならないな。来栖さんといい、見合い相手といい。おまえを取られなくてよかったよ」

「広海、私だって広海が一人でいてくれてよかったと思ってるぞ。はあ……。それにしても、結婚って大変だな。他にも決めなければならぬことがいろいろあるし。式場のことや、住む家のことも」

「ついさっきまではプロポーズの言葉が嬉しくて気分も高揚していたのだが。突如、現実という大きな壁に阻まれ、何から手をつけていいのかわからなくなる。」

「今までは、なんでも自分で決断して自分の思うようにやってきて、何も後悔はなかったはずなのに。ここの一番の人生の分岐点でどうしようもないほど不安な気持ちになる。」

「そうだな。いろいろ大変そうだけど、順番に決めていくしかない。」

学校にも早めに結婚のことを言った方がいいだろうし」

「学校にも？」

「そうだ。あまりギリギリに知らせると迷惑かけるだろ？ 勤務地の移動のこともあるし」

「そ、そうだったな。ねえ、広海。私、どうしたらいいんだろう。こんな経験は生まれて初めてだから、先が見えなくて、なんだか怖い。本当にうまく結婚にたどり着けるのかな……」

「あははは！ 凜香ともあろう人が、どうしてこれくらいのことですけりついでるんだよ。まだ何も始まっていない。全てはこれからだつていうのに……。でも安心しろ。なんとかなるつて。俺にまかせておけよ。な？」

凜香ははつとして広海を見る。

俺にまかせておけ……か。凜香は心の中で、広海が今言つた言葉をかみしめる。

そうなのだ。結婚というのは二人の共同作業だ。

こうやって励まし合い、互いを補い合つて、一步步目標に向かつて進んでいく作業なのだ。

なんだか今夜は、広海が頼もしく思える。

九月といつても、まだまだ夏の名残があちこちに残っている月夜の晩。

広海と触れ合っている右肩が少し汗ばんできたけれど、もう少しこのまま一緒にいたいと思つた。

「広海……」

凜香は前方に自分の住むマンションが見えて来たのを確認しながらつぶやいた。

「なんだ、凜香」

広海が前を見たまま答える。

「今夜……。うちに泊まっていく？」

凜香を見た広海の目が、一瞬、大きく見開かれる。とても不思議そうな顔をして。

自分の耳を疑っているのだろうか。

でも瞬く間に目を細め、微笑み、そして……。

凜香の唇にそっと口づけを落として、イエスと小さくささやいた。

35・順番抜き

今週は目の回るような忙しさだった。もちろん仕事そのものの忙しさもあるが理由はそれだけではないと、水垢ひとつついていないピカピカの洗面所で、凜香は思考を巡らせる。

今日は土曜日。ただし午前中は凜香も広海も部活の顧問としての仕事があるので早朝から出勤準備に余念がない。

今朝も二人揃って広海の部屋から職場に向かうのだ。

プロポーズを受けた晩、一度だけ凜香のマンションから二人で出勤したが、シングルベッドの狭さと近所の住民の興味本位の視線がネックになって、それ以来広海の官舎が二人の拠点として定着した。

広海の手で一緒に出勤するにあたって、凜香の提案した作戦が今のところ順調に遂行されている。

つまり……。毎朝、三人で出勤しているのだ。

同じ官舎に住む同僚の美術教師を巻き込み、広海の手車に同乗してもらうことで、事なきを得ている……というわけだ。

美術教師の佐々木は、広海が凜香狙いであることがわかった日からすこぶる上機嫌だ。

栄子を振り向かせたい佐々木と、なんとしても栄子を遠ざけたい広海の利害関係は見事に一致している。

凜香は広海と半同棲状態であることを佐々木に告げ、学校で怪しまれないために、是非とも一緒に出勤して欲しいと願ったところ、喜んで聞き届けてくれたのだ。

コンビニでばったり出会った生徒とも、今のところ非常に友好的な関係を保っている。

凜香と広海の結婚も次第に外堀が固められつつあった。

午後は市内の音楽スタジオに広海と一緒に出向く予定になっている。

というのもそれには教頭が一役買っているのだ。

広海が文化祭のステージのことを話したところ、予想通り二つ返事で話に乗ってきた教頭は、昔の音楽仲間が経営している音楽スタジオを早速練習に使えるよう押さえてくれて、今日初めて、ドラムとエレキギター、そして凜香のボーカルを合せることになった。

昔使っていたエレキはとくに処分してしまったので、先日息子を伴って四半世紀ぶりに楽器店を巡ったなどと目じりにたつぷりしわを刻ませて笑みを浮かべる教頭は、間違いなく自分たちと同類であると凜香は確信した。

そして残すところはキーボードの担当者だが……。まだ決まっていない。

広海に心当たりはあるらしいのだが、もう少し待ってくれと言っただけで、凜香には誰であるのかはまだ知らされていなかった。

文化祭までに本当に間に合うのだろうか？

実行委員の生徒たちも、水面下でどんどん準備を進めている。もう後には引けない。

いざと言う時のために、凜香は弾き語りをする覚悟も出来ていた。

午後の一時を過ぎて、ようやく美術部員の生徒達が全員帰宅した。美術室に誰もいないのを確認して戸締りをする。

そして広海の待つ駐車場に向かおうと、階段を降りかけたその時

だった。

階段の途中で、凜香の進行方向にすつと誰かが立ちはだかるのだからくるくるカールした巻き毛が肩の下で揺れるその人は……。

そう。社会科教師歴三年目、相変わらず広海にぞつこんの里見栄子だった。

身動きの取れない凜香を威嚇するかのように下の段から睨みつける栄子の形相は、まるで般若の面のごとく、怒りと嫉妬にまみれていた。

「鷺野先生。お話があります。ちょっとよろしいでしょうか！」

アイラインでくつきりと縁取られた目をぎろつと見開いて、早口でまくし立てる。

よろしいわけがない。今からスタジオに音合わせに行くというのに、栄子にかまっている時間などあるはずもなく。

でも栄子はいつもの彼女ではなかった。

有無を言わせぬ毅然としたその態度に圧倒され、凜香はいつの間にか手を引かれて女子職員更衣室に引きずり込まれた。

「お、おい。私は、時間がないと言ってるだろ？　なのに……」

「なのにも、だのにもありません！　いいですか、鷺野先生。今日と言う今日は、はつきりとさせてもらいますから！」

愛らしい顔の真ん中にあるこれまた上品でちょこんとした鼻から、栄子らしからぬ荒い息が漏れる。

出勤義務のない土曜日ではあるが、半分以上の教師が所用で学校に出てきている。

部活をしている生徒もいる。そんな中で、いったい何を話すというのだろう。

凜香は更衣室の奥に設置してある和室で、テーブルをはさんで栄子と向き合って座った。

「今日出勤してる女性職員は、あたしと鷺野先生だけなんです。なのでここには誰も入って来ません！」

凜香の目をじっと見据えながら、栄子がきつぱりと言う。

そりゃあそうだ。ここは女子更衣室なので、男性教師は誰も入室できない。

と言うことは、このまま誰に引き止められることもなく、延々、栄子との気まずい対面が続くことになるのだろうか。

凜香は腕時計に目をやり、広海との待ち合わせ時刻が迫っていることに焦りを感じ始めていた。

「鷺野先生、前にもおっしゃってましたよね。鶴本先生とは付き合っていないって。でも、それって、ホントなんですか？ 補習講座以降、いつも鶴本先生と一緒に帰ってるみたいだし。朝だって……」

「ああ、それは……。まあ、あれだ。夏以降、私の体の調子が悪かったのと、文化祭に向けて私物の荷物も多いので、佐々木先生共々、鶴本先生の世話になってるんだけど」

「それはそうですね。でも、鷺野先生にはちゃんと付き合ってる彼氏さんがいるんだし。そんな無責任な行動は慎むべきだと思います。違いますか？」

む、無責任って……。

凜香はこの期に及んで、栄子に嘘を突き通すつもりはなかった。きちんと本当のことを話すのが筋だと思っていた。だがこんなに急に本人に責め立てられるなどとは想定外だったので、戸惑いを隠せない。

凜香は姿勢を正して、コホンとひとつ咳払いをした。そして、壁にかけてある、山里の風景が描かれたカレンダーに目をやり、落ち着け落ち着くんだと自分自身に言い聞かせる。

いよいよ何もかもぶちまける時が来たのだ。

「里見先生」

「あ……。は、はい」

凜香の気合の入った眼差しに栄子が一瞬たじろぐ。

「前に先生に言った時、あの時は確かに鶴本先生と付き合っていないかった。けど、ちょっと事態が変わってね。前の彼とも別れたし。まあ、今は、その……。付き合っている。鶴本先生と」

「えっ……？ つ、付き合っているんですか？ 鶴本先生と？」

「そっだ」

目の前の栄子の顔色がみるみる青ざめていく。

「そんなの、嘘です。絶対に嘘です！　だって、鷺野先生と鶴本先生は、一学期まではほとんど話しもしないし、目も合わさないし。鷺野先生は、鶴本先生のタイプじゃないです」

「あ……。私もそう思う。なんで鶴本先生の相手が私なのかは、今でも謎なんだが……。でもまあ、嘘言っても仕方ないし。これは事実だから」

その点に関しては、凜香も栄子に深く同調した。

こんな女らしさのカケラもない自分に、どうして広海が心を寄せてくれるのかは、凜香にとってもいまだ七不思議のままなのだ。

「こ、困ります。どうして鶴本先生が鷺野先生を選んだんですか？　絶対におかしいです。つり合わないです。そりゃあ、二人ともとても背が高く、見かけだけはお似合いだと思いますけど……。でも鶴本先生は、女の子らしい、かわいい人が好みなんです！」

「って、なんで里見先生があいつの好みまで知ってるんだ？」

「鶴本先生的こと、あいつだなんて……。やっぱり鶴本先生のお相手は鷺野先生じゃないです。なんであたしが先生の好みまで知ってるかって、訊かれましたよね？　それは前の彼女さんが、とても優しそつで、控え目で。きれいな人だったんです。だから……」

「ほう……。なるほどね。里見先生は、あいつ……。じゃなくて、広海の前の彼女のことも知ってるんだ。私は知らないけど」

「やだ。鷺野先生、知らないんですか？　よくそんなんで、付き合

つてるって言えますね。前の職場の同僚だったらいいです。彼女から告白されて、周囲にも応援されて付き合ったらいいですけど。週末になるたびに彼女が遠路はるばる会いに来てみたいで。でも今年になってもう別れたって聞いて、今度こそあたしの番だって、そう思ったのに……」

「今度こそって、広海がそう言ったのか？　今度は里見先生と付き合うつて？」

凜香は耳を疑った。もし広海が期待を持たせることを言っていたのなら、栄子の言い分もわかる。

「そうです。鷺野先生は、順番抜かしです。次に鶴本先生と付き合いのは私なんです。だって、去年のバレンタインデーの時、チョコを渡してあたしと付き合い合って下さいと言ったら、今はダメっておっしゃたんです。もちろん彼女がいるのは知ってました。でも遠距離だし、もしかしたらっていう期待もあって告白しました。もちろん先生の返事はノーです。彼女がいるから付き合いえないって。でも今年は違います。もう彼女と別れてるんだし、チャンス到来だと思っただけです。だから私、今年のバレンタインデーに言いました。次こそは私と付き合い合って下さいって」

順番抜かしって、いったい……。ブランコの順番待ちでもあるまいし。

凜香はあきれながらも、栄子の話しに耳を傾けた。

「でも鶴本先生ったら、彼女と別れているにもかかわらず、今はまだ誰とも付き合えないとかうまく言い逃ればかりするんです……。だって今年のバレンタインデーのお返しに、すっごくかわいい小物入れを下さったんですよ。あれはきつと、将来アクセサリをプレ

ゼントしてくれた時に入れるためのものだってわかりました。絶対そうです。なのになんで鷺野先生があたしの前に割り込むんですか？　よく考えてみてくださいよ。鶴本先生が鷺野先生みたいな人を彼女にするわけないじゃないですか。補習講座の時に仕事を手伝うのと引き換えに、鷺野先生が鶴本先生を脅迫したに決まっています。ひどすぎます。あんまりです。鶴本先生が、かわいそう……」

脅迫？

凜香はこの言葉を聞くや否や、プツッと何かが切れたような気がした。

栄子の言いたい放題に、凜香もついに黙っていられなくなったのだ。

「里見先生。それはあんまりじゃないですか？　なんで私がそこまでして、広海と付き合い合わなきゃいけないのか、理由がさっぱりわからない。それに考えてもみなさい。もし私が里見先生の言うように脅迫したとして……。鶴本先生が脅迫されて黙っているような人物だと思うのか？　ええ、どうなんだ！」

凜香はテーブル越しに、栄子に詰め寄った。

「そ、それは、確かにそうですけど。鶴本先生は、正義感の強い方だし……。でも、鷺野先生のおっしゃることなんて、到底、信じられません。優しい鶴本先生は、前の彼と別れた鷺野先生が不憫だっただけです。きつとそうです」

凜香は栄子のあまりの悪態ぶりに反論する気力も失せてしまった。だが、この勘違いお嬢様をこのまま放っておくわけにもいくまい。

凜香はおもむろに立ち上がった。

「わかった。それじゃあ、今から私について来て。広海も交えて、きちんと決着をつけよう」

凜香は栄子を横目で睨みながら、投げ捨てるように言った。

「ええっ？ あの、あたし、そんなつもりじゃ……」

突如威勢を失った栄子が狼狽し、落ち着きをなくす。

「つべこべ言うな！ 言いたいことがあるなら、広海本人にはつきりと言ってくれ。いいな！」

鷺野先生、待ってください、と叫びながら追いかけてくる栄子を後方に従えて、凜香は鼻息も荒く、広海の待つ駐車場へと急いだ。

35・順番抜き（後書き）

1 / 11 00 : 11 にコメントを下さった方。

そして、始まるをお読みいただき、ありがとうございます。

コメントをいただき、とても嬉しかったです。こちらを覗いて下さ
つてるといいな。

続きが早く更新できるよう、がんばりますね。

これからもよろしくお願いいたします。 まゆり

36・ライバル

「凜香、遅かったじゃないか……って、おい！　なんで、里見さんも一緒なんだ？」

すでに駐車場で待機していた広海が運転席の窓から顔をのぞかせ、目をまるくしている。

二人のただならぬ空気を読み取ったのだろう。慌てて車から降り、いったいこれはどういうことだと言わんばかりの訝しげな視線を凜香に投げかけてくる。

「広海。あんたに話があるそうだ」

凜香は振り返ってすぐ後にいる栄子の腕を掴み、広海の前にひょいと突き出した。

「痛いっ！　さ、鷺野先生。乱暴はやめて下さいって、いつも言ってるじゃないですか！　あ、あの、鶴本先生。あたしは、その……」

力任せに凜香の手を振りほどいた栄子は、さも痛そうに掴まれた腕をさすりながら、訴えかけるような目を広海に向けた。

「あ、あの、鶴本先生。あたしは、その……」

「話とは、いったい何でしょう……」

「いや、あの、それが……」

さつきまでの勢いはどこへやら。広海を前にしたとたん、栄子はまるで借りてきた猫のようにしゅんとなってしまった。もじもじしながら、次第に声も消え入りそうになる。

一部始終を見る限り、栄子の態度は計算された演出ではない……
というのわかる。

栄子は、本当に広海のことが好きなのだろう。その声も、その表情も。すべてが彼を好きだと物語っているように思えた。

しかし、だからと言って同情は禁物だ。凜香の広海への想いは、もう後へは引けないところまでできているのだから。

「里見先生。状況がいまいちよくわからないんだが……。とにかく学校内でこの状況はまずい。場所を変えよう。里見先生。隣町のSコーヒー、知ってる？」

広海が東高の生徒の学区外にあるコーヒーショップの店名を挙げる。

「し、知ってます。先月オープンしたばかりのチェーン店……ですよね？」

「そうだ。ならそこで話を聞こう。それでいいかな？」

「あつ、はい。わかりました。あの……」

まだその場から動こうとしない栄子が、上目遣いで広海を見上げる。

「何？」

運転席のドアに手を掛けながら、広海が怪訝そうに訊ねた。

「一緒に……」

「一緒に？」

「あの、一緒に乗せて行ってもらってもいいですか？」

そう言って助手席側に回り込もうとした栄子を、広海が俊敏な動きで阻止する。彼女の前にバリケードのごとく立ちはだかったのだ。

「凜香、早く乗れ」

「う、うん」

広海が目配せに応じるように頷き、凜香は促されるままに素早く助手席に乗り込んだ。

「そ、そんなあ……。鶴本先生。あたしはどうすれば」

行く手を阻まれて身動きが取れない栄子が、顔を引き攣らせながらも広海に懇願の眼差しを向ける。

「ああ、申し訳ない。話が終わったら、もう学校には戻らないのでね。帰りの足がないと、里見先生は困るんじゃないかな？ 君は自分の車で行った方がいいと思うけど」

腕を組んだ広海が、並んだ車の端の方に停めてある赤いセダンに

視線を移す。

「そ、そうですね。わかりました。なら、自分の車でいきます。でも……」

「まだ何か？」

「これって、鷺野先生もあたしたちの話し合いに同席されるってことですか？」

栄子がドア越しに、助手席に座る凜香を睨みつけて言った。

「そのつもりだが。何か不都合でも？」

「あつ、べ、別に……」

「では、お先に」

広海が栄子に背を向け運転席のドアを開けると、するりとシートに腰を沈めた。

みるみる栄子の顔が歪む。立ち止まったまま、何か言いたそうに一瞬口を開きかけたが、結局何も発することなくそのまま踵を返し、校舎に戻って行った。

凜香は広海と顔を見合わせ、ふうつとため息をつく。

今までに一度も経験したことのないような超重量級の疲労感が、凜香の両肩から背中にかけて、ずっしりとのしかかってくる。

広海の気持を受け入れることが、こんなに重く苦しいものだとは夢にも思わなかったのだ。

「広海。お願いだから、これ以上モテないでくれ……。私の身が持たない」

凜香のつぶやきをかき消すように車がエンジン音を発して、ゆっくりと動き始めた。

車の流れは良好だった。秋の気配などまだ微塵も感じられない幹線道路沿いの街路樹は、九月の陽射しをたっぷり浴びて、緑の葉を誇らしげに風に揺らしていた。

初めての赤信号で停止したとたん、広海がハンドルを叩き、声を上げて笑い出したのだ。

「何がそんなにおかしいんだ！」

意味不明な広海の笑い声が凜香の癪に障る。

「ヒトの苦勞も知らないくせに……。そもそも、広海が里見栄子に毅然とした態度を取らないから、こういう結果になるんだろ？」

凜香の行き場のない怒りは収まりそうにない。

「だって……いつひっひっひっ……。まさかおまえが、里見さんを連れてくるなんて思いもしなかったし……。あはっはっはっ！」

「だーかーらー。あんたは笑いきなんだよ！ ム力つくやつめ……」

凜香の頬が無意識にぷうっと膨らむ。

「はいはい、わかりました。おまえの言うとおりです。だからさ、そんなに怒るなよ」

「怒ってなんかいない！ ふん！」

凜香は鼻息も荒く、そっぽを向いた。

「俺は、今まで一度だって里見さんに甘い顔を見せたことはないし、口説いたこともない。それだけは信じてくれよな。なあ凜香。もしかして、俺とおまえが付き合ってることが彼女に完全にバレちゃったのか？」

「……………」

外の景色を見ながら、無視を決め込む。

「そうか……。まあ、いずれわかることだしな」

返事もしていないのに肯定されたと受け止めるあたりが、ますます腹立たしい。言い返すのも馬鹿らしくなった凜香は、ひたすら沈黙を守り続ける。

「彼女になんか言われたのか？」

「……………」

「やっぱりそうか」

何がやっぱりそうなのか……。広海の一人よがりもここまでくればたいしたものだと、凜香は抵抗する自分がむなしくなる。

「いつだったかな。一学期の期末テストが終わって、答案を返し終わった頃だったと思うんだけど。音楽準備室に突然彼女が押しかけてきて、そろそろ私と付き合って下さいと言われたことがあったんだ」

「ええっ？」

これには凜香も黙ってはいられない。あまりにも衝撃的すぎるではないか。

「バレンタインの時にあれだけきっちり断ったのに、なんでまだそんなことを言うてくるんだろうと、マジでうざかった。でも職場の同僚だし、大学の後輩だし……。あとあと気まづくなるのも嫌だろ？ 今はまだ彼女は作らないんだと言って、きっぱりと断ったんだけどな。そのことを彼女の都合のいいように解釈されたんだと思う」

「まったく、広海ときたら……」

なんのことはない。凜香との新しい恋がスタートする直前に、広海はちゃっかり彼女に何度目かの告白をされていた……というわけだ。油断も隙もあったもんじゃない。

「広海、頼むから、それ以上話をややこしくしないでくれ。彼女は相当あんに期待してるみたいだぞ。それに今年のバレンタインのお返しに素敵な物をもらったとか言ってたし。いったい何をあげたんだ。その気のない奴に思わせぶりの贈り物なんかするからこーい

うことになるんだ！　べえーっ！」

怒りの虫が収まらない凜香は、小さい子どもがするように目の下に人差し指を充てて引っ張り、おもいつきり舌を伸ばしてあかんべをした。

「あはは。ひつでえ顔。でも、おまえのその憎たらしくて変てこな顔も、やっぱり好きだなあ。ああ、キスしてえ」

次第に上半身を傾けてくる広海の肩を容赦なく押し返す。

「ふ、ふざけるなっ！　ちゃんと前見て運転しろ！」

おまけに、さつきからもぞもぞと凜香の膝の上を節操なく動き回る広海の左手を、払いのけるようにパシッと引っ叩いた。

「痛ってえー。ちょっとくらい、いいじゃないか……」

怒りに震える瞳で凜香に睨みつけられた広海は、とたん肩をすぼめ、おとなしくなる。

「わ、悪かった。もうしません、ごめんなさい」

凜香のエアギターならぬ、エア鬼のツノをひしひしと感じ取った広海は、ようやく真面目にハンドルを握り直した。

「で、話をもどるけど……。俺、里見さんにそんなもの贈ったっけ？　何も記憶にないんだけどな」

本当に憶えていないのだろうか。まさかそんなことはないだろう
と思いつつも、しきりに首を捻る哀れな広海にヒントを告げる。

「アクセサリーを入れる何か……とか言ってたぞ」

「ああ、思い出した！ ホワイトデーの時に、ギフトショップで適
当に見繕ってもらった陶器の入れ物に飴を入れて、チョコのお返し
にしたんだ。一個五百円くらいだったかな……。もしかして、それ
のことか？」

「……なるほど、そうかもしれない。里見栄子ときたら、その入れ
物をめっちゃくちゃ大事にしてるみたいと言ってたな」

「えっ？ そんなに？」

「うん。きっとその入れ物が、彼女には何ものにも変え難い素敵な
物に見えたんだろうな。ああ……。彼女がちよつとかわいそうにな
ってきたかも……」

好きな人からもらう品物なんてものは、決して値段では量れない。
何をどんな理由でもらっても、嬉しいことには変わりないだろう。

それを広海の自分への気持ちだとプラス思考で受け止めた里見栄
子なわけだが。

実は彼女、見かけとは違って、今どき珍しくくらい純情で一途な
心を持った女性なのかもしれない……。

凜香は俯いたまま、今日も胸元でひっそりと輝くダイヤのネック
レスを指先でなぞり、その手を広海の膝の上にそっと載せた。

37・今でも大好きです

心配していた渋滞もなく、二十分ほどで順調に隣町に入る。

ドライブスルーもある郊外型のSコーヒーは、カップルや男性の一人客で半分ほどの席が埋まっていた。

だがいくらここが隣町で、店内が空いているとはいえ、生徒がいないとは限らない。

凜香は席を決めるフリをしながら、高校生チェックも怠らなかった。

カウンターでコーヒーを受け取り、奥の円形テーブルの席を陣取る。

椅子はちょうど四脚。凜香はなるべく広海のそばに椅子を移動させて、彼の真横に密着ぎみに座った。

すると五分もしないうちに、カールした髪を弾ませながら、栄子がトレーを手にこちらに向かってくる。

新聞を見ていた中年男性が栄子をちらりと横目で見た。

カップルで来店中の青年も、さりげなく彼女を目で追っているのがわかる。

栄子の登場で、店内が一瞬華やいたように思えた。

「お待たせしました……」

そう言ってふっとテーブルの前に立ち止まった栄子は、残り二つの椅子を見て、困惑の表情を浮かべた。

椅子は円形テーブルを囲むように等間隔に並んでいるのではなく、

あきらかに凜香と広海から離れた場所にあつたからだ。

もちろん初めからそうなっていたのではなく、凜香が広海のそばに椅子をくつつけた時に、残りを引き離しておいたのだ。

凜香の栄子に対するささやかな抵抗と嫉妬心。これくらいなら許せる範囲内だろう。

「意外に早かったね。さあ、座って」

「あつ、はい」

広海に促され、栄子がしぶしぶ片方の椅子に腰を下ろす。

向かいに座った栄子は、時間的にあれからすぐに学校を出たはずなのに、化粧直しは完璧だった。

マスカラもしっかりと増量され、唇はまばゆいほどにグロスがきらめいている。

まさしく、女の魅力全開だ。広海争奪戦へのただならぬ意気込みが感じられるではないか。

凜香は決戦に備えて、コーヒーを一口飲んだ。

くせのない柔らかい味だ。が、しかし。広海の淹れてくれるコーヒーの方が何倍もおいしいような気がした。

彼と一緒に過ごした日の翌朝は、必ずコーヒーを淹れてもらっている。

彼がたてたコーヒーの香りで目覚める幸せは何物にも代え難い。

もう誰にも譲れない、広海の淹れてくれるコーヒーは自分だけのものだ、凜香は栄子を前に決意を新たにする。

「で、用件は何？ 里見先生」

いきなりだった。広海のストレートな問いかけに緊張が走る。おもむろにスーツの上着を脱いだ広海が、それを凜香の膝に預けるように載せた。とても自然な流れだった。

栄子の視線が広海の一挙手一投足を追う。彼女の口元が少し歪んだように見えた。

凜香の膝にある広海の上着から一瞬鼻先をかすめる匂いに、軽くめまいを覚える。

それは大人の男の匂い。抱きしめられた時に感じる広海の匂いだった。

そして彼がネクタイの結び目に片手をあてがい、左右に揺すって緩めるしぐさに、凜香はもはやノックアウト寸前にまで追い込まれる。

恋敵を前にしながらも、隣の恋人にときめいてしまう凜香は、もはや手の付けようがないほど恋の病が重症化してしまったのだ。

「あ、あの……」

栄子がしきりに膝の上の手を組み替えて、落ち着きのない様子で話し始める。

「鶴本先生は、前の彼女さんと、その……。年末に別れたとお聞きました」

「そのとおりだが」

広海は栄子を真っ直ぐに見て、答えた。

「じゃあ、なぜ。どうしてあたしの申し出を断ったんですか？ あたしのこと、そんなに嫌いなんでしょうか？」

早速栄子が噛み付いてくる。でも、どうしてそんな短絡的な理由になるのか。

栄子が嫌いだから付き合わないとするならば、広海が付き合わない人間は皆、彼が嫌っている……ということになってしまう。

「ははは……。それはまた極論だな。里見さんのこと、別にそんなに嫌いじゃないよ。国語の米倉先生も、数学の井本先生も。体育の弓削先生も嫌いじゃない。でも、彼女らとは付き合っていない」

国語科の米倉は、近々定年を迎える年齢ながら、すこぶるパワー溢れる独身女性教師の筆頭だ。

同性の職員の中で凜香が一番尊敬する先輩教師でもある。

数学科の井本は離婚経験がある四十代の美人教師だ。

家庭内別居中の三年の学年主任が、どうも彼女に言い寄っているらしい……という噂もある。

体育科の弓削は、器械体操をしていたというだけのことはあつて、小柄だがきびきびした動きで仕事にも真面目に取り組み、生徒からの信頼も勝ち得ている将来有望な新卒教師だ。

栄子も含めて、この四人が東高の独身女性カルテットと言いたい

所だが、凜香も正真正銘まだ独身だ。

なので五人合わせてクイントットになる……などとのん気なことを考えている場合ではない。

栄子が鼻息も荒く、身を乗り出して反撃を始めた。

「鶴本先生！ そんなへりくつは聞きたくありません。あたしは、あたしは……。せつかく先生がフリーになるのを待ってたのに、どうしてあたしと付き合って下さらなかったんですかって言ってるんです！ 実際に付き合ってみないと、あたしのこと、何もわからないじゃないですか。それにあたし、鷺野先生より若いし、女らしいし。誰が見たって、あたしの方が先生と似合ってるはずですよ！ 違いますか？」

栄子のあからさまな言い分に、怒りが込み上げてくる。

凜香のこめかみにギリギリと青い血管が浮き出た。

「里見さん、まさしくそのとおりだと俺も思うよ」

にもかかわらず広海が含み笑いをしながら、凜香をちらっと見るのだ。

もちろん凜香が穏やかでいられるはずもなく。

「な、なんだって！ なんであんたまで一緒になって、そんなひどいことを……」

凜香の怒りは到底収まらない。

「こんな私でいって言ったのは、どこのどいつだ！」

まあまあ……と広海がなだめるように凜香の肩をさすった後、テーブルの上の一点を見つめながら、ゆっくりと口を開いた。

「里見さん。少し、俺の話を聞いてくれますか？」

栄子は口元を引き結んで頷いた。

「世の中には男女の数だけ恋愛の形もいろいろあると思うんだ。里見さんの言うように、まずは付き合ってみてお互いの良さを知り、その結果実る恋もある……。ところが俺の場合、すでに愛する人が決まっていたから、そうする必要がなかっただけなんだ。凜香とはかれこれ十年来の知り合いで、そして、ずっとあこがれ続けた人だ。今やっと俺の気持ちに伝えてくれて、一緒に生きていこうと決心したばかりなんだ。もう迷いはない。だから里見さん、君とは……」

「ぶはっ！　ゴホッ、ゴホッ！」

凜香は突然の告白に、口に含んだコーヒーを思わずふき出してしまったのだ。

あわててハンカチで口を押さえる。それでも咳は止まらず、むせ続ける凜香の背中を広海の大きな手がいたわるように上下していた。

栄子がその光景をじっと見たあと、目を伏せた。そして、消え入るような声で話し始めた。

「そ、そうですか……。それが、先生の、鶴本先生の本当の気持ちなんですね。よく、わかりました。あたしだってこう見えても教師の端くれです。引き際は心得ているつもりです。先生を困らせるのは本望ではありません。でも、信じてください。あたし、ほんとうに鶴本先生が好きだったんです。今でも……。今でも先生のこと、

大好きです」

「里見さん……」

突然の告白劇に広海も驚きを隠せない。

「音楽室でピアノを弾きながら生徒を指導していらつしやるところも、職員室でパソコンに向かっていらつしやるところも、響きのある魅力的な声も、顔も……。全部好きなんです。うすうすは気付いてました。鶴本先生が誰を見ているのかって。先生の視線の先に鷺野先生がいるってこと、悔しいけどわかっていました。鷺野先生、あなたが本当にうらやましい」

「あ……」

栄子が顔を上げ、凜香と目が合う。

でもこればかりは、どうしようもないのだ。
後輩だから、彼女がかわいそうだから……。そんな理由で簡単に譲り合う類のものでもない。

「はつきり言って、どうして鶴本先生のお相手があなたなのか、未だに理解できません。でも鶴本先生が鷺野先生を選ぶとおっしゃるなら、あたしは、もうどうすることもできない……」

「里見先生……」

声を震わせながら自分の思いを話し続ける栄子に掛ける言葉が見つかからない。

「鶴本先生、鷺野先生。どうぞ、お幸せに。それと、あの話のことですけど。もう少し考えさせて下さい。では今日はこれで。失礼……します」

栄子は目にいっぱい涙を溜めながら立ち上がり、トレーを手にして誰とも目を合わさずに出て行ってしまった。

一口も飲まなかったコーヒーも、彼女と共に去っていく。

見事な引き際だとしか言いようがない。彼女の広海への思いは、やはり本物だったのだ。

ところがさすがの栄子も広海のあの宣言には、手も足も出なかったのだろう。

それにしてもどうだ。凜香の隣に座る男の、この余裕綽々（よゆうしゃくしゃく）な態度。

今までそうやって、いったい何人の女性を泣かせてきたのだろう。

ちょっと予定より遅くなったが、今から広海と一緒にスタジオに向かう。

教頭とは夕方に合流することになっているので、迷惑はかけていない。

修羅場も思いのほかあっさりとかぐりぬけ、さあスタジオに行くつかと腰を上げたその時だった。

凜香は広海のただならぬ様子に気付く。

「凜香……。俺、大丈夫かな」

「広海。どうしたんだ。どこか具合でも悪いのか？」

広海が青ざめた顔をして、すがりつくような目で凜香を見るのだ。

「俺さあ、さつき、ひどいこと言っちゃったよな？　どうしよう……。里見さん、きつと俺を恨んでるだろうな。俺のことが好きだって、あんなに一生懸命告白してくれたのに……。俺、人として最低なこと、やっちゃったんだろうか……」

「広海……。あんたもしかして、今まで自分から振ったりしたこと、ないとか……？」

「ない……。かも。それとなく遠ざけるようなことは言うけど、あそこまできっぱりと断ったのは……。初めてかもしれない。いつもこっちが振る前に振られていたから、そこまで言う必要がなかった、ってのもある」

「……。ったく、あんたって人は。優しさの安売りもほどにしないと、これからも苦労するぞ。でも私は嬉しかった。広海がきっぱりと言ってくれて、嬉しかったよ」

「そうか。おまえがそう言ってくれるなら、俺も自分のしたことに自信を持っていいんだな。でも彼女、来週ちゃんと学校に来るかな？　なあ、どう思う？　思いつめて……。なんてことにならないだろうか。ああ、どうしよう、ううっ……」

広海は低く唸りながら頭を抱え込み、何度も何度も大きなため息をついた。

凜香は男の隣に黙って寄り添い、ガクガクと小刻みに震える彼の肩に、スーツの上着をそっと着せ掛けた。

37・今でも大好きです（後書き）

2010年12月5日21:54 にメッセージを送って下さった方へ。

そして、始まるを気に入ってください、とても嬉しいです。
今更新が滞っておりますこと、本当に申し訳なく思っております。
最後まで書き続ける予定ですので、もうしばらくお待ち下さいね。
メッセージを残していただき、ありがとうございました。
これからも頑張りまゝす

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8783e/>

そして、始まる

2010年12月9日19時18分発行